



SatoNoHito

虚  
空  
奇  
譚

安堂龍



ホラー連作短編集

こくうりょうきたん  
虚空寮奇譚

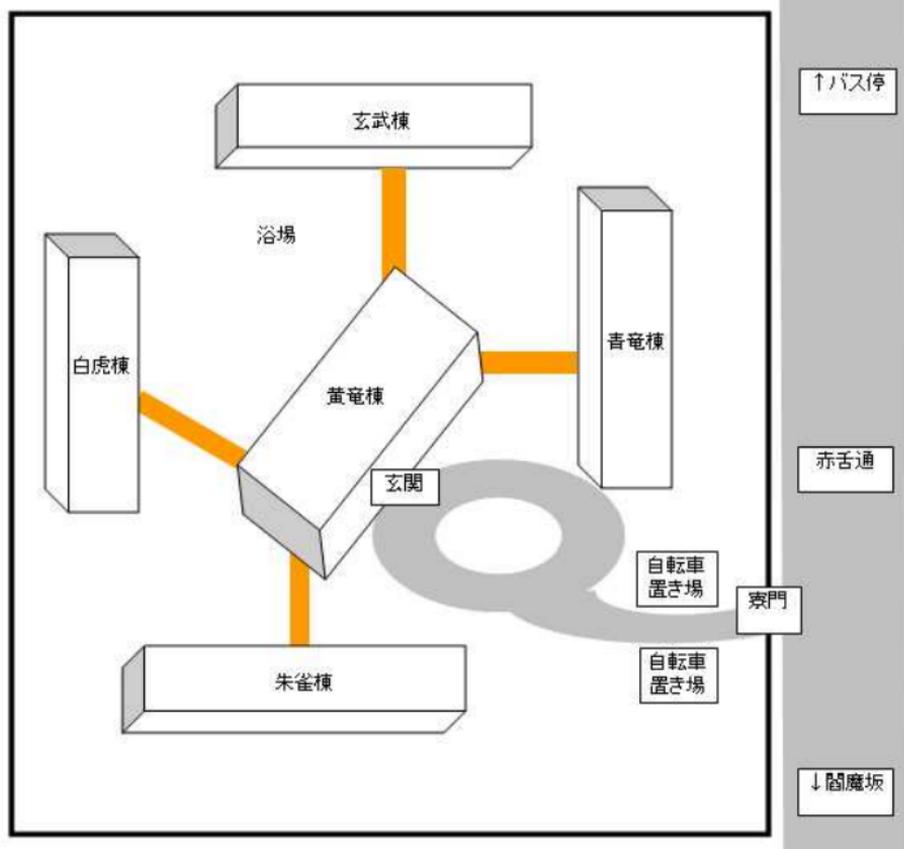
あんどおりゆう  
安堂龍



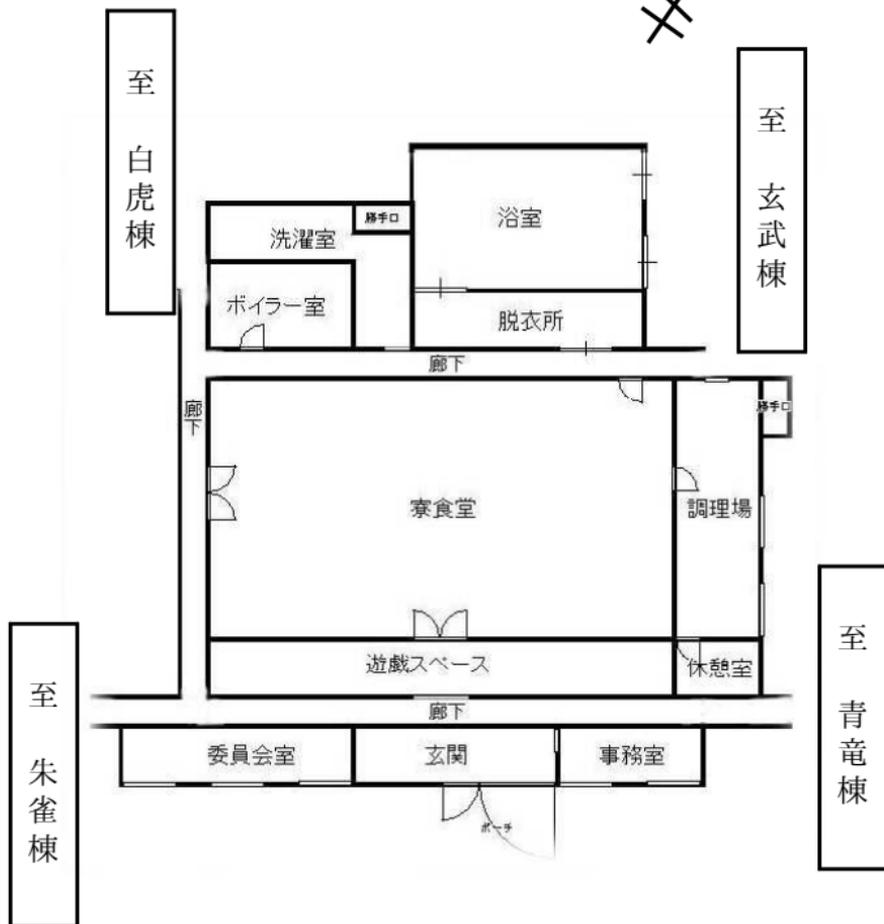
ソトノヒト・ノベルス

虚空寮 俯瞰図

4



# 黄竜棟 見取り図



目次

プロローグ	九
いつもいる	一三
酒に弱い先輩	二七
悪霊ハムスター	三九
風呂掃除の怪	五七
祭りのあと	七三
桜の横で	八三
夕闇、来る	九五
さきみどり公園の男の子	一一五
ボイルさん	一三五
七瀬の答え	一五九
開かずの机	二〇七
止められない	二四一
座談会 決起集会	二七三
座談会 土曜飯	二八五

座談会 寮犬

三一五

座談会 四番洗濯機の怪

三四三

座談会 集まったもの

三六五

エピソード

三九一



## プロローグ

小学校が取り壊された時もこんな気分にはならなかった。

空いたビールの缶を潰し、長テーブルの上に倒す。他の空き缶と触れ合い、音を立てた。その音は存外によく響いて、私ははっとした。パイプ椅子を軋ませ後ろを振り返り、観音開きの、閉じられた木製扉を見つめる。扉の上部に嵌められていたはずの曇りガラスは割れたのか、取り除かれて外が見える。くり抜かれた二つの四角の向こうには、渡り廊下が仄暗く真っ直ぐに続いている。

息をついて正面に向き直った。

四十人が集まれる談話室で一人酒というのは、なんとも不思議な感じがする。今夜は蒸し暑く、ポロシャツと肌との間に、じつとりと汗を感じた。

テーブルの上の、まだ口を開けていない青色の一升瓶の向こうに開け放った窓が見える。夏虫の音が続いている。窓の外は塀で囲まれており、公道からこちらの姿が目

撃される恐れは無い。

右側の壁へ視線を向けると、上部の針金が外れて傾いた黒板が、ぼんやりと浮き上がって見える。

『ありがとう虚空寮』

チョークで大きく書き殴られた文字を羽虫がなぞる。私は唾を飲んだ。コンビニで買ったロックアイスを銀色のボウルへ移し、アイスピックを差し入れた。氷をグラスに入れ、ウイスキーを注いだ。数回グラスを鳴らし、一息に流し込む。喉が焼ける。溜め息をつく。また酒を注ぐ。

何気なく、木製の長テーブルの縁をなぞってみる。塗装が剥げ、ギザギザの感触が指先に残る。改めて周囲を見渡す。床のタイルは数枚を残し、黒いコンクリート地を斑に晒している。蛍光灯の外された天井に目を向ければ、幾筋もの亀裂が走っている。当然だが、私が寮に住んでいた頃よりも傷んでしまっている。OBとして最後に寮を訪れてからももう二十年にもなる。時間は無情だ。壁には円形の時計が三時を示して固まっていた。

大学時代を過ごした虚空寮が取り壊されると聞いて、仕方のないことだと思う一方、もう一度この寮で酒を飲みたいという気持ちを抑えられなかった。同志は多く、虚空

寮の送別会が開催されたが、生憎あいにく私は仕事の都合で参加出来なかった。市町村自治体を取引相手にする都合上外せない案件で、どうすることも出来なかった。

落ち込んでいた私に、同期の一人が虚空寮の鍵を渡してくれた。どういう経緯で入手したかは知らないが、おかげで、私は立入禁止の看板を無視して、こうして夜の虚空寮に忍び込むことが出来たのだ。

虚空寮には五つの棟がある。玄関と食堂のある黄こうりゆう竜棟を中心とし、居室となる棟が東西南北に四つある。四つの棟はそれぞれ玄武、青竜、朱雀、そして白虎と四神の名が冠せられている。

これらの建造物はすべて平屋だ。窓の一つでも割られていればそこから侵入することも出来るのだろうが、寮生が去ってからまだ間もなく、有志のOBが不定期に見回りを行っていることも手伝い、外観は保たれていた。

もともと、私のいた当時に既に廃校とか、廃病院といった表現がしっくりくる傷だらけの建物ではあるが……今現在はそれに加えて周囲の雑草が触手のように伸び荒れ、壁面も深いひびに蝕むしばまれていた。しかしこれらの変化は不思議と、私の学生時代とさして変わらない雰囲気強調しているように感じられた。

——手の中で氷が鳴る。目を開くと琥珀色の液体がグラスの中で揺れた。同期には感謝せねばなるまい。こうして青竜棟の談話室で酒を飲むことが出来たことは、喜ばしいことだ。

夏の虫が窓のすぐ外で鳴き続けている。学生時代はウイスキーは苦手だったのだが、いつからか揮発するアルコールの匂いが病み付きになっていった。

羽虫がぶうんと耳元を通り過ぎてぞくりとする。この感覚もまた懐かしい。何もかもが懐かしく思い起こされる。低い笑い声、怒声、棟生会議中の溜め息。それから、奇譚蒐集などと馬鹿なこともした。

「下らぬことを……」

思わず声が漏れた。そうして次には、追い掛けるように笑みが湧いてくる。

グラスに落ちた羽虫を取り除き、酒を飲み干し、またウイスキーを注いだ。アルコールが回ってきたようだ。

事務室の影から持ち出したパイプ椅子は二脚。私の席の向かいに何となく置いたパイプ椅子。その空席がふいに炎天の陽炎のように揺らいだかと思うと、意識が遠のいた。

いつもいる

——その夜、僕は四〇二号室へ向かった。白虎棟へは滅多に足を運ばない。渡り廊下を歩いているとやたらと緊張してきた。

筆字で『白虎』と記された白い暖簾をくぐり、白虎棟へ足を踏み入れる。

造りはどの棟も同じだから、正面には談話室の扉が見える。観音開きの扉の上部はガラスが嵌めてあって中が覗けるようになっていて、電気が消えていて中の様子は分からなかった。何となく、青竜棟と違って整理整頓されてそんな雰囲気がある。

談話室の前を左右に伸びる薄暗い廊下を、僕は右へ折れて進んだ。

廊下を挟むようにして居室が配置されているけど、どこも扉は閉められている。まだ二十一時前だから皆起きている筈だ。これが僕の住む青竜棟だったら、談話室からは麻雀牌を混ぜる音が響き、全開になった各部屋の扉からは談笑やゲームなんかの音が垂れ流されているのだけだ。

同じ寮だというのに、棟が違うとこんなにも雰囲気が変わるものか。僕のスリッパの擦れる音が、誰もいない廊下によく響いた。

僕は四〇二号室の前に立った。木製の扉が重く閉じられていて、中の様子を窺うかがい知しることは出来ない。唾を飲み込んで、扉をノックして名乗った。銀色のドアノブがくると動いたかと思うと、中から柳田やなぎたさんがのっそりと顔を出した。

「おう、小岩井君か。入れ入れ」

柳田さんは農生部の三年生。大柄でラグビー部に所属している。短髪に太い眉で、着古した感じのオーバーサイズのジャージが威圧感を増幅させる。動物にたとえるならイノシシよりもサイって感じだ。

八畳程の空間にはベージュのカーペットが敷いてある。ベッドと机が右の壁際へ寄せられている。ベッドは足元が入り口側になる配置で、机の椅子に座れば窓を背にする格好になる。

ベッドの骨組みは金属製でところどころ錆さびびており、藁わらを固めたような分厚いマットも裂け目が見え、痛んでいる。ベッドの足元側の上方には、壁から迫せり出だす形でクローゼットが備えられている。

その奥にある机は、学校の職員室などで見られる事務用の物だ。その机の上には、

シルバーのA4サイズのノートパソコンが閉じて置かれている。

柳田さんが口を開く。低くてハスキーな声だ。

「しかし本当に物好きだな。怪談を聞いて回っている奴がいると聞いたが、本当だったんだ。小岩井君は確か一年生だったよな——おっと、ほらその辺に適当に腰掛けしてくれ。久しぶりに酒が飲めるからテンション上がるなあ」

部屋の左側には小型の冷蔵庫、小型テレビの他、卓袱台ちゃぶだいが置かれている。柳田さんが卓袱台を指したので、僕は座った。床にはストリート系のファッション雑誌が散乱していた。僕なんかは薄手のジャケットにジーンズとか簡単な組み合わせしかないから、雑誌を読む人は微妙に尊敬していたりする。

「ところで小岩井君は酒飲める？」

「あ、大丈夫です。実は僕、二浪してるんで……」

「へえ、賢そうな顔をしているのに意外だな。まあ、虚空寮に住んでりや大抵の奴は酒を飲むよな。しかも青竜なむさぐらなら尚更だ。酒飲みの棟だもんな。俺も青竜に入っていたら毎日酒が飲めたのに……なんて、冗談だけどな」

柳田さんは冷蔵庫の横に置いてあった袋からプラコップを二つ取り出した。赤いパッケージのパック酒をなみなみと注ぎ、僕の対面に座った。第一印象とは違い、中々

に気さくな人だった。

「さあ、それでは乾杯しようか。つまみが柿の種で何とも貧相だが、悪く思わないでくれよ」

僕達たちは乾杯を交わした。もう何人目になるだろう。こうして誰かから変わった話を聞かせてもらうのは――。

学生にとって皆平等に慌ただしい春が過ぎ、季節は夏を迎えようとしている。安い日本酒のどぎつい甘みが、舌の奥に染み込んでいった。



小岩井君は、酒を記憶が無くなるまで飲んだことはあるかな？ この察じゃ《トぶ》って呼ばれてるあれだ――そうかまだ無いか。まあ決して良いものではないから、経験けんしないに越したことはないが……。

それで俺がする話というのはな、飲酒に関することなんだ。いや何、別に小岩井君が下戸でも構わない話なんだがな。聞いておいて損は無いと思う。

学生の間では、酒を記憶が無くなるまで飲んで、気付いてみたら朝でした、なんて

話はよく聞くよな。だけどもたまに、酔い潰れてから朝になる前に、急に正気に戻る時がある。パツと目が覚めてしまうことがあるんだよ。君もこれから一度は経験すると思っけどね。

そういう時は大抵、頭がガンガン痛む。二日酔いに似た感じだ。真夜中に頭がガンガン痛むなんて勘弁して欲しいよな。せめて朝まで寝かしてくれりゃいいのに。

で、どうしてこういう状況になるかというところ——脳からの危険信号なんだよ。『早く起きろ』って、脳が警告してるんだ。

何が危険かって？ そりゃあ霊が迫ってるからさ。

……何だよその顔は。『この先輩、しょーもないこと言ってるな』みたいな顔。だっけどこれは本当の話だからな。信じるか信じないかは君次第だ。

なあ小岩井君、霊の目撃談が夜中に集中しているのはどうしてだと思っけ？

霊が夜行性だとかいう人もいるね。それから、霊なんか元々存在しないと主張する人の中には、「夜じゃなきゃ雰囲気が出ないから、夜に出て来るように作り話をこさえたんだ」なんてメタ的な意見もある。

でも本当は違う。霊が夜に目撃され易い理由……それは、夜の方が人間の神経が敏感になるからなのさ。全ての感覚が研ぎ澄まされる。

霊がたまたま現れたんじゃないんだよ。霊はいつも存在している。ただ、夜になってその霊が見えるようになってしまふ、霊を感じられるようになってしまふということなのさ。もちろん、夜以外なら絶対に霊を見ないって訳じゃない。朝でも昼でも、近寄りたくない墓地なんかあるだろう？

そういう場所はさ、そこが墓地だから、きつと幽霊がいるって無意識に考えてしまつて、そして脳が自然と「感じよう」としてしまふんだ。その結果、霊の存在を感じ取り、近寄りたくないと思つてしまふ。

怖い噂うわさが立つてなくなつて、夜中に墓地には近付きたくないだろう？ どうしてかというと、夜にそこへ近付いたら、嫌でも霊を感じ取つてしまふことが、本能で分かっているからなのさ。

見えてしまふから近寄るな……無意識の警告なのさ。

夜になつたら、まず視界が頼りなくなるだろう？ そうすると、脳は触覚、聴覚なんかの他の感覚で補おうとする。目の不自由な人はそういった感覚が鍛えられて、優れているよな。それと同じだ。

そして、研ぎ澄まされた感覚は捉えてしまふんだ。霊の存在を。

たとえば曰いわく付つきの場所に行った時、寒気がするだろう……霊は冷気を伴っている

から、それを君の肌を感じ取っているのさ。そしてその内、「ここにはいけない!」そんな気分になつてくるだろう……君が霊を感じていることを、霊が気付いているのさ。霊が君に興味を持ち始めている。近寄つて来る。それを今度は君の本能が捉え、本能は「早く逃げろ」と叫ぶ……。

少し別の表現を使うなら、夜には人間の能力が上昇するということだ。防衛本能が働くのさ。

部屋に電気が点いていたつて関係ないぜ。夜は視覚に頼ることが出来ない——それは大昔から、人間の本能に刷り込まれているんだからな。君は夜、知らず知らず視覚の不足分を補おうとしている。嫌でも、霊を感じる力を高めてしまつている。

靈感があるというのは、そういった防衛能力が平時から高まつている人のことをいうのさ。この場所には悪意を持った何かが潜んでいる……昼夜問わずそれを感じ取ることが出来るのさ。そういった人が曰く付きの場所で夜中に精神を集中したらそれこそ、霊の姿をはつきりと捉えられるだろうな。

これが、霊の悪事が中々表立つてこない理由の一つにもなっている。霊の中には、命ある者に危害を加えようとする奴もいる。だが上手くない。それは人間に警戒されているからさ。襲おうとしても、生きている人間には本能が働いていて近付けな

い。どうしても感付かれる。

たとえば夜中にシャワーを浴びるとしよう。シャワーの中では目を瞑るつぶだろう……すると背後に気配を感じないか？ 真っ青な男が見下ろしている感覚が無いか？ 髪を洗う君の手に、何者かの手が重なっている感覚が無いか？ それは条件が整うからなんだ。視覚が途絶え、さらには滴る水音で聴覚まで頼りなくなる。そういう条件下では、君の本能は活発に霊を捉えて引き離そうとする。

なあ小岩井君、もう分かるだろう？ 霊に狙われ易い、やす凄く危険な状況がどんな時かっつてことが。

——酔い潰れて眠っている時なんて思うかも知れないが、これが違うんだな。実は酔っ払って眠っている時は一番安全なんだ。何も考えずに泥のように眠っているから一見すると無防備なんだがね。その反面、防衛本能が最大限に発揮されるのがこの時なんだ。だっつてそうだろう。酔っ払って神経が鈍ってるんだ。手も足も動かせない。今襲われたら一溜まりひとたもない……そうになると、危険を察知しようとする本能がフル回転するのさ。

翌日、二日酔いで体がダルい理由の一つがここにある。疲れがとれる訳がないのさ。だっつて眠っている間中、最大レベルの警戒態勢でいるんだからな。

さつき話したろう。酔っ払って、記憶が途切れてしまったけど、朝を待たずに突然目を覚ましてしまうことがあるって。実はこれな、防衛本能が叩き起こしてくれたりすることなのさ。

おい起きろ、このままじゃ危ないぞ！　って具合だな。

こういった訳で、酔っ払って眠ってしまった時なんていうのは一番安全なんだ。じやあどういいう時が危険なのかというどだな……酔っ払ってる真つ最中なのさ。

酒を飲んで酔いに身を任せている時は、完全な無防備になる。周りが気にならなくなる。そうなると、奴らの思う壺なのさ。

酒を飲んでいてふと、我に返る時がないか？　今まで楽しく騒いでいたのに一瞬寒気がしたり、やけに頭が冴えてキョロキョロして、不思議と酔いが醒めてしまったり……。

それはな、君の本能の最後の警告なんだ。

狙われてるぞ！

気を付けろ！

——警告を無視して、本能を奥底にしまい込んで、頼りない意識で続き続けたいたら……そのまま霊に氣に入られてしまうかもな。

「靈は君にびったりと寄り添う。そして君の耳元に何度も何度も囁き続ける。「僕は安全な靈なんだよ」ってな。」

もしその言葉に騙されて本能が気を許したらその時は……。

俺はこういう危ない状況を何百回と経験した。どこでって、もちろんこの寮でさ。何せ一年生の頃はほとんど毎日と言って良い程に酒を飲んでいたからな。もちろん、もう流石さすがに慣れてしまったがね。「今日は日が悪いぞ」なんてことが分かるようになってたんだ。

なあ小岩井君、見たところ君はあまりお酒に強くないようだ。隠さなくても良いさ。君の顔色を見れば分かる。気を付けた方が良いぞ。酔っ払っているのに無理に意識を保とうとすれば、その分本能が機能しなくなってしまうからな。

同じように、夜中眠いのにはパソコンの画面を眺めていつまでも起きているなんてのも危ないぜ。今の君みたいにそうやって無理して目を開けて——いや、もう遅いか。はつきりと見える。君の後ろにびったりと寄り添う靈が見えるぜ。くっく……。喜べ美人さんだ。お似合いだぜ——。



私は吹き出した。

「止めるよ。柳田……」

薄く開けた目に、手の中のグラスが映り込む。琥珀色の液体が揺れている。指先にグラスの水滴が垂れる。耳元を羽虫が飛んでびくついた。

周囲へ視線を飛ばす。倒れた空き缶、傾いた黒板、傷んだ床、円形の壁掛け時計は相変わらず三時を示して固まっている。

——今の映像は何だ？

私の名は小岩井ではない。しかし、確かに白虎棟には柳田がいた。柳田は一学年下の後輩だ。私は四年間を寮で過ごした。だがしかし——。

「小岩井……彼は何者だ」

彼は柳田を三年生の先輩と、確かにそう認識していた。であればその時、四年生である私は同じ青竜棟に住んでいた筈だが……しかし小岩井を私は知らない。

いや。彼の声。柳田へ語り掛けた小岩井の声を思い出す。やや低く抑揚を意識的に抑えたような喋り方。頭蓋骨に響いた私自身——いや、彼自身の声には、確かに聞

き覚えがある。

私は彼を知っている？

頭痛がした。早くも二日酔いだろうか。頭を振って、息をついた。

私がおこに住んでいたのはもう二十年以上も前になる。古い記憶だ。考えにくいが、小岩井のことをすっかり忘れてしまっているのかも知れない。私が四年生の時の一年生。卒業論文に追われて忙しい時期のことだ。忘れることもあるかも知れない……いずれ、小岩井はこの寮に住んでいた男だ。そのことだけは、不思議と事実として受け入れられる。

氷を鳴らし、グラスの液体を口に運んだ。冷気が腹へ落ち、一瞬後には喉を焼いた。

窓の外には月明かりを浴びた白い塀が妖しく輝いている。数時間前、虚空寮と再会を果たした時のことを思い起こした。

赤舌通り前——最寄りのバス停へ到着した時にはもう辺りは夜を迎えていたが、湿度が高くむせ返るような暑さだった。周辺には民家も見えるが、昔と変わらずひっそりとしていた。しばしば利用していたスーパの名が変わっていた。

私は酒やらグラスやらを詰めたバッグを担ぎ、五分程歩いた。友人から聞かされてい

た通り、寮門にはロープが張られ、立入禁止の注意書きがされていた。

通常なら門扉が閉ざされるべきだが、それは不可能だ。元々閉じられることの少なかった門は、自動車の衝突事故で半壊したのをきっかけに取り払われていた……それが二十年経っても、世紀をまたぎ二十二世紀を迎えても、そのままだったらしい。廃寮する訳だ。

ロープをまたぎ、玄関に向かってコンクリートの道を歩いた。両側は自転車置き場となっている。当時は自転車が溢れていたが、今となってはもぬけの殻だ。道は郵便車両が通れるように、ロータリーへ続いており、ぐるりとターンした辺りに玄関ポーチが接している。月明かりで十分に夜眠がきいた。両開きのガラス扉に、私の姿が映り込む。

青いポロシャツにくたびれたジーンズ。年齢を気にしない格好をしているつもりだが、人相はそうはいかない。皺が深く、頬はこけた。我ながら老け込んだものだ。そろそろ髪を切った方が良いかも知れない。白髪が気になる。

私は鍵を取り出した。泥棒にでもなったような気分かというところでもなく、帰宅したような感覚だった。もっとも、寮の鍵など開けたことが無かったので少々手こずったが。

——遠くから救急車のサイレンが聞こえ、我に返った。グラスの中の液体に、無表情が映り込んでいる。

何とはなしに振り向いた。扉の上部、くり抜かれた窓の外は、中央の黄竜棟へと続く渡り廊下が闇に消えている。そこに誰かが佇たたずんでいるような気がした。胸が高鳴り、私は目を凝らした……これは恐怖ではなく、渴望だ。

やはり一人酒は寂しい。座り直し、向かいの空席を見つめ、つぶやいた。

「話を聞かせてくれないか。小岩井」

私はグラスに唇を付けた。グラスをテーブルに置き、目を瞑つぶった。

懐かしさが増していく。私も、小岩井と同じ事をしていた。奇譚蒐集。棟をまたいで奇妙な話を聞いて歩く。そんな馬鹿げたことを実行していた。

……実行していた？

脳裏に浮かぶその言葉に違和感を覚えると同時に、また、一瞬の揺らぎが頭を襲った。

## 酒に弱い先輩

僕は二一四号室を訪れた。

「おう来たねー小岩井。さっそく飲もうかあ。なんか小耳に挟んだけど、怪談を集めてるんだってえ？」

「別に怪談って訳じゃないですよ。変わった話っていうか、まあその、面白い話を聞いて回ってる感じです。そういえば、岡おかさんとはあんまり話したことないですよね」

「あー、そういえばあんまり話したことないねえ。俺は夜、研究室に入り浸ってて、普段の飲み会には出られないからねえ」

岡さんは大学院の二回生で、中肉中背で和やかな人だ。頭髪が薄いので、僕達新生歓迎の飲み会では笑いの種になっていた。声が少し高くて、間延びした話し方は何ともほのぼのとしている。

僕は単純に岡さんと酒が飲めるのが嬉うれしかった。

「一年生の時からそうやって色んな人と会話していくのは大事だよ。先輩達はすぐ卒業していっちゃうからね。俺なんかよりもっとためになる話が出る人も一杯いるし。」

岡さんは僕と変わらない位酒が弱い。何のこだわりか知らないけど、グレープフルーツの缶チューハイしか買わないと決めているんだそうだ。岡さんはそのチューハイ二本で顔を真っ赤にして、へらへらと色々な話をしてくれた。思い出話がほとんどだったけど、ふいに顔色が変わった。

「あー、この話はちよつと変わってるから、小岩井君も気に入るかも知れないねー。これ、炊事場に関する話だよ。」

言われて炊事場を思い起こした。各棟それぞれにある設備で、奥に細長い間取りで、ガスコンロが二基用意されている。両側に蛇口が三口ずつ。加えて右側には瞬間湯沸器もついている。それから料理台としてどこかの部屋の机が置いてある。上に新聞紙を敷いて、そこにまな板なんかを置いて調理を行う。もっとも、僕の場合はインスタント麺のために鍋の水を沸かす位のことしかしないし、料理は何を作っても失敗するから、調理台は不要だったりする。大の男が五、六人も入れば満員になる。炊事場はそんな感じの、なんとも微妙なサイズの空間だ。

岡さんは炊事場にまつわる、どんな話をしてくれるというのだろう。のほほんとした岡さんのことだから、ちよつと笑える話かも知れない。

グレープフルーツの爽やかな炭酸が喉を潤した。



寮食堂が休みの日とか、それからイベントの時なんかはよく皆炊事場で料理してるけど、小岩井君は料理得意な方かい？

……へえ、作ろうと思えば結構作れるんだ。いっつもインスタント麺しか作ってないみたいだったけど、意外だなあ。

でも羨ましいよ。俺みたいな料理が苦手な人はさー、レシピの本を見ながらでもちやんと作れないからね。ホットケーキも焦がしちゃうからさ、休みの日は大抵カップ麺だねえ。今ある瞬間湯沸かし器だけど、あれは去年設置されたんだよ。便利だよなえ。それまでは冬なんか食器洗うの大変だったんだよ。氷水に指漬けるようなものだもん。イベントの翌日の洗い物とか酷いんだよね。それはもう地獄の様な量でさあ。普通の寮だったらお湯位は出るよなえ。この寮ってエアコンも無いしさあ。知ってる？

何でも学長一派が自治寮びいきらしくてさあ、昔ながらの形態を出来るだけ残そうと裏で動いてるらしいんだよね。今どき相部屋の自治寮なんて、全国でも数える位しか残ってないんだよ——おっとごめんごめん。話がそれちゃったねー。

それでね。この話の主人公も料理が得意な人でね。今はもう卒業しちゃったけど、石山さんっていう人なんだ。スポーツ刈りでがっしりした明るい人でね。慕われてたよ。飲み会の時とかね、よく美味おいしいおつまみを作ってくれた……懐かしいな。

だけど石山さんには弱点があつてね。お酒に弱かったんだ。飲み会なんかだとも真まつ先に眠ねってしまったもんだよ。そういうところに、俺は親近感を持つてたねー。

でね、その日も飲み会があつたんだ。寮自治委員の改選時期で、任期を終えた人達たちのために、談話室でお疲れ様の飲み会をやつたんだ。任期完了の人を酔い潰すのが目的みたいな飲み会なんだけど、そのノリが飛び火して、誰彼構わずイッキコールを掛けて飲みまくるつてのが通例なんだ。通称、飛び火飲みつてやつだね。数あるイベントの中でも壮絶な飲み会になるのが、このお疲れ様飲みなんだ。小岩井君もそろそろ経験出来ると思うけどね。

それで石山さんもこの時の飲み会ではべろんべろんに酔つ払つて、自分の部屋に帰つて眠ねってしまったんだ。

それから何時間か経<sup>た</sup>った時、石山さんは急に目が覚めたんだって。事前に枕元に敷き詰めておいた新聞紙が、耳元でガサガサと鳴った。飲み会の後は寝ている間に盛大にリバーズってことがよくあるからねー。石山さんは新聞紙がそのままほっとしたそうだよ。

時刻は午前二時を回っていた。もう飲み会は終わっていたし、誰かが起きてる気配も無かったそうだよ。皆文字通り、死んだように眠っているんだねえ。

その時の石山さんは寝ゲロが無かったせいとか、強烈な二日酔いって感じで、かなりつらかったらしい。頭がガリガリしていてね。そういう状態だと眠れる気もしなかったんだ。

こういう時は水分を取ってじっとしておくしかないと思うんだけど、石山さんはちよつと変わってて、無性に脂っこいものが食べたくなったそうだよ。余計に気持ち悪くなりそうだけどねえ。

そこで石山さんが自室の冷蔵庫を覗くと、飲み会用に買って使わなかったブロック肉があったらしい。早速炊事場に行つてね。肉を適当な大きさにカットして、フライパンで炒<sup>いた</sup>めたんだ。

慣れたもんだよ。油を敷いたフライパンの上で肉がジュージューいつてる。柚子<sup>ゆず</sup>コ

シヨウで味付けをして、香ばしい匂いが漂ってあつと言う間に完成。部屋に戻ってパクパクと食べた。ここまでほとんど無意識で行動してたって石山さんは言ってたから、料理が得意な人は凄いいねえ。

石山さんは食べ終わると気分の悪さも大分落ち着いてきてね、そのまま横になってすんなり眠れたんだそうだよ。

で、翌朝のこと。後輩の何人か——俺もその中にいたんだけどねえ。俺達は石山さんの部屋の扉をノックもせずにごじ開けて、中に飛び込んだんだ。石山さんは何事かと思つて凄く驚すこいていたよ。

どうして石山さんの部屋に押し掛けたかというとねー。炊事場から石山さんの部屋まで、点々と血の落ちた跡が続いていたからなんだ。

ベッドの上の石山さんは飛び起きて、大慌てだったなあ。

「え！ 血だつて？ そうなのかい？ ごめんごめん、俺は大丈夫だよ」

石山さんは昨晚のことを整理して、皆に聞かせるように言った。夜中に起きて、炊事場で料理して、そのまま部屋に戻って来た——心当たりは無かった。

「鼻血でも出たのかな？」

石山さんはそう言つて鼻をすすつて、左手でこすつたんだ。その時だよ。石山さん

と俺達は、ほぼ同時に叫んだ。

どうしてかっていうとねー。石山さんの左手の、人差し指が欠けていたからなんだ。第二関節の辺りから先がすっぽりと無くなっていた。そしてそこから大量の血が流れた跡があった。

先輩は昨日の夜、肉を切るのと一緒に自分の指を切り落としてしまったんだねえ。酔ってぼんやりとした頭だと、その事態に全く気が付かなかったんだよ。

そして切断された人差し指はというと……それを想像したんだろうか、石山さんは俺達の目の前でええぞいたかと思うと、激しく嘔吐おうとしてしまった。

ねえ小岩井君、酔っ払った時は刃物を使わない方が良いよー。石山さんみたいな、料理が得意な人でもあんなことになっちゃうんだからねえ。

そうそう。切断された指は結局どこからも発見されなかったんだ。石山さんの吐瀉物としやぶつの中にも、ね。だからきつと石山さんの胃の中で消化されて……おっつごめんよ。ちよつと気持ち悪かったかなー。あははー。



——私は前方を睨んだ。

「あははじゃないですよ。ちょっとどころじゃなく気持ち悪い……」

しかしそこには開け放たれた窓と、白く光る塀が広がっているだけだった。

小岩井という男の奇譚収集、第二夜ってことか。私は溜め息をつき、左手でシャツの襟元を動かして風を送り込んだ。

左手……無論、私の指は欠けてはいない。

トイレに向かうことにした。談話室を出ると左右に廊下が伸びており、正面には黄竜棟への渡り廊下が続いている。青竜の青い暖簾は、もう掛けられていない。

私はすぐ斜向かいの扉を押し開けた。木製の片開きのドアが軋む。

各棟にあるトイレは数人が使えるように、それなりに広いスペースが割り当てられている。小便器が四据えある。大便器の方は和式が三据えに、洋式が二据え——私が住んでいた時はそうだった。

個室を覗いてみると、やはりそのまま変わりなかった。全部洋式に切り換えても良

さそうなものだが、飲み過ぎて吐く際には和式でないと詰まって大変なのだ。和式便所は先人の偉大な遺産だろう。そんな詰まらないことを考えながら、小便を済ませ、水を流して手を洗い、ハンカチで手を拭いてトイレを出た。

談話室とは逆方向に目を向けた。トイレのすぐ隣には、くだん件の炊事場がある。覗いてみる。

料理用の台として使っていた古机はそのままだったが、そこに山と積まれていた食器類は一つも残っていないかった。

イベントの際、一年生が料理を作る機会があり、「邪魔だどけ」などと叫びながら走り回ったことを思い出す。

懐かしい。しかしここで、指を落としてしまった人もいるのか。岡さんには世話になつたが、そんな話は聞いたことが無かつたな。

腹の奥に重いものを感じながら、妙なことに気付いた。並んだ蛇口の一つを捻ひねる——当然のように、水は出なかつた。トイレに戻る。先程私は水を流した筈はずで、手も洗つたはずだ。

しかし、便器も蛇口も水は流れなかつた。

私は頭を振つた。酔っている。飲んだのは三百五十ミリリットルのビール二缶とウ

イスキー数杯。元々アルコールに強い方ではない。やはりもう随分と酔ってしまったのだらう。しかし……。

ポケットから取り出したハンカチはじつとりと濡れて<sup>ぬ</sup>いた。指先でその湿りをなぞる。粘ついた感覚がある。指先をこすり合わせた<sup>が</sup>、粘つきは気のせいだった。しかし、湿りは気のせいではない。

私は首を傾<sup>か</sup>げながらも、どうでも良いことだと思ひ直し、談話室へ戻った。

グラスに残るイススキーが氷を溶かしている。私はそれを飲み干し、ボウルから氷を取りグラスに入れ、またイススキーを注いだ。

置かれたままの一升瓶を眺めた。今は日本酒の気分ではない。そうだ。酔い潰れよう。私はそう決めてここへ来たのだから。

「なあ、もう一つ頼むよ。小岩井……」

小岩井の名を口に出す度、なぜか記憶の水底が掻<sup>か</sup>き立<sup>た</sup>てられるようだった。彼のことを誰かから聞かされたことがあるような、むしろ、彼と話した記憶があるような気がしてならなかった。

ふいに、止まっているはずの壁掛け時計の針が音を立てて動き出したような感覚があり、私はそちらを見やった。時計は三時を示したまま、相変わらず止まっている。

甲高い耳鳴りがする。動かない秒針に視線が集中していき、耳鳴りが徐々に大きくな  
っていく。

私の視界は白く途切れた。



## 悪霊ハムスター

夏が去って過ぎ易くなった頃、玄武棟の同期から、OBがやって来ると聞かされた。そのOBは高峰たかみねさんといって、仕事の都合でこの町に宿泊するということで、ちよつと寮の様子を見に来るといふことだった。

僕は玄関で待ち構えておいて、思い切つて高峰さんに話し掛けた。

その夜僕は、高峰さんに居酒屋に連れて行つてもらつた。

高峰さんはひよろりと背の高い人で、皺しわの深い顔なのにぼさぼさの茶髪に長髪ですーツを着込んで、味のある雰囲気を持つていた。二十年程前に寮自治委員会の副委員長、つまりは副寮長を務めていた人だった。

低いけど妙によく通る声をしていた。昔話なんかさせたらしみじみ聞いてしまいうな声だ。髪型も手伝つて、年齢を感じさせない若々しさがあつた。

「安い居酒屋で悪いが好きなものを頼んでくれ」

僕が決め兼ねていると、高峰さんは頼み過ぎでは？ という位に注文した。よく食べる人には見えないから、きつと僕に気を遣ってくれたのだろう。

ビールで乾杯すると、高峰さんは今の寮の様子を聞きたがった。僕としては寮生活も半年経<sup>た</sup>っているとはいえ、まだ知らないことの方が多いように思う。寮自治委員が作成した資料を読み合わせしたり、一年生同士で交流を持ったりするイベントもあり、退屈はしていない。そんなとりとめのないことを話した。

「ところで、俺に話が聞きたいということだったけど、どんなことに興味があるんだい？ まだ一年生だから、まさか就職活動<sup>つて</sup>ことはないだろう？」

「寮にまつわる、不思議な話が無いかと思いましたが」

「不思議な話？ 学校の七不思議みたいなやつかい？」

「ええまあ、そんな感じですよ。実は寮でも聞いて歩いてるんですけど。皆には怪談集め<sup>つて</sup>呼ばれてますね」

「ふーん。怪談集めか。面白い趣味だね」

高峰さんは顎を搔<sup>か</sup>いた。何かを考えている様子だ。

「一つ面白い話があるよ。ちょうど小岩井君が気に入るような話だ。しかし不思議なものだね。寮に四年間住んでいて色んな奴<sup>やつ</sup>と話してきたけど、いざ変わった話が無い

「だろうかと思いきこしてみると、俺が知っているのはこれからする一つだけなんだ」  
僕は思った。一つだけでも変わった話を知っていることの方が、不思議なんじゃないだろうか。

高峰さんは、他の人と同じように、嬉しそうな表情で語り始めた。嘘か本当かはこの時の表情で分かるんだ。高峰さんも、きっと嘘はつかないだろう。

僕も嬉しくなった。



小岩井君はさ、人と話すのは得意かい？ ……何、苦手だって？ そいつは意外だな。OB相手に話を聞こうなんて普通出来ないのに、苦手だって言うのかい。ふんふん。聞き上手って訳か。確かにそんな感じがするね君は。

俺がこれからするのは、俺が虚空寮に住んでいた頃の後輩の話なんだ。彼も人と話すのが苦手な奴やつだった。名前は渡辺太郎——太郎なんてシンプルな名前、今どき珍しいよな。俺が二年の時の新入寮生だった。

話すのが苦手な奴なんて、虚空寮みたいな自治寮には向かないんだけど、そんな奴

がどうしてまた寮に入ったかというのと、単純に経済的な理由からだった。

寮に住まなければやっていけないって学生は、今はそんなにいないかも知れないけど、当時は結構いたんだ。

太郎はいつも一人でいたなあ。あいつは小柄で小太りでね。見るからに暗い感じがした。顔全体が垂れてるっていうのかな。内気な性格が外見に現れていたよ。

入寮してすぐの頃は同室の奴も心配してた。俺は俺で自分の同室の一年生のことで手一杯だったからあんまり太郎と話す機会も無かったんだがな。

太郎はいつも寂しそうで、かといって自分から人と関わろうとはしない、人を遠ざける感じのする奴だった。

そんな太郎が、ある日突然動物を飼い始めたんだ。一匹のハムスターだった。籠の車輪の中を、トコトコと走り続けている。それを太郎はぼーっと眺めているんだ。

「ハムスター、好きなんだ？」

同室が聞いたたら、

「いえただ、何となく……」

そんな答えが返ってきた。同室は妙な気分になったそうさ。それというのも、太郎は寮に住まなきゃやっていけないような経済状態だったからな。そんな奴がわざわざ

ペットなんか飼わないだろう？ エサ代も掛かるだろうし。

それでもハムスターを飼いたいっていうのは、どんな理由があつたんだろう。

なあ小岩井君、君はどう思う？

寂しかった？ ……そうだな。俺もきつとそうだったんだろうと思う。寮には確かにたくさんの人が住んでいるけど、だから寂しくないなんてことにはならないんだ。

むしろ周りが楽しそうにしていたら、一人でいる奴は余計に寂しくなっちゃうよな。一人で生きるのがつらいんじゃないかと、周りが一人で生きていないのを感じ取るのがつらいんだ。俺は自分の経験からそう考えるけど、まあそれは置いておこう。

それでハムスターを眺めている間、太郎は幸せそうだった。傍から見ていても、太郎はハムスターに相当癒いやされてるみたいだった。

本当、ハムスターってのは可愛かわいいもんだよな。車輪の中をせかせかと走り回るハムスター、小岩井君は見たことある？ 堪たまらない可愛さがある。他の一年生も、それから俺もさ、ハムスターを見に行くのを口実にして少しずつ太郎と話すようになったんだ。

やっぱり、何かきっかけがあると話し易やすいよな。きっかけがなくても話し掛かけられる奴つてのもいるけど、それは才能だと思うよ。普通の奴は、何の接点も無い奴とは

話せないもんな。

太郎は結構面白い奴だったよ。宗教のこととかやけに詳しくてな——本人は無宗教なんだが、そんな冗談を言ったら神様に怒られるぞなんて位の、きつい冗談も言っていた。

太郎の方も、ハムスターがきつかけになって、徐々に皆と打ち解けていったんだ。だけど二ヶ月位経った時、ハムスターは突然死んでしまったんだよ。

病気だったのかも知れない。小動物には珍しくないことらしいけど——太郎、えらい落ち込んでたなあ。

ペットロスってやつだ。実際あいつの生活見ても、ハムスターの世話が完全に生活リズムに食い込んでたからさ。生活リズムって言っても、もちろんハムスターの世話自体はそんなに時間取られることではないんだけど。太郎はよくハムスターを眺めてたり、遊んでやったりしてたんだけ。その時間が突然取り上げられたんだから、ショックだよなあ。

ハムスターの亡骸を裏庭に埋めて、それから一月経っても、太郎は無表情にぼーっとしてたよ……空になってしまった籠を眺めながらね。

俺さあ、こういう時に何て声を掛けるべきか迷ってね。小岩井君なら、どうする？



高峰さんはビールを数杯飲み終わり、熱燭あつかんを注文した。お猪口ちよこは二つと言った。飲めるかと聞かれたので、頷うなずいた。

僕は先程の質問に答えた。

「ペットロスは難しいですけど、僕はそうですね。何て声を掛けるかなあ……新しいの飼えば？　なんてことは絶対言えませんしね」

「そうなんだ。難しい問題だよな。何を言っても太郎を傷付けるだけのようない気がしたんだけど、だからといって何も声を掛けてやらないのも、こつちが堪たまらない——ちよつと失礼」

高峰さんはトイレに立った。僕はぼんやりと考えた。ペットロスの友人に、何て声を掛けるか。僕なら、考えた末に何も言わないかも知れない。時間が全てを解決してくれる。そう考えるだろう。

だけど、高峰さんの「こつちが堪らない」という気持ちももつともだ。相手を思うなら思う程、何もしないでやるのは難しいことだろう。何もしない方が、相手にとっ

て良いことだとしても……。

何か、当たり障りのないことを言っただけでやるのも必要かも知れない。相手でなく、自分が救われるために。

高峰さんが戻ってきた。僕は過去猫を飼っていて、その猫が突然死んでしまったことなどを話した。そうこうしている内に熱<sup>あつかん</sup>爛<sup>らん</sup>が出されて、僕たちは改めて乾杯した。

高峰さんは苦笑して見せた。

「面白いやこの話、どこが不思議なんだよって感じがするよな。まあもうちょっと待ってくれよ。これから、面白くなるからさ」

高峰さんの落とした視線が、面白いという言葉と裏腹に暗く感じられて、僕は背すじに寒いものを感じた。

きよろきよろと周囲を見渡す。白虎棟の柳田さんから聞いた話を思い出した。霊はいつも存在していて、チャンスを窺<sup>うかが</sup>っている。そして酔っ払っている時、無理して意識を保とうとしている時が、一番危ないと……。背後から誰かに見つめられているような感じが、どうにも拭い去れない。僕は居住まいを正した。



悩んだ末、落ち込んでいる太郎に、俺はこう言ったんだ。

「太郎が元気を出してくれることを、あいつも天国で望んでるんじゃないか？」

少し臭過ぎる台詞せりふだとは思ったよ。だけど、それが一番、太郎を元気付けられるんじゃないかと思った。

でも駄目だった。

「先輩にあいつの何が分かるんですか」

太郎はそう言って、恨めしそうに俺を睨にらんだんだ。あの落ち窪くぼんだ目……今思い出してもぞつとするよ。悲しくてつらくて、何でも恨みたくなる——そんな感じだったんじゃないかと、そう思うよ。

かえって太郎を傷付けてしまった。何も言わない方が良かったかも知れない。頭では分かっていたんだが、結局自分が言いたいことを言って裏目に出たんだ。最低だよ。

俺が肩を落として廊下を歩いていると、太郎の同室に「今はそつとしておいてくれ」と言われてね。俺は太郎と距離を置くことにした。あとは時間と、同室がどうにかし

てくれるだろう。そんな風に考えることにした。

——それからしばらく経ったある日の朝、俺は炊事場で顔を洗っていた。そこへ誰かが駆けて来て、大声で俺の名を呼んだんだ。誰かと思えば太郎の同室だった。そいつがいきなり俺の腕を掴んでな。

「頼む。とにかく来てくれ」

俺はそいつの部屋へ連れて行かれた。そして目の前の光景に呆然としてしまった。からんからん……そんな音をさせて、懐かしい車輪の音が響いていた。籠の車輪の中で、ハムスターが元気に走り回っていたんだ。死んだハムスターとそっくりだった。かぶりつくようにして、その様子を太郎は見つめていた。

俺はまさかと思いつながら、太郎に問い掛けたよ。

「新しいコ、飼うことにしたのか？」

太郎は俺の方へ首を捻じって、にたつと笑った。

「いいえ。朝起きたら、帰って来てたんです……」

そしてまたハムスターへ視線を戻した。帰って来てた？ その表現の意味を思っ  
て首を振った。あの世から帰って来たとしても言うのだろうか。嘘だ。俺は隣に立つ同室に、耳元で囁いた。

「お前がこっそり、太郎のために買い与えたんだろう？」

「もしそうならそう言うだろう。俺は昨日、朝五時までこの部屋でレポートをやっていたが、籠は空のままだったぜ……ちよつと寝て起きたら、いきなりカラカラしてやがるんだ。俺はてつきりお前がやったんじゃないかと思って、ここへ連れて来たんだよ」

嘘をついている感じは全くしなかった。やりとりが聞こえたのだろう。太郎が籠を見つめたまま、上ずった声で言った。

「やっぱりそうですね。生き返ったんですね」

満面の笑みで、何度も**呟**いていた。

その日は玄武棟の奴らみんな不思議がって、ハムスターのことを見に来た。そして口々に「前の奴にそっくりだ」と言った。太郎はその感想に対して何度も同じ言葉を繰り返した。

「そっくりじゃない。生き返ったんだよ」

その日から太郎は元気になった。だけど、ハムスターは一体どう説明すれば良い？ 気味が悪いよな。いくら太郎が元気になっても、死んだものが生き返るなんて、あの訳が無いんだ。ましてやハムスターの死体は、太郎の手で庭の隅に埋められたんだ

から。そして次に考えたのが、その埋められた土が今どうなってるかってことだ。いや何、生き返ったかどうかの確認ではなくて、生き返ってないことの証明がしたかったのさ。

案の定、土の様子に変化はなかった。死んだものが這い出してきた様子なんかなかったのさ。

何？ 掘り返してみたかだつて？ 馬鹿を言うな。そんな必要あるか。あれはやっぱり太郎がこっそり新しいのを連れて来たんだらう。明け方まで起きていた同室の目を盗んでこっそりと、な。

何のためにこっそり持ち込んだか……その謎を考える暇もなく、また一つ心配事が増えた。

日を追うごとに、太郎が痩せこけていったんだ。

誰が見ても分かる位、異常な痩せ方だった。元々小太りでコロコロした奴だったのに、腕なんて骨と皮だけみたいにガリガリなんだよ。

立っているのもつらいだろう——その筈はずなのに、太郎は楽しそうにハムスターの世話をしているんだ。その様子といったら、正に不気味の一言だったな。

太郎は、まるでハムスターの召使いみたいだった。

「あのハムスターは悪霊なんじゃないだろうか……」

寮食堂で、太郎のいない時に誰かが言ったその言葉を、笑い飛ばす奴は一人もいなかった。

俺は心配になって太郎の部屋に向かった。すると、何やら激しく言い争う声が聞こえた。

「い、嫌です。絶対嫌です！」

同室の奴が太郎に何か頼み込んでいて、それを太郎は拒んでいるようだった。俺は部屋に入った。

「おう高峰か。お前からと言ってやってくれ。このハムスターは悪霊だって。手放した方が良いつてな」

「そんな馬鹿な話ある筈はずないです……ねえ高峰さんもそう思いますよね。悪霊なんて。そんな漫画みたいな話あり得ないって、説得して下さいよ！」

俺に言わせれば、ある朝起きたらハムスターが生き返ってましたって方が漫画みたいなんだけどな。

それに、現実には太郎は考えられないスピードで痩せこけてしまった……なあ小岩井君。君ならどうするか。

ハムスターを手放すべきだと言うか。手放すべきじゃないと言うか……。

——俺は考えた末、こう答えた。

「太郎、このハムスターは手放すべきだよ」

俺のことを酷いとか、悪霊を信じるなんて馬鹿だと思うかもな。でもあの時の太郎の様子は本当におかしかった。ハムスターが原因かも知れない。そう信じてしまったんだよ。

笑えるだろうか？ 太郎に病院を勧めるでもなく、いきなりハムスターが原因だと考えるなんて。でも、あの時はそうとしか思えなかった。

「やっぱり手放した方が良いよな。ほら太郎、高峰もそう言ってるんだし」

俺の言葉を聞いて、同室はほっとした様子で微笑んだ。太郎は首を振って叫んだ。「そんな、コイツが悪霊だなんて、本当にそう思ってるんですか！」

「俺達はお前のことを心配してるんだよ。分かってくれ」

必死に太郎を説得したよ。このまま痩せていたら命に関わるかも知れないんだ。

「嫌だ……嫌だ……」

太郎は拒んだが、俺は半ば強引に籠に手を掛けた。その瞬間だった。

さらさらして高い、割れた声が響いた。気持ちの悪い鳴き声——いや、雄叫びと呼

んでも良い。黒板に爪を立てて引つ掻くあの音と、猛獣の唸り声を大音量でミックスしたような声が部屋中に響き渡ったんだ。

その声を聞いて俺達は震え上がった。明らかにハムスターの口から発せられた音だった。俺は思わず籠から手を離れた。籠は床の上に落ちて跳ねた。籠の中で暴れ回るそいつは、姿形はハムスターでもまったたく別の存在なんだ——そう信じていることが出来た。

「な、なあ太郎……コイツは……」

太郎は俺の目を見て、真っ青になっていた。太郎もようやく分かってくれた。これは間違いなく普通のハムスターじゃないってな。

——それからどうしたって？ それからが困っちゃまってなあ。

だって、殺す訳にもいかないだろう？ どんな祟りがあるか分からんし、悪霊って言ったって、見た目はすごく可愛いしさ。ハムスターがちよろちよろと、籠の中で暴れ回ってるだけだ。

相変わらずからんからん……なんてやってるのを見てると、思わずほころじまうよ。ほんわりしちまう。

それに悪さするって言ったら、多分だけど太郎の生気を吸い取る位のもんだらう。

殺せないよやっぱり……かといって太郎の体力ももう限界だ。

俺達は必死に策を考えた。そしてやっと、一つの糸口を掴んだのさ。俺は憔悴した太郎を横目にして、同室の奴に注目したんだ。首を捻って考え込んでいるそいつは、いつもと変わらず元気そうなんだよ。

——どうして同じ部屋で暮らしているこいつは生気を奪われないんだろう？

考えてみれば妙だ。虚空寮にはごまんと人がいる。太郎一人から生気を吸い取らなかつたって、皆から少しずつ頂戴すれば良い。そうすればこのハムスターが悪霊かも知れないなんて噂だつて、起こらないじゃないか。

そこで俺は仮説を立てた。

「この悪霊は、飼い主からしか生気を吸い取れないんじゃないか？」

次の日のこと。太郎と話し合つて、試しに俺が飼い主になってみたんだ。するとどうだ。一日や二日は何ともなかったんだが、三日目からやけに体がつかなくなってきたじゃないか。

反対に太郎は少し元気を取り戻したみたいだった。俺がしんどい間ずっと、太郎はハムスターの様子を見に俺の部屋へ入り浸っていた状態だったんだが、どうやら生気を吸われている様子はない。俺の同室の一年生も平気だ。

——俺の仮説は正しかったんだ。

それからはな、二日ごとに玄武棟生が交代で飼い主になっていったよ。ローテーションさ。全員飼い終わったらまた一人目に戻る。

愛の共同作業ってやつだな。結局、あの悪霊はただの可愛いペットさ。太郎は自分の番が回ってくるまで寂しそうだったが、生気を吸われるよりはマシだよな。

俺が卒業する頃には、太郎はすっかり人当たりも良くなってたよ。ハムスターがいなくても人間関係をやっていけるようになっていた。

あのハムスターは太郎が卒業してからもしばらく、幸福の象徴として玄武棟で飼われていたらしいが、どうしたことが、ある年にぽっくりと死んでしまったと風の噂に聞いた。

悪霊にも寿命があるのかねえ——と、俺の話はこんなところだな。

面白かったろ？

……な、何だよその顔は。誰も怖い話をするとは言ってないだろうに。



## 風呂掃除の怪

虚空寮は自治寮で、建物の管理は大学側がしている。だけどそれ以外の寮生活の規則は全て寮生の手で決めていた。寮食堂が土日祝日に休みなのは寮生が決めたことだし、風呂が夜十一時までしか入れなくて、その時間から風呂掃除を始めることも、寮生が決めた。

「お疲れ様でしたー」

気温が高まり夏本番って感じになってきた頃、初めての風呂掃除を終えた時のことだった。掃除は二十三時から始まったけど、一度に十人程度が使える浴場を掃除するのは中々骨が折れて、もう零時近かった。

湿った裸足はだしにスリッパが気持ち悪くて、ハーフパンツのスースーする感じもあんまり気分の良いものじゃなかった。出来ればもう一度風呂に入りたい……僕だけじゃなく、風呂掃除当番なら誰でも抱く感想らしい。

明日は一コマの講義があるから早く眠ってしまおうかと思った時、一緒に風呂掃除した先輩の一人に声を掛けられた。

「なあ小岩井くん、お前怪談集めしてるんだってえ？」

「べ、別に怪談にこだわりは無いですけど……変わった話が好きなんです。ほら、ドラマの世にも奇妙みたいなのも好きですし」

「そうか。じゃあちよつと酒付き合えよ。お前にうってつけの話があるんだ」

僕の変な話集めという風変わりな行動はもうすっかり有名になったようで、その頃にはこちらで語り部かたべを探して歩かなくても、周囲が立候補するようになっていた。

僕は早速先輩の二二二号室へ向かった。談話室やトイレを中央に置いた長い廊下の、一番端にある部屋だった。

先輩の名は仏谷ぶつやさんといった。小太りで体が大きかったけど、仏のような笑顔のひょうきんな人で、お酒の席ではいつも皆を笑わせる人だった。

これで勉強にも励んでいたら完璧だったんだけど、仏谷さんは休学を挟んだ上に留年を繰り返して、今年卒業しないと除籍処分になる九年生だ。院生や博士過程の人を差し置いての、虚空寮最長老だった。それに加えて怒ると目茶苦茶めぢやくぢやく怖くて手が出るので、僕は萎縮ちじくしまっていた。

仏谷さんは常々、織田裕二（僕は知らないけど昔の俳優らしい）こそベスト・ガイだと公言してはばかり、その人に似ているらしいウエーブのかかった黒い髪が自慢だった。

「ごめんビール無いや」

髪をかき上げ、仏谷さんは二つのグラスに赤いパッケージのパック酒をなみなみと注いだ。

「いやあ、一年生と酒が飲めるなんて嬉しいなあ。久し振りにがつつり飲み明かそうかって感じだな」

仏谷さんはニコニコしていたけど、僕は明日一コマの講義がある。でももちろん抗議する気は起きなかった。やっぱり怖いしね。

乾杯を交わすと仏谷さんは満足げに話し始めた。本当に話したくて仕方なかった様子で、テノールの美声がさらに良く響いている。緊張してる僕としては有り難かった。存分に話して頂いて、何事もなく終わって欲しいものだ。

風呂掃除で疲れた体に、甘いアルコールが眠気と一緒に染み込んで行く――。



俺の話はねー小岩井君。お掃除にまつわるものなんだ。寮でお掃除っていえば炊事もそうだけど、やっぱり今日経験した風呂掃除が大切だよ。

炊事場の掃除は自分の棟の奴らに関わることだけど、風呂掃除は全寮生に関わるからねー。怠けちやいかんよ。

今日やって分かったと思うけど、青いタイルをブラシでゴシゴシやったり、でっかい排水口に溜たまったヌメリや髪の毛を処理したりで結構疲れるけど、俺は楽しかったりするんだ。

皆で集まってわいわい掃除するのなんて、寮ならではだしね。小岩井君も楽しいと思うだろ——いや、何もそんなに勢い良く頷かなくても良いんだけどさ。

まあ一度しかない人生、何事も楽しまなくちゃね。

それでね。これは俺が一年生の時の風呂掃除の出来事なんだ。寮に入って二回目の風呂掃除だった。

一回目は先輩達と組んで掃除のやり方を教えてもらっただけだね。二回目は一年生

同士で風呂掃除をすることになるんだ。そうなるともう楽しくてね。

怖い先輩が見張ってる訳でもなし、結構冗談を飛ばし合いながら掃除を始めたよ。とはいっても、手を抜いた訳じゃないんだ。

何せ自治委員の風呂掃除チェックがあるからね。毎晩十二時、風呂掃除が終わった後に係の人がチェックするんだ。もし掃除が不十分だと判断されたら、叩き起たたこおされてもう一回掃除させられるんだよ。だからしっかりと掃除しようとしたんだ。本当だよ？

ジャンケンして、勝った一人が脱衣所の掃除をすることにして、残りの俺達三人で浴場に入った。

奥に浴槽がある。もちろん風呂掃除の時間になると湯面は相当に濁っている。周囲の壁にシャワーと蛇口が七口あるね。これを大の男百人以上が入れ代わり立ち代わり使っていく訳だから、一日の終わりには相当に汚れるよなあ。

ズボンの裾を捲まって気合を入れて掃除に取り掛かったよ。それはもう今日の風呂掃除よりもっと気合入れたかも知れない。一年生だけで気分も乗ってたしね。

掃除を始めてから十五分位経たった頃かなあ……。

「なあ、こんな話知ってる？」

メンバーの一人がいきなり語り出したんだ。

「この風呂場で、死人が出たって話」

思いも寄らなかつた言葉に、俺達は動きを止めちゃったよ。

三人しかいない浴場に、死人って言葉がやたらと響いたのを覚えてる。湿った空気が余計に気持ち悪かつたなあ。

「何だよそれ、こんな時に止めるよな。掃除しろ掃除」

「はは、ごめんごめん」

言い出した奴はぼつが悪そうにしてたんだけど、脱衣場で掃除してた奴がそれを聞き付けたらしくてね。入り口から顔を出して「面白そうじゃん、聞かせろよ」なんて言い出すんだ。

悪ノリってやつだね。ぶん殴ってやろうかと思っただけだし、怖がりだと思われ  
るのも癪しゃくだろう？

それで俺はタイルに撒まいたクレンザーをデッキブラシでゴシゴシやりながらも、風呂場で死んでしまった人の話を聞くはめになっちゃったんだ。

その死んだ人ってのは三年生だったらしい。しかも風呂掃除の真っ最中だったんだって。真面目な先輩で、隅々までしっかりと掃除しろって、一年生三人に指導してい

たんだ。だけど足を滑らせて転倒してしまった。

掃除をするために排水口の蓋——鉄製で、分厚い格子状の大きなやつだ——それが外して置いてあったんだが、運悪くその蓋の角に頭を強く打ってしまったんだそうだ。

俺は気の毒になつてね。

「……もう止めよう。そんな話は」

「そうだな。だけど、その人が死んでからすぐに変な噂うわさが立っただって話だ」

「変な噂？」

そんな言い方されたら聞きたくなっちゃうよね。俺は詳しい話を聞いた。そいつは答えた。

「あれは事故じゃなく、掃除のやり方を注意された一年生が腹を立てて、その人に掴つかみ掛かかったんじゃないかって噂だ。風呂場には死んでしまった先輩と、後は一年生三人しかいなかった。それにその先輩は厳しくて、日頃から一年生に疎まれていたって話だよ」

「でもだからってそんな噂……出てくるかなあ」

「そうなんだ。目撃者は一人もいないんだから、普通は事故だと思ふ筈はずだろ？ それなのに一年生が殺したって噂が立つなんて、ちょっと変だよな。その場に居合わせた

本人達が自白しない限り、そんな噂立ちっこないんだよ。もちろん、一年生の当事者は否定した」

「じゃあ、どうしてそんな噂が立つんだ？」

「分かるだろう？ 考えられる情報源は残りの当事者さ。それ以外に考えられない」

「おいおい残りの当事者って何だよ。まさかその死んじやった先輩か？」

「そう——死者からの密告！ ふふふ。どうだい怖いだろ？」

「……馬鹿馬鹿しい」

「はは、やつぱり？ でも結構良く出来た怪談だろ？」

俺は盛大に溜め息をついたよ。下らないにも程がある。しかも、そうこうしている内に時間が経つちやっつてね。脱衣所の丸時計を見ると、もう十一時半を過ぎていた。

急がないと風呂掃除チェックが始まってしまう。俺達は慌てて掃除を進めたんだ。

その最中、俺はふと天井を見上げた。白い天井に水滴が張り付いている。

友人にどうしたと尋ねられた。どうして天井を見たかという時、確かにその時、変な音が聞こえたんだ。コツ、コツ——硬いものがノックするような音だ。

友人は「屋上じゃないか」と言った。屋上へは外から梯子で登れるようになっているよな。そこはまっ平らになっていて、たまに酒盛りをするなんてことがあったから、

俺もなるほどと思った。誰かが屋上で季節外れの月見でもしているんだろう。そう考えて掃除を再開したんだが……。

俺は窓を見た。湿気を逃がすために全開にしてあるスライド型の窓だ。外は風が強くてね。予報では明け方にかけて雨だと言っていた。月見が出来る天気でもなかったんだ。その時さ——。

——コツ、コツ

今度は横からの音だった。慌てて窓の反対に視線を飛ばす。水滴の滴る青いタイル壁が広がっている。

また音が鳴る！

反響のせいで右なのか左なのかもよく分からない。他の奴も同じようにキョロキョロしていた。次から次に、全く違う方向から聞えてくる。

——コツ、コツ、コツ、コツ

さっき死人が出たなんて話を聞いた後だったから、さすがに怖くなってきた。俺達はパニックになって、デッキブラシを投げ出して脱衣所へ向かおうとした——その瞬間視界が真っ暗になった。俺は叫んだ。

「何だ！ おいふざけんな！」

俺は脱衣所の奴に叫んだ。電気のスイッチを操作出来るのは奴だけだ。俺達は慌てて脱衣所へ飛び出した。バタバタと四つん這いになって、転げ出た。

脱衣所は普通に電気が点いていてね。だけど誰もいなかった。数秒すると、脱衣所を掃除していた奴が、入り口から足拭きマットを抱えて駆けて来た。

「何かあったか？ 騒いで、一体どうしたんだよ」

そいつは不思議そうな顔で尋ねてくる。

「お前、脱衣所にいたんじゃないのか？」

「べ、別にさぼってた訳じゃないぜ？ 丁度、足拭きマットを洗濯機から取って来たところさ——何だと？ 電気が消えたってことは、故障か何かか？」

不思議そうにしているが、もしかしたらコイツは、俺達が浴場から転げ出てくるのを見計らって、洗濯室を往復しただけかも知れない。俺は立ち上がって、未だに真つ暗な風呂場の、電気のスイッチを確認した。

「オンになってる。蛍光灯が切れただけか？」

「あんなにぶつたりと切れるもんなのか？ まじであせった。危うくコケそうになっ

たぜ」

「怪我は無いか……あれ？」

俺は気付いた。一人足りない。

——コツ、コツ

天井から音がして、俺達は体を強張こわばらせた。背後へ目をやる。真まつ暗くらだった浴場の電気がパチパチと点滅して、やがて点灯した。

「何だ、点ついたじゃねーか」

脱衣所担当の奴は大して気にしてないようだったが、俺達二人は気が気じゃない。顔を見合わせて、恐る恐る風呂場を覗のぞき込こんだ。

広がる青いタイルの上に、あいつが大の字になって横たわっていた。ちようど、取り外した排水口の鉄蓋の上に頭が置いてあってね。そこから血を流していた。見るからにどろりとした赤い川が、排水口に向かって真まっ直すぐに伸びていた。垢あかの混じる茶色い汚水と合流して、何とも気持ちの悪い光景だった。

「人、人を呼んで来る！ 救急車も！」

脱衣所の奴が携帯を取り出しながら走って行った。もう一人の奴は慌わてて、風呂場に入り込んだ。

「とりあえず、コイツをこっちに……」

「馬鹿！ 頭を怪我してるんだ。動かすな！」

下手に動かしちゃいけない。冷静なつもりで叫んだが、内心はもちろん混乱していた。

俺はびびりながら倒れた奴に近付いた。天井を向いて動かないそいつの顔を覗き込む。半分開いた目玉が、虚ろに何かを見つめている。

意識はあるだろうか。俺はそれが気になって声を掛けたが、目玉はびくりとも動かなかった。俺の呼び掛けを反響が追い掛ける。窓の外の風はいよいよ強さを増している。周囲で洗剤の泡が微かな音を立てて弾けている。

洗剤の匂いと、いやに生々しい鉄の臭いが混ざり合う。

気味が悪くなり、俺はもう一人と顔を見合わせて脱衣所に戻った。それから五秒と経たずに慌ただしい足音が近付いて、先輩が脱衣所に飛び込んで来た。

その人は医学部の先輩だね。といってもこんな状況に慣れてる訳じゃない。かなり慌てた様子だった。俺達は捲くし立てるように、先輩に必死に説明した。

「突然電気が消えて、それで、あいつが倒れて、頭から血が……」

「それは大変だ。もうじき救急車も来る。まさかお前ら、怪我人動かしてないだろうな」

「それは大丈夫です」

俺達は浴場を示して愕然がくぜんとしたよ。先輩が冷やかに言った。

「……どこだ仏谷。その怪我人けがにんは」

タイルの上には誰の姿も無かった。さつきまで居た筈はずのあいつの姿が消えて無くなっていた。それだけじゃない。真っ黒な鉄蓋から続く、真っ赤な血の川すらも消え去っていたんだ。

俺達は二人して、言葉が出なかった。先輩を連れて来たもう一人の奴もパニックになつていた。「お前ら何やったんだ」って、そんなことを言われたが、俺達には何を返すことも出来なかった。一瞬の出来事だった。

俺達の慌てる様を嘲笑あざわらうようにして、コツ、コツ、と天井から二回音がした。先輩は一瞬気にした様子だったが、すぐに俺達に食って掛かった。

「おいどういふことだ。説明してくれ。タチの悪い悪戯いたずらか？ お前らどんなつもりだ？」

先輩は問い質ただしたが、俺達に分かる訳が無かった。

あいつは消えてしまったんだ。

開けていた窓はといえば、胸よりも高い位置にある。そこから抜け出すような力があるとは思えなかった。

状況からいって、その場は俺達の狂言でことにされた。血の跡すら残っていないんだから、当然の判断だろう。救急車が到着したが、怪我人がいないのだから誤報だとして寮長が謝り、帰ってもらった。

その後俺達は寮長と棟長に、見たままを何度も訴えた。流石さすがに、ここまで熱心に嘘をつくとも思えないということになって——何より本人が消えてしまった事実があるということ、捜索が始まった。寮の中はもちろん、寮近辺くまも隈なく捜した。あいつはどこからも発見されなかった。

俺達は参ってしまった。怪我をした人間が失踪だなんて、大事件になるかも知れない。

寮で妙な問題が起きたとなれば、いくら自治寮とは言え、管理者は大学なんだ。最悪の印象を与えることになる。

それで俺達は自治委員の面々と委員会室に集まってね。もし俺達の言うことが本当だとすれば警察を呼ぶべきだと、そんなことを話し合っていると、突然委員会室の扉が開かれたんだ。

「すみません」

入って来た奴は——予想つくだろう？ 消えた筈はずのあいつだったんだよ。

何してた。どうやって消えた。そんな事より頭見せろ。病院に行こう。

俺達はパニックだったが、その時の頭には怪我の痕なんか無かった。だが、確かに風呂場で転倒して意識を失った記憶はあるそうさ。

慌てふためく俺達の様子を見て、寮長も悪戯いたずらだとは扱わないということになった。最後には正に「うやむや」になったんだよ。

で、問題の消えた奴は、事件の日からかなり時間が経たってから、意識を失ってから  
の出来事を風呂掃除のメンバーだけに話してくれた。

そいつは意識を失ってから、寒い寒い場所にいたそうさ。暗くて何も見えない。身動きの取れない場所。その時は全身が痛くて堪たらなかったそうさ。そいつが言うには、まるで全身の皮が剥はがれ落おちて肉が剥むき出しだになっている、そういう状態で体中をやすりかけされているような、そういう激痛にまみれていたんだそうさ。

……どうして他の奴には内緒にしていたかって？ だってそんな話を大勢の前でしたら、頭がおかしくなったと思われるだろう？ 病院に入れられちまう。

消えたそいつな、風呂場で起きた事故を語った奴だったんだ。俺はこう思うんだ。きつとネタにされた先輩が怒ったんだって。先輩は怒って、話をした奴を一度、ほんの一瞬だけ、あの世へ連れて行ったんだ。俺はそう思うね。

ねえ小岩井君。君は面白い話を聞き集めている訳だけど、その中にはもちろん怪談話もあるよね。気を付けた方が良いよ。

怪奇小説にこんな筋のやつがある。怪談話を集めて回った青年が、最後には向こうの世界に引きずり込まれてしまったっていうね。

風呂場に限らず、君がどこかでコツ、コツって音を聞いたとしたら……その時は自分の胸に手を当てて考え直した方が良いかもね。もうこんな変な真似まねはしませんってさ。

そうしないと、向こうに連れて行かれちゃうかも知れないよ。

## 祭りのあと

僕は二一四号室の扉の前に立った。

トイレの前に位置しているので住民が落ち着かないらしく、青竜棟の居室では珍しく一日中扉が閉められている部屋だ。

扉をノックすると、中から返事があつたので遠慮せずに押し開けた。

「おう、悪いが先に始めさせてもらってたぜ」

「小岩井グラス持ってきた？」

二年生の霜倉しもくらさんと、同期の太島おしまだ。

霜倉さんは茶髪の長髪で、ピアスを開けている。世捨て人めいた感じの多い青竜棟の中では、珍しく若者って感じた。

その影響を受けたのか、同期の太島もおデブちゃんのくせに眉毛を整えてピアスを開けた。最近彼女が出来て、青竜棟総出の祝賀会では散々いじられた。太島は飲み会

の最初の内は「飛べない豚はただの豚ですよ」といきがっていただけ、酔っ払った仏谷さんに「飛んだところで豚は豚だ!」とぶん殴られていた。僕達はそれを見て盛大に笑った。

部屋の両壁に密着して置かれたベッドの上に、二人はそれぞれ座っていた。真ん中に背もたれの無い腰掛けを置いて、そこにポテトチップスが広げられている。

僕はデ、もとい太島の隣に腰掛けた。霜倉さんに発泡酒を注いでもらった。

「悪いな。太島が飲みまくったおかげで底をついちゃった」

「いえ、ご馳走して頂いてるんですから」

先輩が酒を奢るシテムは嬉しい反面、申し訳なく思う場面が多い。他の棟の同期に聞いたところ、こういう時の飲み代の代金は折半になるのが普通とのことだった。

全額奢りはどうも青竜棟特有の風習らしい。

だからだと、他愛も無い会話を交わしながら酒を飲んだ。

というのも、今日の飲み会はたまたま太島に誘われたのがきっかけだったからだ。

僕の変な話集めはまったくの無関係だ。

向かいのベッドの霜倉さんがあぐらを横に崩した格好で、しみじみと言った。

「しかし、お前らと三人で飲むのは初めてだな。何か良い話でもしてやらんとなあ……

「…」

茶髪の毛先をくるくると遊びながら、何かを思い出すように中空を見つめた。

霜倉さんは話を探している。

僕は自分の口元がほころぶのが分かった。正直なところ、幽霊譚でも出血事件でもない、退屈な内容で構わない。

目の前にいる人物が、記憶の底から引き出すエピソード。それがどんな色をしているのか、僕は見てみたいのだ。



…：ようやく新歓期も終わったが、寮ならではのイベントが盛り沢山で大変だったろう？

毎日のように飲み会があるし、花見があったかと思えばガチの運動会なんかもあるしな。ほんとやり過ぎだよなあ。

俺の大学の友達もこういった生活ぶりを話すと皆揃そろって呆あきれ顔がおだ——ま、嫌いじゃないけどな。そういうイベントが無くなったなら、それこそアパアートと何も変わらな

いし、寮の意味が無くなる。

一緒に住んで酒を飲める。そういう関係だから出来ることを精一杯楽しむってのはここでしか出来ないし、最高だと思うんだ。

これから先も色んなイベントがあるけど、やっぱりでかいイベントといたら来月の寮祭だよな。

一年に一度のビッグイベント——『虚空寮祭』。毎年六月。二年が見守ってるとはいへ、一年生が他の棟の奴と企画会議なんかして、協力して作り上げるのが虚空寮祭だ。お前らも会議の真っ最中だよな。

確か今年で九十回目か。凄い記録だぜ。正確なところは知らないが、築でいえばもう百年に届くんじゃないかね。二度の震災も直撃を免れ、補修を重ねながらよくもまあ続いてきたと思うよ。

普通だったら、こんな自治寮なんて時代錯誤なもんは大学が嫌がって、それこそただのマンションみたいな格好に建て直しまうんだが……。

まあそんな話は置いておいて、寮祭の話をしよう。寮祭の何が凄いかと言えば時間帯が凄いなんだよな。夜八時開始で、翌朝七時まで。我等が虚空寮はまさしく不夜城と化すんだ。

宣伝も大々的だしな。大学はもちろん、近くのスーパーなんかにもポスターを貼り出すんだ。一夜のためにそういった宣伝活動をする訳だから、青春って感じだよな。

高校の文化祭が終わればそんな共同作業とは無縁になると思ってたんだが、ここに来たらいきなり寮祭だったからな、ダルいと思いつながら、やってみると楽しかった。

去年は驚いたぜ。当日は大学の知らない奴だけじゃなくて、一般客も結構面白がってやってくるからな。頑張った甲斐かひがあるつてもんだ。

上級生は各部屋で食い物だったりカクテルだったり作って売り出すんだが——寮祭のメインの店舗は各棟の談話室なんだな。どの棟も談話室は一年生の仕事として任されるんだ。

各棟それぞれ特徴があるんだよな。自作映画を上映したり、ホストクラブをやってみたり。で青竜棟が……そんな固い顔をするなつて。

なぜか「演劇バー」なんだよな。親を殺そうとする息子役やら駆け落ちするカップル役やらが、迫真の演技ついでにカクテルを置いて去っていく……。一晩中カメラ回してるから手を抜けないんだよな。ものすげえクオリティのDVDが五十年分は残ってるから、今さら止める訳にもいかん。

俺みたいに絵になる奴は良いが、太島にしる小岩井にしる期待してるぜ。皆笑う準

備は出来てるからな。

なに、一生に一度の機会だ。代々繋つながりのあるプロ劇団の衣装協力もあるんだから、手抜きは失礼だからな。

で、これは去年の冬だったか、青竜棟のOBが来寮した時があつてな。盛久もりひささんっていう人だ。

盛久さんはもう十年近く前の人だったんだが、せっかく来寮したというので夜に談話室で酒を飲もうということになった。昔の人だから酒豪で厳格で——って訳でもなかった。穏やかな、大人な感じの飲み会になった。次第に寮祭に関する話題になった。

盛久さんは演劇バーが未いまだに続けていることを喜んでいたな。その後神妙な面持ちになってね。自分が一年生の頃の寮祭を語り聞かせてくれた。

——その年の寮祭は大盛況だったが、時刻は午前四時を回って、流石さすがにお客さんもほとんどいなくなった頃だったそうさ。

毎年、こういう時間になると完全に内輪で楽しむことになるみたいだ。去年の俺の時もそうだった。ところが、盛久さんの時だけは違ったそうさ。

一人のお客さんがやって来た。

学生じゃなくて、四十代後半位の男の人だったそうさ。

背はあんまり高くないけど、ずっしりとしていて、白髪混じりの髪が格好良かったらしい。快活に話す人でね。盛久さん曰く「あの人は絶対に人望が厚い」んだそうだ。

その人は大学のOBというだけで、虚空寮生だった訳じゃない。それなのに、

「相変わらず演劇やってるんだな」

なんて、しみじみ語っていたらしい。

学生の頃、虚空寮に友人がいたらしくてね。毎年寮祭を見に来てたそうだ。盛久さん達はちょうど暇をしていたというので、そのお客さんに色んなことを聞かせてもらったらしい。

人生経験豊富な人でね。駆け落ちしたり離婚したり再婚したり……苦労話やら何やら、身に染みる話ばかりだったんだと。

しまいには一年生の人生相談みたいになって、盛久さんはしみじみ楽しかったと語った。こんなに出来た人がいるもんなんだなって感心したそうだ。

新しいお客も来ないだろうというところで、その人にお酒もアドリブもじゃんじゃん振る舞ってね。六時位かな。もう完全に空も白んできていて、先輩の中には酔い潰れて強制店仕舞いになる人もちらほら出ていた。

その人は帰り支度を始めた。せっかくだから終了時間までどうですかと引き止めた

らしいが、奥さんに叱られるとかなんとか、飄々とした様子で断られた。そして、

「はい代金。明日というか、今晚の打ち上げの足しにしてよ」

その人は太っ腹に四万円も置いていってくれたんだと。そっちの方が奥さんに怒られるんじゃないかと思うよな。

その人は寮祭の打ち上げが行われることも知っているんだ。本当に寮のことをよく知ってる人だった——またどこかで会って話がしたい。盛久さんはそう思った。

だけどそれは叶わなくなっちゃったんだ。

事故だった。その人な、バイクで寮に来てたんだよ。飲酒運転だ。

寮から帰宅途中、カーブを曲がり切れずに電柱に衝突——その報せを受けて、盛久さん達はショックを受けた。

だって、お酒を出したのは盛久さん達なんだぜ？

小岩井お前どう思う？ 酒を飲んだその人が悪いか、どうやって寮に来たかを確認しなかった盛久さん達が悪いか……。

——当時は飲酒運転の取り締まりも甘かったと聞く。だから仕方無いことかも知れないが、それでも盛久さん達の胸には深い後悔の念が残った。自分達が殺したも当然だ。

それからのはな、毎年寮祭が近付くと誰ともなくこの話をするようになったと。

一年生に聞かせるのはもちろん、自分達への戒めとしてな。

飲酒運転をするのは絶対に駄目だし、させるのも駄目だ。

盛久さん達はそれを固く心に誓ったんだ。

ところが……俺達は盛久さんからこの悲劇を初めて聞いたんだ。毎年語り聞かせる

はずのエピソードが、いつの頃からか途絶えていた。それを知ると盛久さんは、

「そんなもんだ。話して良かった」

なんて笑ってた。だけど少し寂しそうだっただな。

小岩井も太島も、この話は今日初めて聞いたと思う。これからはお前らが語り継いでいって欲しいんだ。

飲酒の事故っていうのはさ、身近に感じたことが無いとどうしても意識が希薄になっちゃうからさ。

盛久さんみたいな思いをするのもつらいから——まああれだな。こんなつまらない話を長々としちまって悪いとは思っているが、とりあえず、お前らに話せて良かったよ。



## 桜の横で

僕は二一一号室を訪れた。金谷<sup>かなや</sup>さんは「やあ」と短く挨拶した。

入り口正面の壁、左右に二つ並んだ窓はブラインドカーテンが下ろされている。備え付けの本棚には分厚い専門書の他、シリーズもののライトノベルが並んでいた。いわゆる「美少女」の表紙が覗いている。

「丁度暇だったんだ。うん。話し相手が出来て助かったよ」

金谷さんは細身で、背は低かった。理学部の院の一回生で、岡さんの一つ下になる。

数学を語らせたなら学内ではちよつと有名なレベルの人だ。今どき珍しい縁の太い眼鏡は、この人が掛けると妙にサマになるから不思議だった。厚い前髪の奥から覗く<sup>のぞ</sup>眼鏡の輝きは、謎の格好良さがある。

一人部屋としてはオーソドックスな間取りで、部屋の片側にベッドと机が置かれ、空いた逆側には卓袱台<sup>ちゃぶだい</sup>と、折り畳み式の座椅子が二つ置かれている。

僕はそこへ座り、金谷さんから発泡酒を両手で受け取った。

乾杯を交わして最近の勉強のことなどを話した。といっても、僕は大きく勉強に身を入れていた訳ではないので、大した話は出来なかった。受けている講義でレポートの課題が発表されててんやわんやだとか、そんな話だ。

一方の金谷さんは、太い眉毛をクネクネ動かして愉快そうに語った。口調は舌足らずとまではいかないけど、滑舌の良い方ではなかった。それでもテンポ良く表情豊かに話すので、僕は金谷さんのトークが好きだった。自分自身に相槌あいづちを打つような喋しゃべり方が、どことなく可笑おかしい。

「うん。もう上期も後半だけど、小岩井は新歓どうだった？」

「いやあ、あつという間でしたね。緊張もしましたけど、楽しかったですよ」

新歓というのは、新入生歓迎の時期のことだ。普通の大学生なら四月にはサークルや学部の友人などと親交を深めるのだろうけど、寮生の場合にはもっぱら自治寮という環境に慣れることに費やされる。

「色々イベントあったけど、どれが印象に残ってる？」

「うーん、どれも強烈でしたけど、面白かったのは花見ですかね」

「おー、変桜会か」

この町には桜がそれなりに有名な虚桜公園がある。もちろん青森県の弘前公園ひろさきなかと比べたら月とスッポンだけど、地元住民にとっては自慢の桜公園だった。

そこで毎年寮生で行うのが、変桜会だった。僕は変桜会を思い出して苦笑した。

「なんで花見で仮装しなきゃなんないんですか？」

「そういう伝統なんだよ。うん。面白いから良いだろう？」

ハロウィンでもないのに、全寮生が思い思いの仮装をして花見をする。それが変桜会だった。「変」の字は変身の頭文字だそう。

「今年も笑ったなあ。うん。患者姿に点滴引き連れてる奴とか、一般客に普通に心配されてたし、それから伝説のロックバンドのボーカル、デーモン閣下もいたなあ……そういうえば小岩井は何やったっけ？」

「あ、僕は良いです。忘れて下さい」

「……すべったのか」

僕はああいうイベントにはつくづく向いていない。結構気合を入れたつもりだったけど、まったく伝わらなくて寂しい思いをしてしまった。

「まあつらい思い出は人を成長させる財産だからさ。そう落ち込むなよ。お前はまだまだ一年目なんだ。来年もあるんだから、今からネタを考えておけよ……うん。丁度良く

花見の話題になつてくれたな」

金谷さんは声の調子を落とすし、居住まいを正した。いよいよ「話したい」と言つていた変わった話をしてくれるようだ。この人のことだから幽霊話は期待できないけど、その分気楽に楽しめるかも知れない。

発泡酒の冷たい苦みが喉に落ちていった。



小岩井は、花見といつたら何が欠かせないと思う？

——うん。まあ酒は欠かせないね。桜の下で飲む酒は格別だよ。でも、桜の下で酒を飲むためには、<sup>すこ</sup>凄く大事な下準備があるだろう？

そう。場所取りが肝心なんだ。虚桜公園は人気だからね。桜の時期は隣県から足を伸ばす人達もいるんだ。

場所取りしなきゃ、とてもじゃないけど百人以上の寮生が花見なんか出来ない。でも場所取りなんかしてたら、仮装の準備が出来ない。

そこで頑張るのが四年生だよ。下級生のために一肌脱ぐ訳だね。うん。

仮装大会をしなくて良いと喜ぶか、過酷な場所取りを憂いに思うかは人それぞれ違うもんだけど、俺は場所取りを喜んだ。小岩井じゃないけど、俺も変桜会みたいなセクスを問われる場面は苦手なんだよ。

で、俺も去年、同期の皆と場所取りに行ったんだ。例年は棟ごとにバラバラになって動くんだけど、その年は先輩に言われて、他の棟の奴らと一緒に行動した。

うん。午前三時だったかな。その位の時間から行けば場所を取れるだろうって、酒やらブルーシートやら手分けして担いで行ったら——これが全然人いないんだ。楽勝。ちよつと拍子抜けしちゃって、笑ったもんだよ。

でもそれからが大変だったなあ。春とは言っても、やっぱり真夜中は寒いからね。ブルブル震えたよ。これなら仮装大会の方がまだマシだと思ったね。

荷物になると思って毛布なんて持って来てなかったから、眠れる気もしなくてね。さて小岩井。そこで俺達はどうしたと思う？

うん。まあ、酒を飲むってのも考えたんだけどね。テンションも上がってたし、変桜会の前夜祭としゃれこむのも悪くなかったんだけど、やっぱり酒は皆と乾杯したいと思ってね。

結局運動をしようということになったんだよ。体を暖めるには運動するのが一番だ

ろう？

せつかく誰もいないし、それに照明も月明かりも十分にあってね。照らし出された広い芝を眺めてると、「さあ、お走りなさい！」なんて誘われてるような感じがしたんだ。

そうして鬼ごっこか、ドロケイでもしようかとなった時、空き缶が落ちてるのが見付かってね。缶蹴りをするようになった。

缶蹴りなんて大人がやることじゃないけどね、本気でやると意外と楽しいんだよ。

しかも虚桜公園には桜の木はもちろん、腰の高さの植え込みも多いから、隠れる場所がたくさんあるんだ。うん。

ところで小岩井は缶蹴りのルールは分かるかな？ 実はその時同期と確認したらさ、結構ローカルルールがあるみたいだね。

まずは鬼が一人空き缶の前において、他の奴は物陰に隠れるだろうか？

そして、鬼は隠れてる奴を見付け出そうとする。

もし発見したら、鬼は名指しで叫ぶんだ。「小岩井見つけ！」みたいだね。

鬼は急いで缶の所に戻って、缶を踏む。これで一人捕まえたことになる。捕まった

人は、しょんぼり牢屋ろうやスペースに待機するんだ。うん。

もし「小岩井見つけ！」って言われたとしても、鬼が踏むより早く缶を蹴っ飛ばしてしまえば捕まらない。さらに、鬼に見付かっていない奴も、鬼の隙を狙って、缶を蹴ることが出来るんだよ。

上手く缶を蹴ることが出来たなら、今まで捕まった人達はみんな脱走出来るんだ。  
鬼は缶を蹴られる前に、急いで戻って来て缶を踏んでしまわなきゃならない。

そう考えると、鬼は結構不利なんだよね。

誰かを見付けるたんびに、ダッシュして缶の所へ戻って来なきゃならない訳だからね。四人、五人捕まえた後で缶を蹴られてしまった日には、これはもう究極的に絶望的だよ。

何より大学四年の飲んだくれ達となると体力が続かないからね——とまあ、これがあの日俺達がやった缶蹴りのルールだ。攻撃的なくれんぼだと考えて良いかもね。他の奴のルールだと、缶が蹴られる度に、缶の位置が蹴られた先に移動していくとか、蹴り飛ばした距離が鬼の歩幅で十三歩以内だと、蹴った本人がアウトになるとか、色々あったな。

さて話を戻そう。うん。それで、俺達とはにかく缶蹴りをする事になってね。想像付くだらうけど、俺は数学は得意だけど走るのは苦手だからね。鬼はどうして

も避けたかったんだ。その願いが叶<sup>かな</sup>って、鬼決めのジャンケンで見事に勝つことが出来てね、鬼を免れることが出来たんだ。

鬼が三十秒数える間、残った俺達はバラバラに散った。

俺はかなり遠くの植え込みの影に隠れてね。ちらっと見た感じだと、他の奴は桜の木の下とか、それから鬼を馬鹿にして真後ろのベンチに堂々と座っている奴もいたな。

鬼が動き出してから五分位かな。鬼は中々の手練<sup>て</sup>れでね。仲間は次々と見付かっていった。

俺の選んだ場所はかなり遠くて、誰も寄り付かなそうな草むらだったから安全だったんだけど、そろそろ勝負に出て、皆を逃がしてやりたくなくなってね。うずうずしてきた。

中腰で移動しながらチャンス<sup>うかが</sup>を窺ったんだ。秘密工作員が敵の基地に侵入してくような感じだね。ドキドキものだよ。

鬼の位置を把握するために視線を巡らしたその時、俺は思わず声を上げそうになった。何とすぐ近くに、同じように隠れている奴がいたんだ。全然気が付かなくてね。植え込み越しで顔は見えなかったけど、そいつも息を殺して、こちらを意識して

いるのが分かった。

俺はすぐに気を落ち着けてね。ここは共闘戦線だって思った。協力して鬼を出し抜いてやるんだ。そいつに小声で指示を出した。

「おい、二手に分かれるぞ！俺が鬼の注意を引き付けるから、お前がその隙に缶を蹴るんだ！」

俺はそう言って、すぐさま行動に移ったよ。

やっぱりああいう感じは楽しいよね。童心に戻るってやつだ。秘密工作員が敵地で心強い味方を得るなんて、ベタなハリウッド映画みたいだろう？

俺はあえて鬼の視界に入るように、植え込みの陰を移動していった。あえて草を揺らすようにしてね。

「何奴っ！」

鬼もノリノリでね。こちらに気付いたようだけど、まだずっと遠い位置にいたから、俺の顔は分からない筈だ。<sup>はず</sup>俺はニヤニヤして、もっと近付いて来いって祈った。でも次の瞬間、

「金谷見つけ！」

あっさり名前を呼ばれちゃってね。大慌てで缶にダッシュしたけど、足の速さ的に

も距離的にも、缶を蹴ることは出来なかったよ。

俺はぜえぜえ息を切らしながら、牢屋ろうやスペースに座り込んだ。

「くそー、アイツ裏切ったな……」

植え込みにいた奴に腹を立てた。でも、俺があんまりあっさり見付かったので動けなかったのかも知れないと思ひ直した。とにかく後はアイツに望みを託そう。

そう思った矢先さ。

「よしこれで全員捕獲だな。二回戦いくぞ！」

鬼おにがそんなことを言うんだ。俺は慌てたよ。

「え？ ちょっと待って、これで全員？」

「ああそうだ。金谷が最後だ。だから俺、顔見なくてもお前の名前呼べたんだぜ？」俺は不思議に思っただけ。じゃあさっきのアイツは誰だったんだろう。もしかして、全然知らない人に声掛けちゃったのかな……そう考えると恥ずかしくなった。

確かめに行くべきか迷ったんだけど、小岩井ならどうするかな？

……俺はその時、結局確かめないことにしたんだ。調べてみて知らない人がいたら恥ずかしいし、もし誰もいなかったら、それはそれで後味悪いだろう？ 「真夜中の公園で変な奴に声掛けられた」とか、影で笑われるのかも知れない。うん。

だから俺はさっきのことはきっぱり忘れて、缶蹴り続けることにしたんだ。

そして疲れ果てて、仮装した皆がやって来るまでぐっすりと眠った。皆と合流してからは、すっかり酒と花見を満喫したよ。

程良く酔っ払ってきたから、俺はトイレに向かうことにした。その途中で、ふと缶蹴りの時のことが思い出されたんだ。

「そういえば、この辺だったよなあ……」

酔いも手伝って、俺はあの時隠れた草むらにふらりと入って行ったんだ。虚桜公園の中でも桜の木の無いエリアで、閑散としていたな。そして、

「うわあ！」

俺は悲鳴を上げて尻餅を付いた。

そこには男の死体が転がっていたんだ。

黒いブルゾンの前をはだけた中年の男だった。でっばった腹にナイフが斜めに突き立っていた。柄のごつい、サバイバルナイフのようなやつだ。腹の差込み口が赤くどろりと伸びている。ナイフを刺してから、切腹する時みたいに、ぐりぐりと切り裂かれたものだと思像出来た。血の流れ固まった傷口に、蠅が数匹たかっていた。男は真っ白な顔を苦痛に歪めて、見るも無残だった。

それからは大変だったよ。

パトカーが駆け付けてね。俺は第一発見者として事情聴取を受けた。

「犯人らしい人物は見ませんでしたか？」

そんなこと聞かれたってね。酔って草むらの中に入ったらもう殺されてたんだ。犯人なんか——そう思って俺は鳥肌が立ったよ。

俺は犯人と目が合ってるんだ。そう。あの缶蹴りの時にね。

被害者の死亡推定時刻を聞いてみれば、俺がアイツの隣に隠れていた時と一致したよ。俺が秘密工作員を気取っていたその時が、まさに殺人の真つ最中だったんだ。

今思えばね、あの時、缶蹴り二回戦の時にあの場所を確かめに行かなくて本当に良かったと思う。もし確かめに行っていたら、今俺は生きていないと思うんだ。

うん。なあ小岩井、もし何か変な出来事が起こったとしたら、お前のことだ。好奇心に駆られて首を突っ込みたくなるかも知れないが、ちょっと考えて立ち止まるようにした方が良くかも知れないね。

そうしないと厄介な出来事が、矛先を変えてお前の身に降り掛かるなんてことになるかも知れないからね。

## 夕闇、来る

長い夏休みだというのにやることもなくて、僕は近所のレンタル店で映画のDVDを借りて寮に戻った。セミの鳴き声を遠くに聞きながら、何台かの車に追い越されながら、汗だくになって自転車を漕いだ。

北の空に奇堂山きどうさんが悠々と聳そびえていた。この地方じゃ一番高い山で、天気の良い日は惚ほれ惚ほれとする。いわゆる地方富士だ。

奇堂川の流れに沿った交通量の多い国道を脇そに逸それると、長く急な上り坂、閻魔坂えんまが続く。虚空寮と大学方面とを結ぶルートで、寮生の間ではクソ坂と呼ばれている。

僕はもちろん自転車を押して登った。セミの鳴き声が気温を上昇させているような錯覚に陥る。

「行きはよいよい帰りは地獄……」

ぜえぜえと呪い歌を唱えながら、ようやくクソ坂を登り切った。シャツの袖で汗を

拭って、門の無い寮門を通り抜けた。

玄関へ続く道の両側には駐輪場がある。昔の寮生の手作りだと聞いた。木製の中々がっしりした骨組みで、トタン屋根付きた。ところどころガタがきているけど、大きな破損がある度に寮自治委員や日曜大工好きが修復して生き長らえているらしい。

昼間であれば外出する寮生は多く、自転車置き場はガランとしていることが多いけど、夏休み期間にはほとんどの寮生が実家に戻っている。駐輪場には自転車がぎっしりと並べられている。思った通り出掛けた時と同じ場所が空いていたので、その隙間へ自転車を押し込んだ。

ロータリーへと続く道を歩き、ガラス扉の玄関を入った。右手の事務室窓口には誰もいない。夏休みでも平日の日中には事務の大水さんが常駐しているのだけど、今日は土曜日だからもぬけの殻だ。

ずらりと並んだ靴箱で自分のスリッパに履き替え、渡り廊下を通り青竜棟へ向かった。虚空寮は鉄筋造りで、この季節は湿気ばかり滞ってやはり暑い。ひっそりとした自室へ戻った。

同室の乃田<sup>の</sup>さんも実家に戻っているから一人部屋状態だけど、さすがに暇だ。借りてきたのは大昔の迷作SF恋愛もので、すぐにノートパソコンで映画観賞という気分

にもなれず、僕は窓を全開にしてベッドへ仰向けあおむになった。

風向きが悪いのか、風は全く入ってこない。こんな暑いと昼寝も出来ない。どこかの部屋に遊びに行こうかとも思ったけど、青竜棟には仏谷さんしか残っておらず、どうにも気分が乗らなかつた。他の棟をうろつこうか。そういえば玄武棟には同期が二人残っていたはずだ。

そんなことを思っていると、開け放した扉の外から、スリッパの足音が近付いて来るのに気付いた。

「おう、いたいた」

渡りに船か。扉の外にいたのは玄武棟の二人だった。

ノツポの戌亥いぬいとチビの猫丸ねこまる。どちらも高校時代は野球部だったらしく筋肉質で、坊主頭がサマになっている。二人とも派手めのティーシャツにジャージ素材のハーフパンツ。意図的に合わせている訳ではないだろうけど、コンビ感が滲にじみ出でている。

戌亥は声が野太く、気性も荒い。身長は百八センチ位だろう。猫丸と一緒にいるせいで一層背が高く見える。クソが付くほど真面目な奴で、寮のルールなんかにはかなり五月蠅うるさい。

一方の猫丸は細いテノール声だ。学部の親睦会と称したカラオケではその美声を披

露していた。あまりの見事さに僕は思わず息を呑んでしまった。目を閉じて聴き入っている女性陣を横目に猫丸の顔を見て、「天は二物を与えず」が珍しく当てはまっていること切なくなつたのを覚えている。

猫丸が短い手を挙げて言った。

「卓球やろうぜ」

「この暑いのか？」

「暑いからこそさ。エンドレスにタイマンだときついからな。負け残り方式でやろうぜ」

スポーツマン相手では勝負になりそうもなかったけど、戌亥が猫丸を「ホームラン王」と称したので、僕は立ち上がった。僕も卓球においてはかなりの飛ばし屋だ。

黄竜棟へ向かった。玄関と寮食堂の間には娯楽スペースがある。そこに卓球台とピアノが置いてあって、日中であれば自由に使うことが出来る。

玄関の前へ差し掛かった時、車のエンジン音が近付いて来た。

「黒っ！」

猫丸が玄関の外を見て立ち止まった。そちらを見ると、ロータリーを徐行する大型の（多分二トン）トラックの姿があった。奇妙なことに、車体も荷台のコンテナの色

も真つ黒だった。あんなカラーリングで夜中に走ったら危ないのではないだろうか。

トラックが停車した。玄関のガラスが黒い車体で埋め尽くされる。

ドアが閉まる音がして、すぐに小太りのおじさんがひよこひよこ歩いてやって来た。

僕はぎょっとした。というのもそのおじさんが強烈なオレンジのつなぎ姿だったからだ。何とも鮮やかで、何とも見事なバーコード頭には何とも似合っていなかった。

おじさんは玄関の扉を開けながら快活に言った。

「どうもこんにちは！」

「こんにちはー」

反射的に挨拶したけど、どうしたものか。今日は事務の大水さんがいない。僕は隣の二人と顔を見合わせた。戌亥いぬいが言った。

「あのー、どういったご要件でしょうか」

おお、意外としっかりしている。猫丸も堂々とした様子だ。元高校球児はやはり違う。僕は初対面のおじさん相手にガチガチになりながら半歩下がった。戌亥は続けて言った。

「新聞の対応とかは寮代表の委員がやることになってるんですが、夏休み中でいませんよね」

「ああそうでしたかー。それは残念です。実はペットなんです」

おじさんの言った意味が分からず、一瞬沈黙が流れた。

「ペット……ですか？」

おじさんはニコニコしている。つなぎの胸ポケットから黒いケースを取り出した。

「実は私こういう者です」

おじさんは僕ら三人に名刺をくれた。そこにはこう書かれていた。

『レンタルペットショップ・夕闇

店長 小堺銀次郎』

戌亥は怪訝な顔で言った。

「れ、レンタルペットって、何ですか？」

「おや、レンタルペットショップをご存知ない？ 結構ピュラーなんですよ。今日

もたくさんの子ども達を連れて来たのですが」

確かに地方でも都市圏でも、レンタルペットショップはわりかし存在している。動物を飼おうか迷ってる人が試しに利用したり、仕事で疲れてる人が気分をリフレッシュ

ユさせるために利用したりする。しかし「連れて来た」ということはあのトラックの荷台には動物がいるのだろうか……移動式というのには聞いた事がない。

「ご担当の方がおられないということでしたらお仕事の話は出来ませんが、もしよろしかったら彼らに会ってみませんか？　ほんの五分程度でも」

店長さんはコンテナを示した。戌亥はまごついたが、猫丸は面白がって「ぜひ」と返した。

外へ出ると、辺りは橙だいだい色に染まり始めていた。夕暮れが近付いている。風が無く、寮内よりも暑く感じられた。

店長さんがトラックのコンテナの扉を観音開きに開いた。瞬間、ぎゃあぎゃあとな動物の鳴き声あふが溢れ出だした。ジャングルの中に犬猫が居ただろうか？　混乱してしまう。

奥を見るとコの字型にケージが並べられている。ステップを登って中に入ってみる。エンジンは止まっているけど、空調が効いているらしい。中は快適な温度だった。

犬、猫、猿、インコ、イグアナ、ハムスター、亀……なるほど室内で飼えそうな動物ばかりだ。コンテナの外で店長が言った。

「可愛かわいいでしょう。じっくり見てあげて下さい」

どの動物達も潤んだ瞳をしていて、見ているだけで和んだ。

『ぼくを選んでご主人様!』

みたいな、そんな風にせがまれている感覚になる。

僕は何となく、一匹のシマリスに惹かれた。遠目に見ると籠の中をちよろちよろと動き回っていたけど、近付くと小屋の中に隠れてしまった。その引っ込み思案な動きにそそられた。

「シマリスは厳しいかもよ」

猫丸が僕の肩口から覗き込んで言った。何でもシマリスは暑さに弱いんだそうだ。寮はこれからもっと暑くなるだろうし、それなりに大きい籠じゃないと運動不足になるといので、考え直した。

いや、考え直したというかそもそも……。

「別にレンタルしようってつもりは無いよ。訪問販売とかは自治委員を通さないと駄目だろう? 戌亥の目も怖いしさ」

「それでもなさそうだよ?」

猫丸が肩をすぼめて横を指した。そこには尻尾を振るミニチュアダックスの前でしやがみ込む戌亥の姿があった。その目はトーストをかじって疾走する乙女のように輝

いていた。

店長さんの声がした。

「その子は人懐っこくてしかも吠えませんから、こちらにお住みでも問題なく飼うことが出来るでしょう。ちなみに今でしたらお試しサービ스로二週間無料でございます。エサもサービス致しますし、寝床用のケージにペット用トイレもお付け致しますよ」  
何とも商売上手なタイミングだ。相場なんて分からないけど、二週間無料なんて流石さすがに妙だと思った。

店長さんのにこやかな表情も、トラックの外からこちらを見上げられると不気味に映る。いきなりコンテナの扉を閉めて、僕らをどこかへ連れ去るのでは、そんな不安が過る。

戌亥いぬいは迷っている様子だったけど、「じゃあこの子をお願いします」と猫丸が決めました。

店長さんの指示に従い、借り主の氏名を戌亥が書いた。僕はエサを抱えて様子を見守った。

「実は小さい頃から犬飼うの夢だったんですよね——いやまあ、レンタルですけど」  
戌亥がこぼすと、店長さんは嬉しそうに相槌あいづちを打った。

「それでは少し待っていて下さい」

店長さんはペット用トイレやケージを僕らに引き渡すと、玄関でしばらく待っているように指示してコンテナの中へ入ってしまった。

真っ黒なトラックを前にして、戌亥と猫丸は犬の名前をどうするかで盛り上がっていた。僕は何となく気になって、トラックへ近付いた。コンテナの口が少し開いていて、中を覗くことが出来た。

「うわ……」

思わず声が漏れた。

店長さんは貸し出されるミニチュアダックスに熱心に話し掛けていた。僕は足をもたつかせながら、慌てて玄関に戻った。

程なくして店長さんが犬を連れてやって来た。店長さんから二、三の注意を受け、『タ閨マニユアルくわんちゃん編』と書かれた小冊子を受け取った。プリンタで印刷したものを大きいホチキスで止めただけの、簡素な冊子だ。

「それでは、この子を可愛がってやって下さい。二週間後を楽しみにしております」

真っ黒なトラックは轟音を巻き起こして夕焼けの中を去って行った。二週間後の午後六時、店長さんはまた虚空寮を訪れるという。

その後僕らは玄武棟へ向かった。戌亥の同室の先輩は実家に帰っていて、一月先まで帰って来ない。とはいえ部屋のほとんどをベッドと机が占める間取りでは、室内犬を飼うには厳しい気がする。

玄武棟の黄色い暖簾のれんをくぐると、戌亥いぬいと猫丸は左へ向かった。

「戌亥って一〇五じゃなかったっけ？ 逆方向じゃないか」

「一一六が空き部屋になってるんだよ」

炊事場の隣に位置する一一六号室の中には机もベッドも無かった。普段生活している部屋と同じ間取りなのかと思える程に、広々と感じられる。これが青竜棟ならここぞとばかりに物置き化するだろうに。

犬を部屋に放すと、尻尾を振ってカーペットの上をうろついた。窓辺から漏れる夕焼けの明かりが気に入ったのか、やがてそこへ座り込んだ。

僕らはそれを眺めながら、夕闇マニユアルを読んだり犬の名前決めをしたりした。

ペット用トイレに砂を敷いておいたので、貴重な犬の初トイレを目撃することが出来た。僕らは妙な感動を覚え、目を背けた。トイレを見て感動するのは、何となくというか、率直に言っただけかなり変態っぽい。犬がメスだということで、尚更なむさらだ。

変態としての逃れがたい罪悪感の中、犬の名前が決まった。ふさふさで上品な毛並

みにすらりと通った鼻筋。煌めく円い瞳を縁取る深い睫毛……人間なら間違ひなく美人な彼女の名はキャロライン。通称キャロだ。結局戌亥の案が通った形だった。猫丸案のキャサリンも最後まで競ったが、やはりきらびやかな響きのするキャロラインだろうということになった。ちなみに僕の案であるゴールドバーグ・ザ・ウーピーはなぜか速攻で却下された。

戌亥がキャロの名を呼ぶと、彼女は尻尾を振ってとても喜んだ（ように見えた）。あぐらでキャロを抱きながら、戌亥は僕の方を振り返った。

「ところでさ、相応の措置って何なんだろうな」

「ああ、店長さんが最後に言ってた、夕闇ルール三カ条とその罰則ってやつだね。一つ、愛情をもってペットに接すること。二つ、飼育に関しては夕闇マニユアルに従うこと。三つ、期間満了後は速やかにペットを返却すること。もしも三カ条を破った場合、その罰則は——」

猫丸が言葉を引き取った。

「三カ条に従わなかった場合、『それ相応の措置』を受けること」

「怪しいよなあ……僕さ、最後にトラックのコンテナの中を覗き込んだんだけど、あの店長さん、キャロに熱心に話し掛けてたんだよね」

「げえ。まじかよ」

猫丸が気味悪そうにした。僕が「それだけじゃない」と言い掛けた時、キャロを撫でて上機嫌の戌亥の声がかぶさった。

「ペットを大事にしてる証拠さ。レンタルペットショップって言ったって、動物を商品としか見てない訳じゃないだろう？ 家族同然に扱ってれば話し掛けもするよ。なあキャロライン？ お前は可愛い奴だなあ」

すっかり恋に落ちてしまったらしい。

「余ったエサはペットと一緒に返却して頂きますだつてよ」

猫丸は半身で横になりながら夕闇マニユアルを熟読し始め、僕は話そうとした言葉を押し止めた。

それだけじゃない——あの時、店長さんはコンテナの中でキャロに話し掛けていたけど、何も僕はそんなことで驚きはしない。あの時驚いたのは、店長さんに話し掛けられたキャロが口をパクパクと動かして、まるで返事をしているように見えたからだ。アメリカのCG映画では動物が喋りまくるものがあるけど、まったくそんな感じだった。傍から見ると、何か作戦会議でもしているようでもあって、それが何とも気持ち悪かった。

だけど、今戌亥いぬいとじゃれあうキヤロを見る限り、至って普通の犬に見える。あれは錯覚だったのだろうか。

そんなことを考えていると戌亥が言った。

「きつと『それ相応の措置』ってのは夕闇ルールを守らせるための方便なんだよ。だって愛情をもって接すること、なんて確かめようがないだろう?」

猫丸はマニュアルに目を落しながら、戌亥の言葉になるほどと頷うなずいていたけど、僕は気が気でなかった。もし、キヤロと夕闇の店長が会話出来るとしたら? ……僕らの一挙一動が筒抜けじゃないか!

その時、戌亥の腕の中のキヤロが僕を見た。黒く円い瞳を流し目のように僕へ向け、か細い音をさせて鼻を鳴らした。

そんなこともあり、僕はキヤロと距離を置いた。戌亥と猫丸がしっかりとキヤロの世話をしている様子だけ眺めていた。

二週間経ち、キヤロを返す日がやって来た。玄関先に出ると風が普段より涼しくてセミの鳴き声も無かった。ポーチの脇に、返却するエサやトイレの砂を置いた。ざらざらした音がやたらとよく響いた。

玄関前で夕闇のトラックを待っていると、猫丸が戌亥に言った。

「店長さん、人が良さそうだし頼めば購入出来るんじゃないの？ ……ローン組めるのかは知らないけどよ」

キャロを抱きながら、戌亥は「そういう訳にもいかないだろう」と力なく笑っていた。昨日から戌亥は元気を無くしていた。キャロとの別れがつらいのだろう。キャロが戌亥の頬を舐めた。

大きなエンジン音が近付いて来る。夕闇が訪れた。黒い車体がロータリーを回り、僕らの目の前で動きを止めた。

相変わらずオレンジのつなぎの店長さんが車から降り、にこやかに手を挙げた。

「お待ちせ致しました。彼女は良い子にしてみましたかな？」

そう言う店長さんは戌亥の腕の中にあるキャロの頭を撫で、そして隅に揃えてあるエサの袋やトイレの砂を確認した。

「あのおう、マニュアル通りに量ってやってたんですけど、エサもトイレ砂も残っちゃいました」

「大変結構です」

店長さんはキャロを戌亥の腕から招き寄せた。ゆっくりと、空っぽになった戌亥の

腕が下がった。

「おおよしよしおいで——楽しかったかい。そうかいそうかい——さてそれでは、お客様はここで少々お待ち下さい」

店長さんはキャロを抱きコンテナの中へ入った。風すらも入れないように、扉は固く閉ざされた。

僕達は何も言わずに待った。どれ程経たたろうか。沈黙は随分長かったようにも、ほんの少しの間のようにも感じられた。荷台が軋み、店長がキャロと一緒にコンテナから出てきた。戌亥が思い立ったように切り出した。

「あの——」

「お客様」

店長が遮って続けた。

「もしよろしければ、彼女を引き取って頂けませんかな？」

戌亥の顔を覗のぞくと、彼は口を半開きにして固まってしまっていた。

「是非引き取らせて下さい」

と、話を押し進めたのはやっぱり猫丸だった。本当に、良いコンビだと思う。

話を聞くと、夕闇で扱っているレンタルペット達の多くはみなしごなんだそうだ。犬や猫なんかはほぼ全員、飼い主に捨てられたのだという。

店長さんは元々普通のペットショップを経営していたのだけれど、そういった不幸な動物達を招くようになっていった。でもそんなことを続けていると、動物達は増える一方でエサ代も馬鹿にならなくなってくる。だからといって叩き売りたたかうのようにして、動物達に何度もつらい思いを味合わせる訳にもいかない。

信頼出来る飼い主に譲る必要がある。そこで思い付いたのがレンタルペットショップだった。店長さんは動物達を貸し出しながら、相応ふさわしい飼い主を探していたのだ。

そういう狙いがあれば、無料貸し出しなんて赤字覚悟のサービスにも納得がいく。

そして、戌亥いぬいは合格したという訳だ。

戌亥はほっとしたような表情で、キャロを抱きながら言った。

「でも、本当に良いんですか？」

「彼女の気持ちが一番大事ですからね」

店長さんはそんなことを言う。やはりこの人は、コンテナの中でキャロと話し込んでいたんじゃないだろうか。この二週間の戌亥と猫丸の様子をキャロから聞いて、彼らになら託しても良いと、そう判断したのかも知れない——なんて思うのは、馬鹿げ

ているだろうか。

「エサやトイレの砂も適切に減っておりまし、彼女の毛並みを見ればストレスが溜たまっているかどうか把握出来ずからね。お客様が良くして下さったことが手に取るように分かりましたよ。それでは、キャロをよろしくお願い致します」

エンジン音が遠ざかっていく。真っ黒なトラックが、二週間前と同じように夕闇に溶けていく。

風が吹いた。猫丸が言った。

「キャロの世話、しっかりやらないとな。戌亥」

「ああ。それにしても、毛並みでストレスが分かるって凄いな。俺もその位のレベルにならないとなあ」

「ていうか今気付いたけど、棟長さんに犬飼う許可もらわないとな」

二人は安堵あんどの表情で言葉を交わし合っている。

最後に店長さんが言ったもともともらしい理屈はきつと、僕達を納得させるための演技なんだと思う。

あの店長さんは、本当に動物達と会話が出来るんだ。だって――

『それでは、キャロをよろしくお願い致します』

——だって僕達は店長さんの前で、彼女の名を一度だって口に出してはいないのだから。

僕のはっとした。

「あ！ 聞きそびれた」

「何をだ？ 小岩井」

「いや、『それ相応の措置』って何なのかなって」

「ブラフだろう。しっかり世話をさせるための方便だよ」

そう言つて二人は笑つた。

僕が戌亥いぬいの腕の中へ目をやると、キャロは慌てたように目を背けた。



## さきみどり公園の男の子

夜十時を回り、僕は丸井まるいさんに会いに朱雀棟の三〇九号室へ向かった。朱雀棟は青竜棟と同様、夜遅くまで交流があるようで、扉の多くは開いている。もっとも青竜棟に比べて住人にイケメンが多く、合コンなんかが積極的に開かれているらしい。

人見知りの僕からすると微妙に羨ましいような、羨ましくないような、そんな感じだ……ま、羨ましいよね実際。

三〇九の扉は開いていたので室内を覗いた。

二人部屋らしく両側にベッドが置いてあり、奥にそれぞれの机がある。

丸井さんは右の机のノートパソコンに向かっていて、体はこちらを向いている状態だ。そして丸井さんのパソコンの画面を、高尾たかおさんが覗のぞき込こんでいた。インターネットでもしているのかも知れない。二人は三年生で共に教育学部だったと思う。

丸井さんはその名の通り丸つとした風貌をしている。短めの髪に眼鏡を掛けている。

ややもすればザ・オタクだけど、明るい表情と整えた眉がそういう印象を受けさせなかった。

一方の高尾さんはその名の通り背が高く（戌亥より上で、百九十近くありそうだ）、バスケットボールサークルに所属している。刈り上げた茶髪で、イケメンストリートを爆進中といった感じがする。

二人ともハーフパンツにデザインティーシャツの楽な格好をしている。

部屋の両側に洗濯ロープが張ってあり、左側の無人の方にはバスタオルやらボクサーパンツやらが干されていた。

丸井さんが僕に気付き、顔を上げた。

「おっと、怪談集めの小岩井じゃないか。時間に正確だな」

続けて高尾さんが苦笑して言った。

「おいおい、本当に来たのかよ」

丸井さんは高尾さんに僕のことを話していたらしい。僕がスリッパを脱ぐのと入れ違いになって、高尾さんはそそくさとスリッパを履いた。

「俺怖い勘弁だわ」

高尾さんは腰を少し屈めて入り口をくぐった。高尾さんの大きな背中に向けて丸井

さんが笑った。

「そんなに怖くないって——ああ行っちゃった。あいつマジで怖がりなんだよ。あんな凶体ずうたいしてんのに、和風ホラーはもちろんB級ホラーのギャグみたいなノリもNGなんだぜ？」

僕は相槌あいづちを打ちながら、反対側の机の椅子に座ろうと近寄った。

椅子のすぐ上方の壁に張り付いている木棚が自然と目に入る。縦に三段区切りされた棚には、どうにも見覚えのある教科書が並んでいる。ああ、そういえば丸井さんの同室は……。

「タカとは話したことある？」

丸井さんの質問うなずに頷いた。

「はい。タカアキとは学部一緒です。時間割りも一緒に立てたんで」

「ああ、お前も文学部か」

タカアキから聞いた話だと、朱雀棟ではどうした訳か二年生が少なく、それで三年生である高尾さんも一年生の同室を持つことになっているのだそうだ。四年生の同室を持つ僕とは、そういう点でもタカアキと話が合った。

僕は椅子に座り、丸井さんの頭上の棚に目をやった。下段、中段には見慣れない教

科書や参考書が並んでいて、上段には小説の文庫本が並んでいた。ナントカの殺人なんて、物騒なタイトルばかりだった。

僕の視線を追ったのか、丸井さんが言った。

「俺、ミステリ好きなんだよ。小岩井は好きか？」

「いやあ、僕はあるまりですね。えせ文学部なので小説自体、二十冊も読んだことない位で——あ、その『占術殺人事件』ってやつは読んだことあります。島田荘司ですよね。父さんの書齋に置いてあって」

「おおそうかそうか。これは傑作だからな。オマージュもされるし、パクられもする」  
「パクリですか？」

丸井さんはミステリ小説が相当好きで、特に「本格」と呼ばれるジャンルが好きらしい。随分と雄弁だ。

「——という訳で大事なものは論理性なんだよ。どうしてこうなった？ って部分が最後には綺麗きれいに消化きわされる。にも関わらず、そこには驚おどろきが存在する。こんなエンターテイメントはねーよなあ」

ふと、丸井さんはぶつが悪そうに座り直した。

「おっと悪い悪い。小岩井が聞きたいのはミステリじゃねーよな。怪談話だ」

「いや、別に僕は怪談を集めてる訳じゃないですよ。面白い話が聞ければそれで」  
「面白い話っていうのも色々だけど……」

丸井さんは丸い顎を搔かいて、斜め上を見上げ、遠い記憶を引き寄せるようにしながら語り始めた。

真夏の夜の部屋は蒸し暑く、真っ暗な網戸の向こうからは生温なまぬるい風が、しがみつくように吹き込んでいる――。



――二年前の冬の初めのことだ。俺が大学一年の頃、東北ではもう積雪があったとニュースがやっていたのを覚えてる。

丁度その頃、俺が取ってる講義でレポートが出された。締め切りは一週間先だったが、先に片付けてしまおうと思ってな。夕飯の後二時間位、一生懸命レポートを書いてたんだ。だけどブツ通しだとさすがにしんどくなってきた。

適度に息抜きしないと効率も悪くなる。一息入れて、他の暇な奴らと駄だ弁べんりに行くうと思つて部屋を後にした。

廊下を歩きながら部屋を覗いていくと、同期の奴らが三人集まっているのが見えた。左右の机に二人。あと一人は右のベッドに仰向けあおむになって漫画を読んでいた。

その寝転がってる奴が俺に気付いて、体を起こして手を上げた。

「よお暇人」

「オメーもだろろうが」

なんてやりとりをしながら、俺は左のベッドに座った。先輩のベッドだったから、さすがに隣のベッドの野郎みたいに大胆には振る舞えなかった。

そいつらと下らない話——まあどの学部に可愛かわいい娘がいるとか誰それが付き合ひ始めたとか、そんなので盛り上がった。最初は少しだけ休憩するつもりだったんだが、話が盛り上がったものだからレポートは別に良いかなって思った。締め切りはまだ先だしな。

それで開き直って馬鹿な話を続けていると、右の机の奴——山内って奴だ。髪は短めで、背は百七十位の痩せ型。眉毛が八の字気味になっていて、見るからに気弱そうな奴だった。もう寮は辞めてしまっているが、そいつが急に、

「僕の実体験なんだけどさ、皆には話したことあったかなあ。さきみどり公園の男の子の話。さきみどり公園って、奇童川を南に下って、国道を宵ヶ丘の方に曲がって行

った所にある公園なんだけどね。ひらがなで書いてさきみどり……」

山内は声に意識的な抑揚を付けてさき。妙な感じだった。俺は答えたよ。

「さきみどり公園は知ってるが、男の子の話は聞いてないな。何だよ急に、怪談話でも始める気かよ」

そしたら山内は、窮屈そうに口の端を歪めた。

「実はそうなんだ」

山内は語り出した。まだ小学生にも上がらない位の男の子の話。その子はいじめられっ子だったそうさ。

同年代の子から理由も無しに馬鹿にされ、暴力を振るわれていた。

俺は不思議に思ったよ。だってさ、小学校に入る前なんて、そもそも「いじめる」なんて概念自体が形成されてないと思うんだ。子どもが誰かに暴力を振るったとしたら、親が「それは駄目なことだ」って叱れば、すぐに治まるはずだろう……。

よっほど親の教育が悪かったのかも知れない。俺は嫌な気分になりながら、山内の話に耳を傾けた。

いじめられたっ子の少年はいつも一人ぼっちだったそうさ。だけどその子は一人で家に閉じこもっていた訳じゃない。どうしたことか、いつも一人で公園にやって来たん

だそうだ。

その姿を他の子ども達が見付けて、毎日のように攻撃する。それなのに、男の子は毎日公園にやって来る……男の子はいじめられると分かっているのに、毎日公園に来て、同じ遊具で遊んでいたそう。

小岩井、その遊具は何だと思う？

滑り台、ぶらんこ、ジャングルジム……どれも怪談にはびつたりな感じがする遊具だが、その男の子はそういった遊具には目もくれず、一直線に鉄棒へ向かって行ったそう。ちょっと意外だよな。

まあ幼稚園位の子どもでも前回りが出来る子はいるよな。だけどその男の子はただぶら下がっていたそう。ぶら下がり健康法なんて百年前は流行はやったそうだが、少なくとも子どもがするようなことじゃあない。やっても面白くないだろうしな。

ところがその少年は毎日公園にやって来て、その鉄棒にぶら下がったんだ。

鉄棒は高いものが一台、中位のもの低いものが三台ずつあった。少年は毎日低い鉄棒にぶら下がっていた。少年の背丈だと、低い鉄棒にしか手が届かないからな。

来る日も来る日も、その少年は鉄棒にぶら下がっている。それが、周りの子には気に食わなかったのかも知れないな。三つある内の一つを占領している形なんだからな。

その男の子を引き摺り下ろすためだったのかも知れない。四人の少年が、男の子を叩いたり蹴ったりしたそうさ。

しばらくそういった仕打ちが続くと、少年は力尽きたように鉄棒から落っこちる——だけど、よろよろと立ち上がると、すぐにまた鉄棒にぶら下がるんだ。

腹を立てた周りの子ども達は、石を投げたこともあったそうさ。尖った石だ。もちろんそういった危ない石は、公園には落ちていない。公園の外からわざわざ拾って来て投げ付けたんだと。

思い切り投げ付けた尖った石が、男の子のまぶたの上に鋭く傷を付ける。ツーっと、一筋の血が男の子のほお頬を流れる。男の子の目に血が入り込んで、白目が真っ赤に染まっていく。

少年はそれでも鉄棒にぶら下がりを続けた。それどころか……信じられないことに、その少年は笑っていたんだそうさ。何か嬉しいことがあったみたいにして、満面の笑みなんだってさ。

気持ち悪いよなあ。っていうか、そんな騒ぎがあったら親が黙ってないよな。小さい子ども達だ。絶対に近くに親が居る筈なのに、注意されなかった。

なあ小岩井、俺は同期の山内からこの話を聞いた訳だが、山内はどうしてこの話を

知っていたと思う？ 話し始めに、奴は「実体験だ」と言ったが。

山内が正にそのいじめられっ子だったとか、あるいはいじめめる側だったとか……。まあ選択肢は二つだが、正解は後者だった。山内はいじめっ子の中の一人だったのさ。

さっきも言ったが、山内は気弱そうな雰囲気のある男でな。いじめっ子というよりは、いじめられっ子なタイプだった。当時のまだ小さい山内は、公園に謎の男の子がいたおかげでいじめられずに済んだそうさ。

もちろん山内だって、いじめることを楽しんでた訳じゃない。嫌で嫌で堪らなかったそうだ。だけど、周りの子ども達は皆その男の子をいじめている訳だろう？ 自分だけいじめに加わらないなんて、山内少年には出来なかつたんだ。

子どもに強い意志なんか、求める方が間違ってるよ。

ま、そういう訳で、山内がどうしてこの話を知ってるかってことは納得がいったんだけど……問題は、謎の男の子がどうして毎日鉄棒にぶら下がって、毎日いじめられて、にも関わらず笑っていたのかってことだ。

いじめられて笑うなんて気味が悪いよな。まさか小学校に入る前からDMって訳でもないだろうし。これはちよつとしたミステリーだぜ？

山内は小学校に上がると良心が痛んだらしくて、公園の仲間達とは距離を置いた。

その間も公園の近くを通ると、当時の仲間三人が、未だに鉄棒の少年をいじめ続けていた。何年経っても、その光景は変わらなかつたそう。少年は背も少しづつ伸びて、中学の頃には高い鉄棒にぶら下がるようになった。それを、力の付いてきた男どもが殴る、蹴る……少年も成長しているとはいえ、体は小柄な方だつたそう。高い鉄棒に小さな体がぶらりぶらりと揺れ動いている様は、遠目に見るとまるでサンドバッグそのものだらしい。

男どもは何かに取り憑かれたみたい、目を見開いて怒鳴り散らして一心不乱に少年に暴力を振るっていたそう。

親や周囲の大人が注意したことなんか、一度も無かつたんだ。さきみどり公園って、遊具のあるスペースの周りを、散歩出来るように道が整備されているんだよ。それなのに、そこを通り掛かる人は、鉄棒で行われている事件に全く気付いていないよ。うな感じだつたそう。謎の少年と、暴力を振るう少年達。奇妙な現状を知ってるのはこの世の中で山内ただ一人——そんな感じだつたらしい。

おかしいよな絶対。俺、そのいじめられっ子は、周囲には見えない何かだと思ふんだ。幽霊じゃないかってさ。成長する幽霊なんて変だけど。そうとしか思えないよ。そして月日が流れ、山内が高校生になつた年のことだ。

山内はひ弱だったが、精神的に大人びてきた。善悪の区別を付けられるようになり、正しいと思うことは正しいと、そう主張出来るようになっていた。そういう時期に、あの公園を通り掛かった。

夕暮れ時。公園がオレンジ色に染まる頃、その場で、やはりかつての仲間達が歓声を上げていた。詰め襟の学生服の上着を脱ぎ捨て、シャツの袖を捲くり上げて暴れていた。少年も男達と同じような服装で、細く白い腕でぶら下がっていた。

山内は意を決して、鉄棒に近付いて行った。奴らに近付いていくと、心臓が爆発しそうになったそうだ。

かなり近付いても、奴らは中々山内に気付かなかった。

山内の方は震える足を前に進めて、気付いた時には鉄棒にぶら下がっている少年の顔が見える所まで来ていた。

酷い有り様だったらしい。膨れ上がって歪んでるんだ。粘土細工をこねくりまわしたみたいに、顔面がボコボコだったらしい。瞼まぶたなんか腫れ上がって、いくつもの切り傷が黄色く膿んで固まっていた。唇から顎にかけて斜めに走る赤黒い線が、夕陽に照らされて僅かにずれて見えたそうだ。切れてるんじゃないやなくて、裂けてるんだな。考えただけでぞつとするよ。そのむごたらしい顔が、そんな状況でもぐにやりと笑って

いたんだそうだ。

山内は胸が痛んで、同時に声が出ていた。

「もう止めないか」

絞り出すような、自分でも情けない程に小さい声だったらしい。

それでもその小さい声に反応して、三人の男達が山内を見た。すげえ驚いている様子だったそうだ。きっと山内のことを覚えていたんだろうな——昔一緒に暴力を振るってた奴だって。山内はその時、全身から嫌な汗が吹き出したそうだ。

「頼む。もう、止めよう」

かつての友人たちは真まっ直すぐに山内を捉えていた。その中の一人が、低く、しかしよく通る声で言った。

「お前もぶら下がるか」

山内はすぐに取り囲まれ、腹を思いつ切り蹴り飛ばされた。胃液が込み上げて、呻いてうずくまったところを二人掛かりで抱えられ、鉄棒へ向けて引き摺られて行く。

「ほら、ちゃんと掴めよ」

背中を蹴られ、山内は丁度鉄棒の前に倒れた。地面に着いた手が擦れて、土煙が舞った。

三人は楽しくて堪たまらないといった声で、ぎやあぎやあ騒いでいた。

涙を浮かべて四よつん這ばいになっている山内の目の先に、土で汚れた靴が浮いているのが見えた。恐る恐る見上げた。

ばんばんに膨れ上がった少年の笑顔が、山内を見下ろしていた。肥大した瞼の奥で、確かに微笑ほほえんでいる少年の目が、真っ直ぐに山内を見つめている。

次の瞬間だ。

『ありがとう』

そいつの声を聞いたのは初めてだった。その場にいた全員が凍り付いた。がさがさした、しわがれた声……爺みみたいな声だったらしい。山内を見つめたまま、そいつは続けてこう言った。

『だけど、ちよつと遅いよ……君はお仕置きね』

その言葉を聞くや否や目の前が真っ暗になり、山内は意識を失ってしまった。

「うう……ううう……」

山内の真っ暗な意識の中で、遠くから苦しむ声が聞こえた。やがてその声が、自身のものであると山内は気付いた。そして激痛が襲い掛かった。

痛くて痛くて転げ回りたい！ そんな痛みが掌にあった。ところが体の自由が効かない。うずくまることが出来ない。混乱して目をかっと見開く。夕焼けに染まるさきみどり公園で、山内は自分の足で突っ立っていたそうだ。すぐ横には鉄棒の青い支柱が見えた。つい一瞬前までいた場所だ。訳が分からず痛む手へ——真上へ視線をやった。

するとどうだ。万歳の格好をしていた山内の両手が、鉄棒に貫かれているじゃないか。拍手をする途中の距離で、手の平同士が内側を向いて、その真ん中を、錆び付いた鉄棒が貫いている。

山内は叫んだ。叫んで腰を落とし、手を外そうとしたが、無駄なことだった。きゆるきゆると音を立てて、鉄棒が手の中を滑っていくだけだった。両手を貫く痛みは全身を駆けた。無理矢理引き下ろそうとすれば、ぎしぎしと手の中の骨が悲鳴を上げた。血が滴り落ちて山内の顔に落ちた。腕は既に、赤黒く染め上げられている。

山内は鉄棒の下で力の限り叫び、助けを求めるように周囲へ視線を投げ掛けて、叫ぶのを止めた。一台だけある高い鉄棒で、他の三人が貫かれているのを見付けたんだ。

三人は山内と同様、沈みゆく夕日を見つめるように並んでいる。万歳はしていない。三人共、腕をだらんと垂らしていた。真<sup>ま</sup>っ直<sup>す</sup>ぐ並んだ六つの瞳を串刺しにするように、

鉄棒が通っている——鉄棒は三人の頭を一直線に貫いていた。六つの耳を通すように貫いていたんだ。

三人の首は体重で伸び切り、体はサンドバッグのように揺れている。山内が恐怖に駆られもがけばもがく程、三つの体はゆらゆらと揺れた。

山内の混乱する頭の中に、あの言葉が何度も繰り返されたそうだ。

『君はお置きね』

それからどれだけ叫んだろう……やと誰かが駆け付けてくれたらしい。犬の散歩の途中だったらしいな。

もちろんその人は、目の前の信じられない光景に腰を抜かしたそうだ。

人間業わざじゃないよ。作り物だ、悪ふざけだと思つたらうな。それで他の人間を呼んで、警察だ救急車だと大騒さわぎになつたらしい。

山内と他の三人を助ける——と言っても三人は死んじまつてるが——助けるために鉄棒を切断する必要があった。警察が色々調べてみたが、鉄棒には一切破損箇所が見られなかったそうだ。どうやって通したのか誰にも分からないんだよ。

それどころか、その時切断した鉄棒が問題だった。いわゆる中ちゆうくう空管かんつてやつで、

鉄パイプみたいに中が空洞になっていているものだったんだが……その鉄棒の中に詰まっていたんだとよ。山内の手と、他の三人の頭の中身がさ。

馬鹿みたいなスピードでぶっ刺さなきやこうはならない。でも、その方法が分からない。山内の話によれば当時は相当騒がれたニュースらしいんだが、どうした訳か騒動は一月も経たずに消え去ったそうだ。

なあ小岩井、あのいじめられっ子の少年は、一体何が目的だったんだらう。

そりゃあ、結果的にはいじめっ子を成敗したってことだけどさ。そもそもぶら下がってる謎の少年がいなけりゃさ、周りの子ども達もいじめようって気は起きなかつたんじゃないかと思うんだよな。まったく、タチの悪い化け物がいたもんだと、俺は思うんだけどね。

……俺が今した話、所詮作り話だと思ってるだろ？

だけどこの話を聞かせてくれた山内の両手にはな、はっきりと傷跡が残っていたんだぜ。鉄棒が貫いた丸い傷跡さ。

医者には「元通りにはならないし後遺症が残るだろう」と言われたそうだけど、なぜか完治したらしい。

あんな酷い目ひどに遭っても五体満足で生きてるんだから、山内ってのは運が良いやら

悪いやらよく分からない奴だよな。

なあ小岩井、お前もいじめなんかするんじゃないぞ。ろくなことが起きる訳が無いし、人として最低な行為だから——なーんて、もう大学生の奴に言っても意味無いよな。

大人になって誰かをいじめるなんてさ、そいつはもう塵みたいなもんだよな。世の中には不必要な人間だし、そんな奴に子どものお親になって欲しくないよ。そうだ、そういう塵みたいな奴こそいじめてやりや良い——おっと、これじゃあ本末転倒か。

あの少年、案外いじめの囹捜査みたいなのをしてたのかも知れないな。仕返しはいき過ぎな気はするけどさ。

ま、本格ミステリ好きの俺から言わせると無茶苦茶な話だから、普通なら信じる気は起きないんだが……あの山内が、意味不明な作り話を俺達にわざわざ語り聞かせるかと思うと、やっぱり変な感じがするんだ。

もしかしたら、山内の手の痣がああの夜に痛み出していて、少年のガサガサの音が聞こえてきていたんじゃないか。俺達に話をしろって脅されていたんじゃないかって、そんな理屈をこじつけてしまうんだ。理屈をこじつけることはつまり、山内の話を事実として受け止めようとしてるって事だ。自分自身馬鹿らしいけど……。

山内はこの話をして一月もしない内に寮を辞めてしまった。今はもう連絡を取っていないが、話がしてみたいなら連絡を取ってやっても——そんなに拒否するなよ。冗談だ。



## ボイルさん

雪の降る日だった。三〇三号室で、僕はプラコップに注がれた白ワインを眺めた。ワインだなんて、奇譚蒐集の部屋飲みでは珍しい……というか初めての経験だ。

「うーん、実に美しい香りだ」

卓袱台ちやぶだいの向こう、壁を背にした荃田くきたさんは上下共に真っ赤なジャージを着て、その上に紺色のちゃんちゃんこを着た独特のスタイルだ。片膝を立てた格好でワインを嗅いでいる。

「美しい香りって言っても、これコンビニの安物じゃないですか」  
三百円の。

「分かっているなあ君は。値段じゃないんだよ。安物のワインは安物なりに精一杯の創意工夫の元に作られているんだよ。馬鹿みたいに何十年も寝かせただけの高級ワインには出せない、泥臭どろくさい味わいがあるんだ」

「臭いんじや駄目じやないですか」

「君はマイナス意見ばかり言うなあ。君みたいのが同室じゃあ、先輩も大変だろうねえ。ボク位に心の広い四年生でなきゃ発狂しちゃうんじゃないかなあ？」

「あ、大丈夫です。僕の同室も四年生なんで」

「む……そうか。そういえば君の同室は乃田のだだったな。彼も色々と気の毒な奴だ。君は良い同室を持ったと思うことだ。棟こそ違えど、ボクの同期なのだから」

「はあ、ありがとうございます」

乃田さんの話をする、皆似たような反応をする。決して盛り上がりせず、次の話題に移る。乃田さんは誰とも大して仲良くないから、反対に馬鹿にされることも無い訳だ。

乃田さんは変わってるけど、この荃田さんもかなりだなあ……。言動も変なノリがあつて、僕はちよつと後悔し始めている。

この調子では、あまり面白い話は期待出来ないだろう。ニヤニヤして「とっておきを聞かせてあげよう」なんて言われたから来たけど、ちよつと失敗だったか。

「しかし君も好きだねえ。このボクのエピソードトークを聞きたいだなんて」

「いや、荃田さんが誘ったんですよ」

「恥ずかしがらなくても良いさ。君が幽霊やら殺人事件やら、そんな話を聞いて回っているのはボクの耳にも入っている。そういう怪しい魅力を嗅ぎ付ける能力に長けているんだらうね君は。自然とボクというエピソードの鬼に辿り着いてしまったのだから——ふう」

僕は空になった荃田さんのプラコップにワインを注いだ。ああそうか。この人はもう酔っ払っているのかも知れない。適当に話を合わせて済ませてしまおう。早く本題に入って欲しいものだ。

荃田さんの細い声が、酔っ払い感丸出しで揺れている。

「うふふ。こんな恐ろしい話はいかがだろうか。これは今から遡さかのぼること一年前、去年の変桜会で現実に起こった、身の毛もよだつ殺人事——」

「あ、それ金谷かなやさんから聞きました。缶蹴りしてる時にうんぬんってやつですよね」  
「……」

僕はワインに口を付けた。荃田さんはなぜか一気飲みしたので、僕はまたワインを注いであげた。面倒臭いなあ。

「……うふふ。冬と言えば怪談だね。怪談といえれば幽霊や妖怪だね……だけど実はボクの話はね、幽霊とか妖怪とかそういうのじゃないんだよね」

顎を引いて、荃田さんは覗き見るように僕を見ている。キツネみたいな細い目だ。ようやく、とっておきとやらを話してくれるようだ。

季節は冬を迎え、寮内はスチームヒーターが効いてポカポカだ。少し暑い位の室内で、いよいよ荃田さんの話が始まるうとしている。僕は眠気が増してきた――。

「……なんか雰囲気が出ないんだけど？」

「気のせいですよ。荃田さんは格好良いですし、十分に雰囲気出てますよ」

「ふふんそうかい？ それなら結構だが」

気を良くしたのか、荃田さんはようやく語り出した。やはり面倒な人だ。



この虚空寮にはさあ、生活するための色んな設備が整ってるよねえ。寮食堂だとか、風呂場だとか、洗濯室だとかね。その中でもとりわけ重要なものにも関わらず、寮生にあんまり知られていない設備があるんだ。

それが何だか分かるかな？ 分かんないだろうなあ？

それはボイラー室さ。洗濯室の隣にある、あの重そうな扉の向こうがボイラー室。まあ部屋の名札が付いてるから、存在自体は知っていたとは思うけどね。

でも普通の寮生がまず立ち入らないのが、あの部屋なんだ。ボイラー室ってのはこ  
ういった住宅施設にとつては心臓みたいなもんでね。

雪は滅多めつたに積もらないとはいえ、十分凍えそうな冬の季節に、ボク達が快適に暮ら  
せるのは何のおかげだと思ふ？

昔気質を気取ったこの自治寮にエアコンなんて高尚なものは付いていない。その代  
わりに備え付けてあるのがスチームさ。各部屋の奥、窓の下にある銀の鉄の固まりが、  
凍えた体を蒸気の力で暖めてくれるんだ。

そして、このスチームを動かすために必要なのがボイラー室さ。いやそれだけじゃ  
ないなあ。風呂を沸かすためにもボイラー室が必要だったりする。

ふっふ。どうやって風呂を沸かしているか知ってるかい？ ヘチマみたいな顔をし  
た君には分からないだろうなあ。実はボイラー室の中で重油をまあその……色々やっ  
てお湯を沸かせる訳だね。まああんまり難しい事を言っても君には理解出来ないだろ  
うから割愛するけどね。

とにかくボイラー室は偉大で、色んな使命が課せられている。ボイラー室にはその

使命を遂行するための、でっかい機械が置いてあるんだ。

そんな場所に誰かが入って悪戯いたずらでもしたら大変なことになる。だから普段は扉に鍵が掛けられていて、寮生が入れないようになっていた。訊だ。

どうしてボクがそんなことを知っているかって？

一年生の時に寮の中をうろろうろ探検したことがあったからさ。それで、開かずの間が気になって周りをうろついていた所を、丁度ボイラーマンの方が通り掛かった——君も知っての通り、通称ボイルさんって人だよ。大学の職員さん。灰色の作業着で、白髪混じりの髪をオールバック気味にまとめ、ややもすればリーゼントに見える、あのボイルさんだ。

で、そのボイルさんが僕の目の前でボイラー室に出入りしているね。僕は出て来たボイルさんに飛びついて、ボイラー室についての重要性を聞かせてもらった訳さ。でも、ボイルさんは室内を見せてはくれなかった。鍵が掛かっていることを入念に確かめると、「絶対に中に入ってはいけない」という言葉を残して去って行ったんだ。ボイルさんはよっぽど警戒していたのか、途中でこちらを振り返ってね。顔は笑っていたけど、目は笑っていない感じだった。

まあ当然だよ。ボイラー室は虚空寮の生命線だ。故障したら風呂にも入れなくな

るし、暖が取れなくなれば大学の設備としてどうなんだという問題に発展するかも知れない。そういった問題がボイルさんの責任になったら、これはもう一大事だからね。寮生を中に入れる訳にはいかないというのも納得だ。

……でも入るなど言われたら入りたくなっちゃうよねえ？　いつまで経<sup>た</sup>っても心は少年のままだからねボクは。

それでボクは、ボイルさんがいつか鍵を掛け忘れる事があるかも知れないと思って、ボイラー室の周りをうろつくようにした。と言っても、ボイラー室は黄竜棟の廊下の真ん中にある。風呂場や洗濯室と同じラインにある訳だから、隠れる場所もそんなに無いんだけどね。

ボクは洗濯室に待機して、ボイルさんの出入りをチェックした。

ボイルさんは朝早い時間帯にボイラー室へ入る。十分程すると重い機械の駆動音がする。暖房のために機械を動かしたんだ。室内は朝起きる頃にはスチームが効いて暑い位になってるよね。あれはボイルさんのおかげなんだ。

それから昼近くにもう一度出入りする。暖房を停止させるためだね。それから夕方。これは夜の暖房と、風呂を沸かすためだと思う。そして最後、深夜に機械を止める。……そんなことが分かったところで、中に入れなければどうしようも無いんだよね。

ボイルさんは出入りする度、しっかりと鍵を掛けてしまう。三週間位粘ってみただけ、鍵を掛け忘れることなんか一度も無かった。

ボクはふてくされてしまつてね。悶々とした毎日を送った。そこで諦めてしまえば良かったんだけど、どうにも諦め切れない。さっきも言った通り、ボクは永遠の少年だからね。鋼の冒険心は誰にも曲げられないのさ。

そしてついに……ボクは不眠症になった。

笑うところじゃないよ。寝ようとするボイラー室の中が気になって仕方無いんだ。

小岩井君みたいな単細胞なら、ボイルさんに土下座でもして中を見せてもらえば良いなんて思ふかも知れないけどね。実際にボイルさんの顔を見ればそんなことは考えられなくなるよ。初めてボイラー室について尋ねた時の雰囲気からして、中を覗かせるなんて絶対に許されない、即刻却下されるに決まつているんだ。

何よりボイルさんに見せてもらうなんて、冒険の風上にも置けない愚行だよ。自分で禁じられた聖域へ足を踏み入れる快感、これをボクは追い求めている訳だからね。

そんなことを考えて真つ暗な部屋で横になっていると、ボクの耳がある音を捉えた。

隣で大きい音をかいている先輩の音に混じつて、聞き間違える筈はずの無い音が聞こえる。大きな機械の動く音だ。そう、ボイラー室から鳴り響くあの音なんだよ。

ボクは飛び起きて黄竜棟へ向かった。寝間着で裸足はだしにスリッパだったから物凄すごく寒かった。

皆が寝静まる時間帯、日付もとつくと変わっている時間帯だから、暖房なんてとつとに止まるっているからね。このタイミングでボイラー室を動かす理由なんて無い筈はずなんだ。何のために今この瞬間機械が動いているのか。僕には分からなかった。そして堪らなく知りたくなった。

朱雀棟から黄竜棟への渡り廊下を走っていると異変が起こった。さっきまで不眠症を謳歌していたというのに、信じられない程眠ねたくなってきたんだ。黄竜棟へ入ると、ボクは壁に手を付いていないと立っていらなくなかった。意識が朦朧もうろうとしてしまったね。経験は無いけど、睡眠薬なんか盛られたらあんな風になるんじゃないかな。

だけどボイラー室はもう目と鼻の先だ。中にボイルさんがいるんだろう。開け放たれた扉から光が漏れている。

ボクは壁と冒険心に体を支えられながら、必死に歩を進めた。そしてついに、ボイラー室へ足を踏み入れたんだ。大きな機械が動いているからだろう。中は冷氣とは無縁むげんだった。炎天下うらやみたい暑い暑かった。

眠気も消し飛んだ。嘘うそみたい眠ねなくなかった。いや、ついさっきまでの眠気うその方

が嘘みたいなものだったんだ。夢見たボイラー室に辿り着いて目がギンギンに冴える。これが普通だ。

唾をゴクリと飲んで入り口に立つと、薄暗い蛍光灯の天井に無数のパイプ管が走っていて、正面には緑や赤の小さな光が散らばっていた。ボックス型の機械の上部が光っていたんだ。あくまで上部だ。視線を下へ持っていくと、その機械はコンクリの床に消えている。床はといえばすぐ左に折れて下へ向かう階段が続いていた。

ボイラー室っていうのは重要な機械がデンと腰を据えているだけの小部屋だとばかり思っていたからね。外から見ても大した広さは無さそうだったし。それがまさか地下へぶち抜いて作られているとは思わなくて驚いたよ。

ボクは足音に気を付けて、そろそろと階段を下りた。下からボイルさんに見咎められるかも知れないけど、その時はその時だ。

一歩一歩、ザラザラする階段を下りた。換気扇が効いているのか、空気が澄んでいくような感覚だった。足の裏と錆びた手すりから、確かな震動を感じた。階段を下り切るといよいよ機械音が大きく響く。

周囲には箱型の機械が何台も並んでいた。何かのニュース映像で見たことがあるけど、巨大なデータセンターの、でっかいスーパーコンピュータが何列も並んでいるよ

うな、そんな感じだった。ボクは警戒しつつ歩を進めた。これだけ機械が並んでいれば、案外気付かれないかも知れない。機械の塊と何本ものパイプが形作る導線は迷路のようだった。明らかに、外から見える間取りよりも広い。地下に広大なスペースが作られていたんだ。

音が大きくなる方向へ、ボクは誘われるように歩いた。そしてボクは息を呑んだ。飛行機のエンジンだと紹介されれば納得してしまうようなサイズ……いや、それでもまだ大き過ぎるような機械が横たわっていた。今ボくらがいる居室にだって入り切らないんじゃないかな？ そんなサイズだったから、ボイラー室の入り口からじゃ搬入出来ない筈はずなんだ。そんなものが地下うなで唸りごえ声を上げている。ボクは圧倒されて立ち竦んだ。

「何をしているのかな？」

背後の声に飛び上がった。振り返るとボイルさんが立っていた。普段通りの灰色の作業着。顔には皺しわの深い笑顔が張り付いている。その笑顔の中核を成す目玉に、ボクは震え上がった。

目玉が真っ黒だったんだ。犬なんか黒目がちで可愛いかわいもんだけど、おじさんの目玉が真っ黒だともう気味が悪くて堪らなかった。その真っ黒な目玉が薄闇の中でぎよる

ぎよると回転しているように感じられた。そして次の瞬間にはその目が瞬きした。まぶた 瞼は縦に閉じたよ。白い膜がシャッターのように一瞬カシャリと閉じて開いた。丁度、猫の奥の瞼と同じような感じだよ。

ボクは二、三步後ずさりした。コンクリの壁に背中を押し付けた。立ち並ぶ機械が袋小路のようになっていて、逃げられる場所は無い。

数歩の距離にいるボイルさんはボクから視線を外し、巨大なエンジンのような機械へ向かって腕を伸ばして何かを操作した。するとボイルさんの背後にある機械やパイプのゾーンが明るく、四角く切り取られたように灯った。

その四角い明かりに、立体的に文字やボタンの並びが現れた。ディスプレイのようだ。

ボイルさんはそのディスプレイに向き直ると、素早く指でタッチしながら僕に話しかけた。騒音の中だというのに、ボイルさんの低い声はよく通った。

「君は以前、ボイラー室について質問してきたね。その後もしつこくボイラー室の周りをうろついていた。洗濯室に隠れていたろう？ 気付いていたよ」

ボクは無理矢理に笑顔を作った。心臓は爆発しそうだったけど、心が折れたら殺されるような気がして、必死に虚勢を張った。

「は、はあ。すみません。いや、どうしても気になっちゃいまして……。あの、今この機械を動かしているのは何のためなんですか？ お風呂も使いませんし、夜中はスチームも動きませんよね？ ここ数日は夜遅くまで起きてたんですが、この時間にボイラー室が動いていたことはありません。今日だけどうして？」

「フフ。準備運動というやつさ。自動車なんか想像してみれば分かるだろう。長い時間動かさないといけばバッテリー上がりなどのトラブルはもちろんのこと、単純に車の寿命が減り安くなる。一月に一回位は動かしてやらないといけない」

「一月に一回？ だけどボイラー室は毎日動いているじゃないですか」  
「ボイラー室の役目は、君達寮生が知っている以外にもあるのだよ」

ボイルさんはディスプレイをタッチし、ボクの方を——ボクの足元へ視線をやった。すると信じられないことに、ボクのすぐ下の床が一瞬にして透明になった。

透明になったと聞くと君は不思議に思うだろう。だってここは地下なんだ。真っ暗な地中にいれば透明になったかどうかなんて分からない筈——とこころが違ったんだ。床に広がったのは街並みだった。

ボクは月明かりに照らされた街並みを見下ろしていたんだよ。ボクの眼下で、航空写真のように広がる街並みがゆっくりとスライドしていくんだ。

虚空寮は空を飛んでいたんだよ。

尻餅について、ボクは呆然ぼうぜんとした。

「心配するな。床を透かしているだけで、落っこちやしないから」

「だ、だってこれ、何なんです。どういう仕組みなんです……」

「我々は君達が言うところの宇宙人でね。五年前に不時着した際、艦船ごと虚空寮に寄生させてもらった」

「きつ、寄生って？」

「まあ、分かりやすく表現するなら同化だろうなあ。我々の船は生きていてね。設定次第で船の細胞が周囲を取り込むように出来るのさ。そうすれば修理なんかも楽だからね。今や虚空寮全体と同化してしまったよ」

目を細めて遠くを見ているようなボイルさんに、ボクは参ってしまった。この人は頭がおかしいんだろうか。でも現に、すぐ下には街並み広がっている。ああそうか、この風景はコンピュータ・グラフィックかも知れない。ただ単に映像を映しているだけかも知れない……だけどそんな機能が付いているなんて尚なおよさら更変だ。

どこの建物に、床に映像を映す機能を付けるだろう。それもボイラー室なおよさらにだ。それにあの気持ちの悪い目玉は、どう見ても作り物には見えない。

ボクは怖くなってきた。こんな秘密を知ってしまったボクは、これからどうなるのだろうか？

「そういう訳で、一月に一度は飛ばないと機器類が錆び付いてしまうから、こうしてリハビリ飛行を行うという訳だよ。ボイラー室の外は強力な催眠音波で満たされているから、誰一人として虚空寮が飛行している事には気付かない。もちろん、飛行中の船を外から視認することも出来ない」

「でも、深夜バイトなんかしてる人は、丁度この位の時間に寮に帰って来る人もいると思うのですが……」

「心配ご無用。地上には擬態が置いてある。我等われらの技術に掛かれば、地球の建造物を丸々コピーするなど造作無いことだ。無論ベッドの上で眠る寮生達も完全に再現しているぞ。さらに擬態内では、今船を満たしている催眠音波をかなり弱めたものを発しているのだ、帰宅した寮生は何も不思議がらず、自身も深い眠りに就くという訳だ」

ボクは夢心地でその話を聞いた。そして、どうしてこのボイルさんはこうも秘密をベラベラと話すのかと不審に思った。

「このボイラー室も元々はここまで大きくなかったが、船を飛ばすためにはこれ位の大きさが必要だった。船体全体へエネルギーを供給するために、パイプも張り巡らせ

る必要があった。安心してくれたまえ。あと四年か五年したら故郷へ帰る計画だ。無論この場所には虚空寮の擬態を置いていくし、君達寮生も擬態に残して去る計画だ」  
ボクはその説明に逐一<sup>うなず</sup>頷いた。心証を悪くしたくなかったからだ。折角こう言ってくれているんだ。気分を害して殺されたら堪<sup>たま</sup>らない。

「ところで君は、もしボイラー室に辿り着けなかった場合はどうしたと思うね？」

「……そうですね。かなり粘ってみると思いますが、それでも駄目ならボイルさ——あなたに頼み込んでみると思います。ボイラー室の中を見せて下さいって」

「そうかいそうかい。君ならそうしたろうね。それで中を見たら、君は満足するかな？」  
「どの機械がどういう役目をしているのか説明して欲しい……」  
「……と思ってたんですが、さすがにこれだけの設備がどかんと置いてあったなら、見ただけで満足してしまうと思いますねー」

ボイルさんは満足そうに頷くと、お尻のポケットからメモ帳を取り出し、捲り始めた。目当てのページが見付かったようで、ボクに尋ねた。

「君は現在、三一八号室に居住しているね？」

「いえ、三一六ですけど」

「素直でよろしい」

ボイルさんは手帳をしまったかと思うと、どこから取り出したのか徐にサングラスを掛け、作業着の胸ポケットを探った。ボクはピーンときた。これは何かのSF映画で見たことのあるパターンだ。

案の定、ボイルさんは胸ポケットから長めの万年筆のようなものを取り出した。

「この先端を見てごらん」

「何ですか？」

すると万年筆の先端が光った！ ボクは目を瞑<sup>つぶ</sup>って倒れた。ボイルさんの声でした。

「ふう。全く厄介な男だ。そら！ 力仕事は勘弁して欲しいのだが……南棟三一六、と」

小岩井君の予想通り、ボクはペンの先端が光る直前に目を瞑っていたよ。恐らくあのまま見つめていれば気絶すると同時にボイラー室内での記憶が消されていたことだろう。ベラベラと秘密を明かしていたのは、ボクを油断させるためだったのさ。

ボクはボイルさんにお姫様抱っこされた。人生初めての経験だったけど、もちろんときめいたりはしなかったよ。え？ 相手が宇宙人のおっさんだからかって？ 違うよ。ボクにはそんなケはないからね。たとえ相手がガチムチのマツチョマンだとしてもときめいたりはしないさ。

ゆさゆさと運ばれてボイラー室を出たらしいところで、ボクは一気に眠くなって意識を失った。噂うわさの催眠音波が充滿しているのだろう。宇宙人のボイルさんには効果のない、催眠音波がね。



「翌朝、ボクは自分のベッドで目を覚ました。睡眠不足だからだろうね。体はやたらとだるかったよ」

僕は信じられない気持ちで荃田さんを見ていた。この人は本気で言っているのだろうか。あのボイルさんが宇宙人だなんて。

「それで、一体どうなったんですか？」

「一芝居打ったよ。ボクには鮮明に記憶が残っているけど、ボイルさんは記憶を消したと思いついでいるんだ。時計を確認したボクは慌てて、洗濯室まで駆けた。ボイルさんは何食わぬ顔でボイラー室を開け閉めした」

それから数日経たって、荃田さんは辛抱堪たまらない様子を装って、ボイルさんに声を掛けたんだそうだ。

「ボクが頼み込むとボイルさんはにこやかにボイラー室に招いてくれたよ。誰にも内緒だよと言ってね。『そらきた』みたいな顔だったから、余計に笑えたよ。一度見た機械類にリアクションを取るのは大変だった……へえ凄いですねえ！ なーんて、アホらしい」

僕に言わせれば、荃田さんがこれまでしてきた話が全てアホらしい気がするのだけど。

「どでかいエンジンの反対側、ディスプレイが現れた部分には、何の変哲も無いパイプが走っていた。ボクがそこを眺めていると、ボイルさんは薄気味悪い目でボクを見ていた。もちろん、真っ黒なあの目では無かったけどね。普通の目だった。でも流石さすがに慌てたよ。『凄いたくさんパイプあるんですね』なんて言って取り繕った。ボイルさんは『虚空寮は四階建てにすれば良いところをなぜか東西南北に間取りを広げているからね。その分大量のパイプが必要になるんだ』と言っていた。何とももってもらしい理屈だよ。本当は宇宙船を飛ばすためにはあれだけのエネルギー経路が必要だったことなのに」

荃田さんは両腕を広げて溜め息いきをついた。溜め息をつきたいのはこっちだ。

「見るだけで満足だと言ったのに、ボイルさんは色々解説を始めてね。念入りなこと

だよ。ボクは調子を合わせてしきりに感嘆の声を上げた」

それから荃田さんはポイラー室に近付かないようにして、次第にポイルさんの警戒の目も感じなくなっていたそうだ。

「いやあ、今日は面白い話をありがとうございました。お酒もご馳走様でした。このお話は、内密にしておきますね」

僕はそそくさと帰ろうとした。去り際、荃田さんは言った。

「色々と根回ししたから、今の話は誰に話してくれても大丈夫だからねー」

「はは……ありがとうございます」

青竜棟の青い暖簾のれんをくぐりながら、僕は首を傾げた。そんな馬鹿な話、したら駄目なんじゃないかな。万に一つも無いけど、もしも本当の話だとしたなら、荃田さんはポイルさんにどんな目に遭わされるか分からないじゃないか。

部屋に戻ると時刻はもう二時頃だった。部屋の両側には、二本の洗濯ロープが張られていて、シャツやバスタオルが干されている。

同室の乃田さんは居なかった。そういえば今日はゼミの飲み会だと言っていた。話せる相手がいらないから飲み過ぎるだろう、と自分自身で宣言していた。本当に残念な

人だと思う。

午前二時ともなると、もうスチームは切れていて、相当に寒かった。僕はベッドに乗り、クローゼットから厚手の黒いパーカーを取り出した。去年の寮祭で記念に作ったという、青竜棟パーカーだ。余っているというので乃田さんからもらったものだ。背中には赤い筆字で『青竜』とレタリングされている。それをお気に入りのグレーのパーカーの上に重ねた。パーカーの重ね着は斬新だと、周りでも評判だったりする。

僕は歯を磨き電気を消してベッドに入った。

それから五分とせず、乃田さんはかなり酔っ払って帰って来た。声のポリウムが馬鹿になっている。

「おう、悪いなあ。起こしたか」

「いえ、さっきまで奇譚蒐集してたんで」

「つくづく、物好きな奴だなあ」

乃田さんは寝間着（上はお決まりの青竜パーカーだ）に着替え、歯も磨かずにもうベッドに入り込んでしまった。

「ああしんどかった」

「一次会で帰れば良かったじゃないですか」

「癪しやくだろうが。寮生がちよつと酒飲んでさつきと帰るなんて」

「そう思うの寮生だけですって」

喋しゃべりもしないでお酒ばかり飲んでいゝなら、それこそ一次会で帰った方が印象はマシだろうに。

知るか、とか、うっせー、とかぼやきながら、乃田さんはしきりに寝返りを打って眠ろうとしていた。余程ゼミ飲みが詰まらなかつたのだろう。

僕は何だか笑えてきたので、ついさつきまでの、荃田さんの話を伝えた。乃田さんのことだから食いつくかと思つたけど、予想外の返答が返つてきた。

「お前、荃田の言う事は本気にするなよ？　っていうか、変なもんもらつてないだらうな？」

「変なもん……って何です？」

「クスリだよ」

言葉に詰まつた。

「荃田はクスリやつてるって噂うわさがある。真偽は定かじゃないが、朱雀の奴らも荃田のそういった黒い噂うわさに関しては笑つて誤魔化す節があるからな。気を付けろよ」

「は、はい。そうします」

クスリだつて？

僕は、去り際の荃田さんの言葉を思い出した。荃田さんは根回しをしたと言っていた。それは、自分がクスリをやっているという噂うわさを流すことだったのでないだろうか？ 何を喋つてもまともに扱われないという、周囲の状況を作り上げてしまふことだったのでないだろうか？

ふん。馬鹿馬鹿しい。

「荃田さんって胡散臭うさんくさいですし、これからは近付かないようにしますよ」

返事は無かつた。乃田さんは酔いに任せて眠ってしまったらしい。

僕も眠ろう。変な話を長々と聞かされて相当疲れたのだろう。瞼まぶたが一気に重くなつた。乃田さんに背を向ける格好になると、あつと言う間に、深い深いまどろみに落ちていく。

今夜はぐっすりと眠れるだろう。

どこかで、低いエンジン音が鳴っているような気がする――。



## 七瀬の答え

背後から両肩を押さえつけられた。

「おやおや小岩井君じゃないかー。そんな貧相な顔して何をしてるんだ？」

「わ！ 仏谷<sup>ふつや</sup>さん驚かさしないで下さいよ。貧相な顔はいつものことですよ。白虎棟の<sup>こばし</sup>小橋さんの所に奇譚蒐集に行つて来ます」

「白虎だとう？ けしからん奴め」

仏谷さんはおどけた感じで歌舞伎顔を作った。でも次の瞬間には機嫌良さそうに一言。

「明日のフランス語起こしてねー」

そう言つて部屋へ帰つて行つた。明日は午前中に一年次必須科目の外国語の講義がある。最長老が一年生と同じ講義に出席するというのもおかしな話だ。まあ、代返（欠席した時友達に出席の返事をしてもらうズル）を頼まないだけマシだろう。

そろそろ夏休みも近付いてきて、レポートの課題が出されるかも知れないから、仏谷さんも欠席したくないのだろう。

僕は気を取り直して白虎棟へ向かった。白虎の同期には同じ学部 of 奴がいなから、あまり来る機会も無かった。同じ廊下、同じ間取りをしているけど、他棟と比べて多くの扉が閉じられている。柳田さんに話を聞かせてもらった時以来かな——幽霊はいつでも存在している、なーんて今思えばベタな話だなあ。

他棟では寮生同士が行き来しやすいように、寝る前までは扉が開けられていることが多いのだけど、白虎棟はほとんどの扉が閉じられている——まあ、暮らす上ではそれが普通の光景なんだけど。

僕は炊事場を通り過ぎて、端の部屋へ向かった。四二三号室。青竜棟なら物置部屋に当たる位置だ。

扉の向こうからかすかにギターの音が聞こえた。ノックをするとすぐに返事がした。僕は扉を押し開けた。

「おう、来たな小岩井」

小橋さんは肩からエレキギターのストラップを外した。僕が来るから、アンプとヘッドホンにつながずに弾いていたようだ。

「ボディが黒くて、三角形の底辺がいかつく尖<sup>とが</sup>った形状をしたギターだけど、小橋さん自身は爽やかな短髪で、柔和な印象を抱かせる。軽音サークルに所属している院の二回生で、その他にバンドもやっており寮の外でもかなり知名度のある人だ。

学部の女の子が小橋さんの話をしているのを聞いたことがある。僕の名字をつかまえて、「同じ小なのが大違いだね」なんて笑われて腹が立ったけど、小橋さんが相手ならまあ仕方ないかなという気分になってしまう。

正直、このイケメンが何でこんな<sup>しな</sup>萎びた寮にいるんだろうって感じだ……さらに意外なことに、つい最近になって、この人が以前に寮長を務めていたということを知った。

「まあ座れよ。普段あんまり酒飲まないけど、青竜棟生が来るってんで酒用意したんだぜ」

「いやあ、僕はあんまりお酒強くないですよ」

「謙遜<sup>けんそん</sup>するなよ。青竜は馬鹿みたいに酒飲むからな——つと、いや、今のは悪口じゃないぞ？」

「分かってますよ」

「小岩井君は知らないだろうけど、昔は白虎と青竜、ものすげえ仲悪かったんだ」

「先輩から聞いたことがあります。挨拶もしないような仲だったって」

「その辺りのいざこざを俺の代から改善して今がある訳だが……実は俺みたいな奴が改善出来たのには理由があるんだ。早い話がな。根が浅かったからなんだ。どうして仲が悪いのかって部分が、実に馬鹿馬鹿しいことだったからなんだ」

「それ、興味ありますね。一体どうして仲が悪かったんですか？」

「一言で済ませるなら、大昔の先輩達が原因だった。しかもその原因は、あつて無いようなものだった」

「あつて無いようなものですか。気になりますね。大昔っていうとどの位ですか？」

「もう三十五年位も前のことだ。白虎の先輩と青竜の先輩の間に諍いさかいが起こって、互いの棟がそれに影響されたんだ。それが発端であつて、全てだった。問題の先輩達が寮を去つても、互いの棟の嫌悪感が消え去らなかつた。そういう馬鹿らしいことだったんだ」

「大昔の、要するに他人事つてことですね」

「まあそういうことになる。もっとも、自分と同じ棟で生活している奴のことだ。他人事とも言い切れないが、それを引きずっていつまでも相容れない関係が続けるのはおかしいよな。色んな人間が一つの箱に収まって、だからこそ影響し合つて成長出来

るのに。嫌いなら嫌いで互いを認め合うべきなのに、あの頃は嫌いの一言で完全に切り捨ててしまっていた。与党と野党みたいなもんだな。気に入らないものは切り捨てる。でもそれじゃあ何の意味も無い。他人の存在を認めたくないならア・パートにでも住んでれば良いんだよ。そう考えた俺は、棟を越えた同期全員と話し合う場を設けて、白虎と青竜が互いに認め合える環境に作り替えたいと宣言したんだ」

僕としては、白虎棟に対して特別の嫌悪感はない。他の同期だって普通に白虎の奴とも仲良くやってる。そういう関係は小橋さんが築いたのか。

「そうだったんですか。それでその、野次馬根性丸出しで申し訳ないんですが、昔あった諍いって一体何だったんです?」

そう尋ねると小橋さんは鼻を鳴らした。

「下らない話だ。下らないんだが、これが中々に面白い話だった。この話を知るに至ったのは俺が一年生の六月の時。寮祭で知り合ったOBから白虎と青竜の仲違いの原因を聞き出し、その発端となったOB二人を突き止めることが出来たんだ。俺が会いたいと連絡を取ると、快く応じてくれた。しかも、その仲違いの原因の二人が、仲良く一緒に面会してくれると言うんだ。わざわざこの街まで出向いてくれるってな。

それで約束した居酒屋へ行くと、『お連れの方ですね』と、店員に席を示された。そ

こには険しい顔をしたじいさん二人が向かい合っていた。何やらああでもない、こうでもない、低い声で言い争っているような雰囲気だった。俺は苦笑したよ。三十五年経っているから、今はもう六十近い筈だ。それなのにこの二人は未だに仲が悪いんだらうか。そう思いながら、二人に挨拶した。

一人が白虎棟の左治木さん。白髪混じりで顔は彫りが深く、えらが張っていた。威厳がある感じで、凄味があった。白いシャツに、赤地に白のドット柄が入った洒落たネクタイをしていた。

もう一人が青竜棟の右沢さん。痩せていて、完全なスキンヘッドで坊さんみたいな達観した雰囲気だった。話を聞くと本当に坊さんって訳ではなくて、小学生の頃、十円ハゲを隠すためにスキンヘッドにしたのが始まりだそうだ。どうにも髪が生えていると落ち着かなくなってしまうらしい。ちよっと変わってるよな。小学生なんて、普通ハゲは嫌がるものなのに。そんなハゲ頭なのに、右沢さんは青いアロハシャツを着ていたよ。何とも若々しいくて、アンバランスなセンスだと思った」

小橋さんはその時のことを懐かしそうに、そして楽しそうに話し始めた。仲違いの原因となった左治木さんと右沢さん。二人から話を聞かせてもらった時の、小橋さんの気持が手に取るように分かった。

まだ酒を飲み初めて間もないのに、僕はもう酔ってしまったのだろうか。聞こえてくる言葉は小橋さんのものではなく、会ったことのない二人のもののように聞こえた。まるで、僕が小橋さんに成り代わって、左治木さんと右沢さんを目の前にしているような感覚だった。



「白虎と青竜の仲違いが今まで続いていたこと、実は俺達、お前に聞いて初めて知ったんだぜ……というかそもそも、まさか二つの棟がそんな関係に陥るとは夢にも思っていないかった、というのが本音なんだ」

左治木さんは低くがらがらの声で、荒々しい口調だった。映画で強面の役なんかやらせたらハマりそうだ。二人の孫がいるそうだ。

「そうそう。私もだ。自分達の中で解決していた問題が、寮に残って波紋を呼ぶとは……」

右沢さんは左手でスキンヘッドを撫でながら言った。静かなのによく通る声だった。それにしてもさつきからちよくちよく、左手が頭へいくのが気になる。きっと癖なの

だろう。

右沢さんが未だに独身だということを、左治木さんは笑い飛ばした。

「どうだ。おめえも定年を迎えた今となつては、新しい女を求めなかったのを後悔するだろう」

「別に思わんよ。私が愛するのは生涯彼女一人だ」

熱爛あつかんを注文し、銚子で互いに酒を注ぎ合っている。最初の印象と打って変わって、仲は良さそうに見える。

俺は早速本題に入った。白虎と青竜の関係を修復したいと説明した。

「電話でも言っていやがったな。寮祭に来たOBを捕まえて質問責め。それで俺達に連絡を取れたって訳だ。勇氣あるよなあ。小橋君は」

「勇氣なんて良いものではないです。俺はただ単に、我を通したいってだけです」

「そうかい——しかし当時を思い出すと笑えてくるぜ。そして何より悔やまれる。蓋を開けてみれば、余りにも下らない出来事だったんだ。その下らなさを確認したところで、俺達がしっかりと蓋をまた閉めておけば、虚空寮に暗い影を落とすことも無かつたらうに……なあ、右沢？」

右沢さんは大きく頷うなずいて、唇を曲げて薄く笑い、酒を含んだ。それを合図にした

のか、左治木さんは語り出した。

左治木さんと右沢さん、交代に語り進んでいく当時の下らない事件に、俺は聞き入った。

俺はね、その時の感覚が忘れられないんだ。周囲の酒飲み達の騒々しさから、別の世界に取り込まれていくようだった。音が消えて、彼らの記憶に飛び込んでいくようだった。



今も忘れられねえ。俺が大学院を出る直前のことだ。つまり卒寮直前の三月に事件は起こった。三月には珍しい雪がぱらついていたなあ。俺はこの街で生まれ育ったが、三月の雪は滅多めったに無いどころか、それまでの人生で一度も経験したことが無かった。嘘うそみてえだと思った。

嘘みてえな出来事ってのは、重なるのかもなあ。

俺には当時、交際している女がいた。七瀬ってんだ。七瀬は隣街の女子大の一年生で、俺の人生で初めての彼女だった。笑えるだろう。院生も最後の年になって、初め

て女の手を握ったんだ。草食男子なんて死語が当て嵌まるような男だったんだよ俺は。七瀬は長い黒髪の似合う娘で、バイトに勉強に励む真面目な娘だった。決して美人ではないが愛嬌があり、自分からはあまり意見を言えない弱さ、守ってやりたくないじらしさがあつてなあ。俗世の汚いものは知らねえ、そういう、俺には勿体ない娘だった。

だから驚いた。オランダ靴から七瀬が男と一緒に出て来やがったんだ……オランダ靴つてのはホテルのことだ。寮からそう遠くない距離に当時はあつた。そこから、七瀬が出て来やがったんだ。

一緒に出て来た男がな、こいつ、右沢なのさ——。



その日の晩だった。私の部屋に左治木が訪れた。棟こそ違えど同期だし、酒を飲む機会に互いの腹の内を明かしたこともあつて信頼を置いていた。だから様子がおかしいことにもすぐに気付いた。何事かと思つた。

「なあ右沢。お前、七瀬とどんな関係だ」

左治木が出し抜けにそう問うものだから、嫌な気分になった。オランダ靴から出た所を見られたのだろうと予想した。

「付き合っている。二年前からだ」

私は正直に答えた。左治木はそれを聞くと言葉を探している様子だったが、「そうか。悪かったな」とだけ言い残し去って行った。



二年前からだだよ。俺は怒りのやり場に困っちゃった。というのも、俺が七瀬と付き合い初めて一年も経<sup>た</sup>っていなかったからだ。浮気相手は俺の方だということになっちまう。

右沢は良い奴だ。傷付ける訳にはいかねえ。そう思うと、七瀬に詰め寄ることも出来なくてなあ。

さきみどり公園のベンチで七瀬と座り、手作りの弁当を食いながら、これを右沢にも作っているのかと思うと、やるせねえのなんのつて。

「ご馳走<sup>ちそう</sup>さん。美味かったぜ」

普段ならいくらでも聞かせてやれる笑い話が、どうにも出て来なくてなあ。七瀬を笑わせてやりたいと、いつだってそればかり考えていたのに、右沢との関係を知っちゃったら、どうにも言葉が出ねえんだ。

俺の気も知らねえで、七瀬が困った顔で聞いてきやがる。

「最近どうしたの？ 元氣無いね。じゃあ、手をつなごうか。ね？ 二人のおまじない。元氣が出てくるよ？」

頬ほおを染める七瀬に、屈託の無い笑顔で手を差し出され、俺は息を詰まらせ、結局、手を握ったのさ。

歩幅を合わせて歩きながら、俺は決意した。

右沢も七瀬も傷付けたくねえ。もうじきしたら、俺が別れるしかねえだろう。

そう思っていた矢先だ。白虎の同期に感付かれちまったんだ。

俺と七瀬はひっそりと付き合っていた。関係を知っているのはその同期位だったなあ。

その男の名前は山田中。面白え名だろう？ おめえは山田なのか田中なのかはつきりしろってな。ザンギリ頭で額が狭く、眉とまぶた脷まぶたがかなり離れていて、見方によっては間抜けな風貌に映るんだが。どうした訳か頭ごなしに馬鹿には出来ねえ、侮れねえ

……そんな妙な雰囲気のある奴だった。

実際、山田中には変わったところがあつてな。何でか知らんが自転車に乗れねえし、カレーライスはカレーと飯を別の器に入れねえと食べられねえし、大学では教官相手に弁舌をふるつて講義を中断させちまうこともあつた。

山田中は、鼻にかかる舌足らずの口調で俺に聞いた。

「ねえねえ左治木。お前さん、七瀬さんと何かあつたのかい？ おでバイト先で、七瀬さんの友達から聞いたんだよ。七瀬さん、最近彼氏が変わって心配してるらしいよん」

俺は頭を抱えたよ。誰の浮気のせいでこんなになつてるんだと思つてな。

流石さすがに疲れちまつて、山田中に事情を話した。七瀬が右沢と浮気している——じゃねえな。どうやら俺が浮気相手らしいつてことを話した。

「だから七瀬が心配する彼つてえのもの、俺のことじゃなく右沢のことだろうぜ」

ホテルから出て来たその日に、野暮にも俺が問とい質ただしたものだから、右沢も付き合いづらくなつちまつたのかも知れねえ。俺は責任を感じた。

「へええ！ あの七瀬さんが右沢とねえ……それは大変な状況だ。でも七瀬さんつてあどけない顔してるのに、おっかない人だねえ」

「やめてくれ。それでも俺は好きなんだからよ。だが……。丁度卒業も近付いている。右沢も七瀬も傷付けたくはねえから、穏便に別れようと思うんだ。だから誰にも言うなよ。すぐに終わりにするからな」

「分かったよん。おで、誰にも言わないからさ」



左治木はそう思っていてくれていたようだが、厄介な出来事が起こってね。

夜八時位だったと思うなあ。七瀬と食事して、彼女をアパートまで送ってから寮に戻ると、玄関の外に青竜の棟長の姿が見えた。

当時は玄関の横、事務室の窓の下の辺りで犬を飼っていた。てっきり棟長は犬とじやれているのかと思っただが、私を見付けるや否や駆け寄って来た。

切羽詰まった様子だったよ。随分と長いこと私を待っていたらしい。どうして携帯電話に出なかったのかと、散々文句を言われた。七瀬と会う時は邪魔をされたくないから、電源を切るようにしていたんだ。

棟長に連れられて行った私の部屋の前には、同じ棟で唯一の同期、上下が立かみしもっ

た。

自室を覗き込むと、どうやら消火器が撒かれたらしく、部屋中真っ白だった。

机もベッドも左に寄せてある。消化剤が特に集中したと思われるベッドの上の布団の表面はポロポロに破けている。どうやらこの布団が出火元だったらしい。机の上に山積みしてある参考書も、消化剤がかなり付着してしまっている。入り口正面の、左右に二つならんだサッシ窓にも、いくらか汚れが見られた。

「すまん右沢。消火器を撒いたのは俺だ。正午過ぎのことだ。昼寝をしていたんだが、火事だという叫びを聞いて飛び起きて、慌てて消火器を手を取った」

「叫んだのが僕です。廊下を歩いていて、右沢さんの部屋のベッドが燃えているのに気付いて、大慌てでした。バケツに水を溜める余裕は無かったです。消火器は部屋のすぐ前に置いてありましたから、それで上下さんがとっさに……」

「いや、気にするな。原因は分からないが、燃えていたのならやむを得ん。早い段階で消化出来て良かった。机の上の参考書に引火していたら大変なことになっていたろう。そうだ上下、消防へ連絡は？」

「寮長とも相談して、連絡しないことになった。火元が分からんし、報知機の作動前に鎮火出来たからな。大学に悪い印象を与えたくないということになった」

「そうか。大事にならなかつたなら、とにかく良かった。しかしなぜ火が……」

「それが分かららん。布団の辺りをよく調べたが、煙草の吸殻も見当たらん。右沢も吸わないだろう。お前の留守に、部屋へ堂々と入り込むような奴は同期の俺位しかないが、俺も煙草は吸わんし」

棟長が暗い声を落とした。

「ですから、もしかしたら、誰かが右沢さんの部屋に……」

私はぞっとした。放火したということか。上下も棟長も、不安げな表情だ。

私達三人は、向かいの上下の部屋へ集まった。扉を閉め、鍵を掛けた。

「ぼや騒ぎの時に扉を閉めていたのが悔やまれる。後輩へ渡すための研究資料をまとめるので徹夜続きでな。限界になって昼寝していたんだ。扉を開けておけば、何者かがお前の部屋に入るのに気付かない筈はずは無いの。おい右沢。お前最近、何か変わったことは無かつたか？」

「……いや、特には何も」

言いながらも、私の脳裏に左治木の思い詰めた顔が思い浮かんだ。七瀬と初めて関係を持ったその日に、左治木は突然、七瀬のことを尋ねてきたのだ。ああ、見られたのだろうと悟ったが、それと同時に感じたのは、左治木も七瀬のことを好いいているの

ではないかという不安だった。

「お前は七瀬という女性と付き合っているそうだな」

心を読まれたかと思ひ、私は上下を睨にらんだ。

「……それがどうした」

「白虎棟で妙な噂うわさが立っている。七瀬という女性は元々左治木が付き合っていた。

それをお前が寝取ったという噂だ」

「ええっ？ 右沢さん、そうなんですか？」

「何を馬鹿な。そんな話は知らん。今日だって七瀬と会った。そんな原始時代のドラマのようなことがあるか」

「でも、右沢さんがそう思っているとしても、左治木さんが恋人を略奪されたと考えたとしたら、復讐に部屋へ火を放つていうことも……」

「そんなの、馬鹿げている」

「うむ。なら話は簡単だ。右沢、お前、左治木のところへ行つて来い」

「そうだな。そうさせてもらう」

「ほ、本当ですか？ 大丈夫ですか？」

上下かみしもに、念のためついていくかと問われたが、断った。

「左治木とは酒を交わしている。話の分からない男じゃない」

そう言って俺は上下の部屋を後にした。

左治木を訪ねる前、白く汚れてしまった自室を改めて覗いた。

私はスリッパを履いたまま室内へ進んだ。上下は出火の原因らしい物は見付からなかったと言っていた。私は念のため、部屋の左側、布団の上と、ベッドの下、そして机の下を覗き込んだ。やはり、気にかかるものは見付からなかった。

溜め息をつき、右の窓サッシに置いてある水晶玉を眺めた。七瀬からもらったもので、近くで見ると、やはりこれも、斑まだらに白く汚れていた。

水晶玉の冷たい表面を撫でた。指に粘り気のある消化剤がこびりついた。七瀬の、女らしい高い声が蘇る。

『水晶って、不思議な力があるんだよ。困った時にはこれを見つめて、助けて欲しいと念じるの。そうすると、自分がどう行動すれば良いか分かるから』

水晶に映り込む、私の口元がほころんでいた。七瀬の、世間と少しずれた感覚が私は好きだ。静かに、言葉を交わさなくとも同じ時を過ごせればそれで良かった。一人ぼっちの七瀬は、私が隣で守ってやらねば——しかし、もし本当に左治木が、七瀬と付き合っていたとしたら……。

私はどうすれば良い。

水晶玉を見つめた。そこには、力の無い、暗い顔の坊主が映り込んでいるだけだった。

——猫の鳴き声があった。窓の外を見ると、白い扉の上、猫避けのペットボトルのすぐ横で黒猫が丸まっていた。縁起の悪いことだ。それに何より私は猫アレルギーだ。嫌な気分になってブラインドカーテンを下ろし、部屋を後にする——いや、扉の前でまた引き返した。

また何か起きては困る。水晶玉はハンカチで丁寧に包み、机の収納へしまいこんだ。



右沢が俺の部屋を訪ねた時、俺は山田中と一緒にいた。右沢に言われるまま、俺は山田中を残し、外へ出た。

三月の夜はそれなりに寒かったなあ。サテンの派手なスカジャンを着込んでいたが息が白んだ。右沢も流行りのダッフルコートポケットに手をつ突っ込んで、俯いて歩いていたな。剃り上げたその頭を隠した方が余程暖かそうだと思ったもんだ。

闇魔坂えんまを徒歩で下った。五分位かねえ。何も喋らねえんだ。右沢も俺も。もちろん、右沢がどうして俺を呼び出したのか、俺には予想がついていた。七瀬のことだろう。だが、話の切り口は意外に思ったぜ。

「実は今日の昼、私の部屋で放火と思しき事件があつた」

「ああ、そりゃあ、周りから聞いていたぜ。原因が分からないってんで、俺の棟じゃそこかしこで放火の疑いが囁かれていやがる。それを山田中とも話していたんだ」

「俺は信じてはいないが……上下が言っていたことだ。七瀬は、元々お前が付き合っていた。それを俺が寝取つたという噂うわさだ。それで——」

俺は立ち止まり大声を上げた。

「馬鹿な！ そいつは違う。違うぞ右沢。俺は……俺はなあ……」

真実を話したさ。話すしかねえよなあ？ そんなあり得ねえ話で放火の疑いまで掛けられたれたんじゃ、洒落にならねえ。

俺が付き合い出したのは十カ月前。時期から言って、浮気相手は俺の方だと正直に話した。右沢は言葉を失っていたなあ。

それから何となく、俺達はさきみどり公園へ入り込んでいた。門を入れて、寂しい木々の並ぶ遊歩道を歩いた。遊具のある広場の手前で、ベンチへ座った。空には月が

出ていた。満月とは呼べねえが、十分に明るかったな。よく覚えている。

ベンチの正面に立つ丸時計が九時を示していた。遊歩道はこの時計を軸にして、V字型に二股へ分かれていく。

よく待ち合わせに使う場所だった。俺がベンチで待っていると、七瀬は時計の左の道から駆け足でやって来る。ダツフルコートを弾ませるその姿が可愛らしくてなあ。

「俺なあ、ここでよく七瀬と会うことがあるんだ」

右沢は意外そうな顔だった。

「そうなのか。七瀬は、余りアウトドアは好きではないと思っていた。二年も付き合っていて、私は七瀬のことを分かっていたいなかったのかも知れない。七瀬は、お前に惚れたのかも知れないな。私は暗いから、息苦しかったのかも知れない」

「おい、一体何を言い出しやがる」

「左治木。お前は良い奴だ。明るいし、話も上手い。私は思えば、彼女を腹の底から笑わせたことはなかったかも知れない。いつも彼女の部屋で勉強の話や、趣味の占いなんぞをして時を過ごしていた」

「占い？ お前が……いや、七瀬か」

「ああ、七瀬の趣味だ」

今度は俺が意外な気持ちになっちゃった。趣味らしい趣味は無いとばかり思っていた。俺がふざければ、七瀬は隣で鈴を鳴らすように笑ってくれる。それが俺は心地好かったが、我が儘を押し付けていただけなのかも知れねえ。

十カ月も恋人面しておいて、俺は七瀬の趣味すら知らなかったって訳だ。いや、七瀬に隠されていたのかもなあ。やはり俺が別れるべきだと思った。

だが……。

それまで抱いていた決心が、右沢と面と向かって話していると揺らいじまったんだ。汗にまみれた手を握り締めた。

「すまねえ右沢。浮気相手の俺は、しかし、七瀬が好きなんだ」

「私も、七瀬が好きだ。左治木、お前は友人だ。七瀬という女性に惚れた、大きな共通点が出来てしまった。私がもう少し気持ちの好い男であれば喧嘩で彼女を奪い合うことも出来たのだろうが——」

「おいおい。そんな一世紀前のドラマみたいな展開はごめんだぜ。だから、七瀬に、どちらを選ぶか決めてもらうってのはどうだ？ 電話でなく、直接会ってだな」

俺が持ち掛けたのは、自分に自信があったからだ。つくづく汚え男だよ俺は。右沢はいつもの落ち着いた声で、乗ってきやがった。

「ああ。そうだな。こういうのはどうだろう。明日午後八時にここ、さきみどり公園のベンチで待ち合わせるんだ。その時、私は七瀬に、青いハンカチをコートのポケットから覗かせておくように言う。先月の誕生日に贈ったものだ」

「ハンカチだと！ 奇遇だな。俺は黄色いハンカチを贈ったぜ」

「幸福の黄色いハンカチか。お前だって、大昔の流行りに乗っているじゃないか」

「大昔じゃねえさ。つい最近リメイクされた」

右沢は笑っていた。俺は急に恥ずかしくなっちゃった。映画になぞらえたプレゼントなら、余計に格好が悪いかも知れねえ。右沢は真面目な顔に戻って、続けた。

「では左治木は、黄色いハンカチをポケットから覗かせるように言うんだ。その時、こう付け加えるのを忘れるな。『自分のことを心から好きならば』と、こう言うんだ。

七瀬を問い詰めることはない。午前中に私は七瀬に約束を取り付ける。午後、左治木も七瀬に話して欲しい。そうすれば、私達の言わんとしていることを七瀬は酌み取ってくれる筈だ」

「おう。俺と右沢、どちらを選ぶかってことだな。決まりだ」

俺達はそれで安心しちゃって、しばらく他愛無い話をした。卒業後の進路だとか、寮の思い出話だとか、そういったことだ。

やはり、右沢は良い奴だと、改めて思った。



私達は寮へ戻った。玄関の横で犬の頭を撫でた。私達の気も知らず、のほほんとした様子で、癒いゃされたのを覚えている。

左治木と寮食堂の前で別れ、青竜への渡り廊下を歩いていると、前方から山田中がやって来た。

「やあやあ右沢。部屋は酷ひどい有り様だったねえ」

私は眉間に皺しわを寄せないように意識して、返した。

「ああ、すっかり忘れていた。片付けるのも骨だ。今夜は上下の部屋で眠らせてもらおう」

「部屋を調べさせてもらったよん。火元になりそうなものが無いかと思ってね。あ！

一応上下に見張っててもらったからね。おで、泥棒なんかしてないからね」

「いや、別にそんな心配はしていないが」

「でも不思議だねえ。原因不明のぼや騒ぎなんて。火の無い所に煙は立たないって言

うのになえ」

「その諺の使い方は違和感があるな。原因不明のぼや騒ぎ以外の場面で使わなければ」

「あはは。そうか。そうだねえ」

山田中は肩を揺らして笑った。どうにもやりにくい男だ。右沢はこいつを「面白い奴」と評するが、私としては、どうにも波長が合わないように感じる。

「でもおで、本当に不思議に思うんだよ。放火魔は何がしたかったんだろうねえ？」  
公園で左治木から聞いたことだが、山田中は七瀬と左治木との正確な関係を知る唯一の寮生だという。だとすれば……。

「私と左治木、そして七瀬の関係を知っている者が、事を大きくしようと悪戯いたずらをしたのだろうな」

そう。つまりは君が一番疑わしいんだがね。山田中。

「そうだよねえ。そう考えるのが自然なんだけど、だとするとおかしいんだよねえ」  
「……何がだ？」

「火元、残しておくでしょう」

山田中は、元々目から離れた位置にある肩をさらに釣り上げた。一重瞼まぶたがやけに鋭くこちらを覗きのぞ込こんでいる。

「言わんとしている意味が分からんのだが」

「犯人の目的が、今回の浮気事件のいざこざを大きくしたいって言うんなら、誰がどう見ても放火と見せたかったってことでしょ？ 左治木が右沢に仕返しした。そう見せたかったとしたら、火元は残さなきや駄目だよ。君は煙草を吸わない。上下も煙草を吸わない。そういう状況で、君の布団の上に吸殻なりマッチのカスなりがあったらどうだい？ そしてそのカスの主が現れなかったなら、これはもう見るからに放火だよ。大騒ぎだ。謎のぼや騒ぎじゃ弱いんだよ。誰かが放火したのかも知れない、それを強調しなくちゃ駄目なんだ。ところが、犯人はそれをしない」

「そんなの、分かりやうがない。そうだな。簡単な想像だが、あからさまに放火と映るのなら警察を呼ばなければならなくなるだろう？ 犯人はそれが嫌だったのさ」

「あからさまに放火事件と分かっていたとしたら、おで達は警察に連絡するかなあ？」  
「……しないな」

この寮の問題はこの寮で解決する。事件が起きて、大学に迷惑が掛かるというのは、この寮にとっては死活問題だ。

「でしょう？ 放火と思わせないメリットは、放火魔には皆無なんだよ。なぜ、どうして、放火魔は痕跡の残らないぼやを起こしたのか、あるいは、痕跡を回収してしま

ったのか。そして、痕跡を回収出来るとしたらそれは誰なのか……」

山田中が目をきらきらさせて近寄って来たものだから、私は気味が悪くなったよ。彼はどうやらこの状況を楽しんでいるらしい。シャーロック・ホームズにでもなったつもりだろうか。ホームズは自分のことを「おで」とは呼ばないが。

「悪いが、明日は大事な用事があるんだ。もう良いだろう。そもそも、考えにくいのが、放火じゃないのかも知れないんだ。そう騒ぐな」

「そうだよねえ！」

山田中が大声を上げたものだから、私はびくついた。何なのだ一体。

「別に放火と決まった訳じゃない！ そうそう。そうだよねえ……」

うんうんと頷きながら、山田中は腕組みをして黄竜棟へと去って行った。あのまま何もせず眠ってくれたら良いが。左治木が捕まらないことを祈ろう。

明日は七瀬と恋人でいられる、最後の日かも知れないのだ。邪魔はしないで欲しいものだ。



部屋で携帯を開いて七瀬の写真を眺めていると、山田中が訪ねて来やがった。慌てて携帯を閉じた。

「何だこんな時間に。明日は大事な用があるんだ。俺はもう寝るぜ」

「つれないなあ、おで、せっかく聞きたいことがあつて来たのに」

そんな言い方されたら気になっちゃうなあ？

「んだよ。何を聞きてえんだ？」

「化学の参考書持ってないかい？ おで、文系だからその辺りの本一冊も無いんだよねえ」

「あるっちゃあるが、もう研究も終わってんのに、今さら何を勉強すんだよ——ほらよ。俺が持ってんのはこれで全部だ。後輩にもっと熱心なのがいると思うぜ。高橋なんか化学好きだろう」

「そうだねありがとう。ちょっと調べ物をねえ——そう言えば、右沢も明日大事な用事があるって言ってたなあ。七瀬さんとの話は上手うまくいってるんだねえ？」

「う、うるせえなあ。俺と右沢の問題だ。放っておけよ」

「はいはい。それじゃあお休みー」

山田中が去ると、俺は一気に疲れてきた。電気を消してベッドに横になり、また、携帯の中の七瀬を見つめた。

明日、七瀬はどちらのハンカチを選ぶだろう。七瀬は、俺を選んでくれるだろうか。



翌日の午後七時、私と左治木はさきみどり公園のベンチへ腰掛けていた。歩道を照らす灯火は少ないが、星が降り月も照っていて、辺りはよく見えた。白い息が闇に漂っている。

左に座る左治木へ声を掛けた。

「急ぎ過ぎただろうか」

「構わねえだろう。最後の待ち合わせに遅刻なんか御免だからな」

「最後の待ち合わせになるのは、私の方かもな」

約束の時間が近付くまで、私達はいつも通り言葉を交わした。卒業前に、一度酒を

飲みに行こうと、そういう約束を交わした。

午後七時四十五分。七瀬の性格からして、そろそろやって来るだろう。左治木もいよいよ押し黙ってしまった。

私は時計の横へ伸びる道を見つめ、七瀬が姿を現すのを待った。

午前中、七瀬に約束を取り付けた時のことが思い出された。

『外で待ち合わせだなんてどんな風の吹き回しかしら？ いいわ。あなたのプレゼントはいつも身に付けているもの。それをポケットから覗かせれば良いのね？ どうしたの。不安そうな顔。私に言えないことなら、水晶さんに伝えても良いのよ？』

七瀬はいつも通りの雰囲気だったが、やはり、私の不安を感じ取っていたようだった。午後、左治木と約束を交わす時にはどんな反応をしただろう。私はそんなことを考えながら、道の先を見つめた。



時計の別れ道の先は鋭角に曲がっていて、先が見えなくなっていやがるんだ。だから気付いた時にはいきなり七瀬が姿を現せるってことになる。左の道を凝視しながら、

俺は、七瀬の答えが不安だった。

不思議なもんだ。別れようと決心した癖に、今はまた別れたくないと思っ  
ている。それなのに、もし俺が選ばれた時、俺はどんな顔をすれば良いだ  
ろう。俺が傷付く分には幾らでも耐えてやれるが、右沢が傷付いた時、俺は……。

数時間前、七瀬に約束を取り付けた時のことを思い出した。俺が妙な  
ことを言い出したもんだから、七瀬は悟ったようだった。不安げな表情  
だった。別れ話だと直感しただろう。そして、黄色いハンカチを持っ  
ていけば別れることはない、そういう風に伝わった筈だ。

青いハンカチか、黄色いハンカチか。

七瀬の答えはどっちだろうなあ。そう思った時に携帯が震えて、心臓  
が飛び上がった。右沢に気を遣いながら携帯を見ると、七瀬のメール  
だった。もうすぐ着くそうだと。息が苦しくなり、右沢をちらりと見  
た。右沢はびくりともせず、俺にやや背を向けるようにして、真っ  
直ぐ前を見つめていた。

俺もまた、時計の左の道へ視線を戻す。

次の瞬間だ。

道の切れ目から七瀬が姿を現した。黒髪をなびかせて、クリーム色  
のダッフルコ

トにロングスカート。茶色のブーツ。そのコートのポケットからハンカチが見えた。頼りない明かりに照らされながら、そのハンカチは……黄色に輝いていた。

電撃が走った。七瀬は俺を選んだんだ。

……すまん、右沢。



視界の端で左治木が立ち上がったのが分かった。私は固まってしまい、身動きが取れなかった。こちらへいつもの足取りで歩いてくる七瀬。私と揃いのダッフルコートが揺れて、時計の下へいよいよ近付いて来たところで、ようやく私も立ち上がった。

七瀬が私を見て微笑み掛けている。彼女は私を選んでくれたのだ。彼女のポケットには青いハンカチが覗いている。

その七瀬が時計の下へ来ると、ふと隣を見た。私は目を疑った。そこには、もう一人の七瀬が歩いていたのだから。



そりゃあたまげたぜ。もつとも、七瀬達も驚いていたがな。

「お姉ちゃん何してんの！」

「あ、あんたこそどうしてここへ」

初めて知ったぜ。七瀬が双子だったなんてな。

俺が付き合っていたのが妹の良子。右沢が付き合っていたのが姉の和子。右沢も俺だよ。そりゃあ本音は、せっかく恋人同士だから名字で呼んで欲しい」って頼まれてたんだ。七瀬なんて、山田中なんぞを筆頭に、周りの奴らと同じ呼び方をしている訳だからよ。

しかし本当に下らない浮気騒動だった。浮気なんて、そもそも存在しなかったんだからな。



こうして、私達の事件は何事もなかったかのように終焉を迎えた。もっとも、この事実を話すのは恥ずかしく思われて、寮生には内緒にしていた。上下かみしもら、一部の同期にしか話さなかった。

数日して、卒寮の日が近付き、私は部屋を片付けることにした。

「おう。ついに大掃除を始めたか」  
上下うじだった。

「ああ、流石さすがに骨が折れる」

「まず机の上の参考書からやったらどうだ？ お前の机の上が綺麗きれいになったところを、一度で良いから見てみたかったんだ」

「ふふ。最後にとっておくさ」

談笑しながらダンボール箱へ思い出の品々を仕分けしていると、左治木と山田中が訪れた。

「いよいよだつてな。手伝うぜ」

「おでも、力仕事なら幾らでもこき使ってくれて良いよー」

「ありがとう。でも大丈夫。その辺に座っていてくれて構わない」

やはりああいう時間は、何とも言えない味わいがある。別れを前にして、仲間がいてくれることの嬉しさと言ったらない。

山田中がふと、窓へ近付いて「ちっち」と舌をならした。嫌な予感がしてそちらを見ると、彼は白い塀の上の猫を呼び寄せようとしていた。

「おいおい、勘弁してくれ。猫アレルギーなんだ」

「え、そうだったのかい？ ああ。だからペットボトルを……。ええい、忌ま忌ましい猫め！ 帰れ！」

自分で呼び寄せておいて、山田中は猫を追い払った。猫は「解せぬ」といった感じで鳴いて去って行った。左治木も上下も、その様子を見て笑っていた。私はほっとして作業に戻った。

山田中はしばらく窓の外を眺めていたが、やがて眩つぶやいた。

「足りないんだよなあ……」

「何がだ？」

「材料がね。事件の謎を解く材料が足りないの」

「事件とは何の話だ？」

私が聞くと、左治木が引き取った。

「ああ、山田中が言っていていやがるのは、この間の放火事件のことだろう。こいつは最近そればかり気にしてやがるんだ」

「答えは出ているんだよ。その答えを導き出す方程式も浮かんでいるんだけどねえ。単純な足し算なんだけど、どうにも、おでの目に見えている材料だと、答えの数字には届きそうもない」

左治木が笑った。

「よせよせ。文系が無理に数学にたとえようとしたって、格好がつかねえよ」

「もう、良いじゃないか。おでだって、ちよつとカッコ付けたかったんだよう」

私は苦笑して答えた。

「放火事件か。あの日は、今回の浮気騒動を知った寮生が悪戯いたずらしたのだろうと思ったよ。だから正直なところ私は、山田中を疑っていたんだがな」

「ええ？ そうだったのかい？ それは酷ひどいなあ。本当なら疑うべきはおでひどじゃなくて……上下かみしもの方なのに」

私はどきりとした。あらゆる可能性が頭の中を疾走した。

確か火を発見したのは棟長だった。上下はあの日、向かいの自室の扉を閉めて眠っていた——いや、眠っていたと証言しただけだ！ もし、もし私の部屋に火を放ち、その後部屋へ戻り、棟長に火を発見させ、何食わぬ顔で消化し、その際に何らかの理由で放火の痕跡を回収したのだとしたら？

私の肩が叩かれた。そちらを見ると、上下が笑いを堪<sup>こら</sup>えていた。

「何を思い詰めた顔をしている。山田中のジョークを真に受けるな」

「あははー。状況的には犯行が可能だけど、部屋の位置関係や行動からして真っ先に疑われちゃうから犯人だったら変過ぎるよねー。それに何より上下には動機が無いもんねー。うふふー。同期なのに動機が無いなんて、面白いねー」

面白くない。咳払いをして、私は机の収納の整理にかかった。水晶玉を取り出した。これは最後に鞆に入れて、大事に持ち運ぶことにしよう。左治木が尋ねた。

「おう、それがこの間話していやがった七瀬の、ええと、和子さんの水晶だな？」

「ああ。元々窓の前に飾っていたんだが、ぼや騒ぎで不安になって、こうして保管していたんだ」

沈黙が過<sup>よぎ</sup>る。おやと思って見ると、左治木と上下が不思議そうに窓の方——いや、山田中を見ている。山田中とはいえば、鼻の穴を最大限に広げたかと思うと、叫んだ。

「それだあっ！」

「な、何がだよ。いきなり大声を出すな」

「それが材料なんだよ。右沢っち！」

「そんな呼び方、今までしたことないだろう。この水晶がどうした」

「その水晶、窓のこっちらへんに飾っていたんじゃないかい？」

山田中は窓サッシの右側をわしゃわしゃと示した。正しくそこだった。

「ああそうだ。でもどうしてそこに置いていたと分かるんだ？ 彼女の指示なんだよ。」

部屋の間取り図を見せると言われてね。何でも風水に従えば、水晶玉はその位置に置

くと良いエネルギーが入ってくるんだそうだ」

「うん！ 入ってくるよ！ 入ってくるよ！ 強力なエネルギーがこう、ずばーつと

ね！」

山田中は右の窓の前に立ち、興奮した様子で対角線上のベッドを指した。

「ずばーつと、窓からエネルギーが集中して届くんだ！」

窓から届くエネルギー……私達はほぼ同時に声を上げた。

「太陽光か！」

「そういうこと！ 冬の低い太陽の光、虚空寮を囲む白い塀、水の入ったペットボト

ル。本来ならバラバラになっておかしくない筈はずの光は、窓辺の水晶によって一点集中！

破壊熱光線！」

「収しゅれん火災と呼ばれるやつだな」

ひなた

日向に置いたガラス製品やペットボトルが虫眼鏡の役割をし、太陽光を一点に集め火災に至る。冬に多いと言われる火災だった。

「ベッドへ真まっ直すぐに光を届けるには、水晶は窓の右側に無いといけない……左からベッドへ向けて光が差した場合、机に山積みされた参考書に遮られちゃうからね」

「あの晩俺から化学の参考書を借りやがったのは、これを調べるためか？」

「太陽の光の屈折とか、その辺りをね。全然載ってなかったけど」

「そりゃあ、内容的には理科だからな」

「結局、後輩の高橋が詳しくくてねー。収れん火災なんてものがあることを教えてもらって答えはそれだろうと思っただんだ……だけど塀の上のペットボトルはちょっと距離が遠いからねー。ベッドに光を集中させるには難しい。それでおでは、材料が足りないと嘆なげいていた訳だよ」

私は唸うなった。なるほど、左治木がこの男に一目置いている理由が分かった。もし私が水晶玉を机の中へ移さなかったなら、山田中はその日の内に事件の謎を解いていた

かも知れない。

「もつとも、本当に水晶で火が付くかどうか、証明は出来ないんだけどねー」  
私は、「もう一回やってみようぜ」と囁し立てた上下の頭を叩いた。



「——とまあ、こういったことがあった訳だ。どうだったかな？ 小橋君」

俺ははっとして、右沢さんと左治木さんを交互に見た。随分と長いこと、聞き入っていた気がする。

「いえその……すると仲違いの原因という」と

「まあ、そんなもん無かったってことだなあ。しかし、俺達は残った後輩達に、真相を話さなかった。いや、話せなかった。分かってくれるだろう。浮気騒動の真相が双子だったなんて格好悪い話を離せる訳がない。結局、白虎の女を青竜の奴が奪ったという噂だけが残っちゃったんだろうと思う」

「青竜の棟長だけにでも話しておけば、事態は変わったかも知れない。考えてみれば、あいつにとっては浮気騒動に加えて放火魔という見えない恐怖まで残されてしまった

のだから……」

俺はふと、あることが気になった。

「あの、そういえば右沢さんが彼女を寝取ったなんて噂は、どこから湧いて出たんでしょう。先程のお話したと、上下さんが聞き付けたということですが」

「さあな。しかし脈絡の無い噂が立つ可能性は、いくらでもあるみてえだな」

「どうということですか？」

「虚空寮では秘密は成り立たないということだよ。たとえば、左治木は恋人との関係を山田中にしか知らせていないようなことを言っていたが、私は上下以外の青竜棟生に話したことがあった」

「俺はその事実を知らなかった。知っていれば、また違っていたのかも知れねえ」

「そこにある情報が伝わらない。曲がって伝わる。秘密が筒抜けになる。虚空寮ではそんな現象は日常茶飯事だということさ。ま、そういった現象は会社や学校なんかでも少なからずあるだろうが、虚空寮ではそれが不気味な程に顕著だ」

「そして、流れ出した作り物の秘密は、白虎と青竜の仲を簡単に壊しちまう……」

右沢さんは明るい声で語り掛けた。

「だからね小橋君。君がやろうとしていることはきつと上手うまくいく。捻じれた糸は逆

方向に捻じれば良い。虚空寮は元通りになる。君が叫べば、君の声は寮に漂う」

「……はい。頑張ります。ところで、もう一つ気になったのですが」

少し躊躇ためらった。というのも、無粋ぶすいなような気がしたからだ。

「どうしたんだい。言ってごらん」

「その、右沢さんは、今も独身だと言うことですが」

「ああ、そのことかい。実は七瀬は、和子はあの後海外に留学してしまっただけ」

「留学ですか!」

「私は海を越える彼女を応援した。ずっと待っていると送り出したが……半年後に送られてきた手紙で、別れを告げられてね。向こうで結婚すると書かれていたよ」

俺が言葉に詰まると、左治木さんが豪快に笑い飛ばした。

「それ以来、こいつは女性恐怖症になっちまってな。情けねえ話だ」

「恐怖症ではないさ。ただ、一生和子を愛そうと誓っただけだ。左治木だって、二年も経たずに良子さんの浮気が原因であっさりとは別れたろうに」

「ああ別れたさ。元々お前との一件の時に別れる覚悟は出来上がっていたからな。白状な恋愛さ。まあ笑いたければ笑うが良い、そんな些細なことはどうでも良いのさ。

俺は誰より今の家族を愛しているんだからな」

二人が笑い合おうのを見て、俺はほっとした。この二人が住んでいた寮なら、きっと大丈夫だ。俺がやろうとしていることはきつと上手うまくいく。そう思えた。



「どうだい小岩井君。これが三十五年前の諷いさかいの全貌さ。実に下らないだろう」  
僕はびくりとして、返した。

「え、ええまあ、そうですね。いやあ、随分と長い時間話を聞いていた気がします」  
「実際俺も話し疲れたからな。下らないが、だが詰まらない話ではなかったらう？」  
「そうですね。何というかその、変な話ですが、話すのが上手というか……」

作られているとでも表現するべきか、僕が言い淀んでいると、小橋さんが同調した。  
「そうそう。何かはめられた感じがするんだよな。俺も左治木さんと右沢さんに言ったんだよ。『互いに一人の女を好きになったと思っていたら、実は双子だった』と、そう結論を教えてくださいたら一分で済む話なのに、どうして懇切丁寧に、時系列を追って話したのか……それを問い詰めたら二人は白状してね。俺が居酒屋に行った時、二人は口論しているように見えたんだが、その時、実は作戦会議をしていたらしいんだ。」

俺にどういふ風に話し聞かせるか。自分達の下らない体験談をいかに魅力的な『お話』として展開させるか。ああでもないこうでもないかね。そうしてあの場に臨んだらしい」

「あはは。それはありがたいことですね」

「誰だって、自分のとっておきの話をする時はワクワクするんだよな。上手く話したいと、そう思うんだ」

僕はこれまで奇譚を語り聞かせてくれた皆の顔を思い起こし、なるほどそうかも知れないと思った。

「それで、小橋さんの改革はすんなり上手うまくいったんですか？」

「改革なんて大袈裟なものでもないが、とりあえず白虎と青竜、両方の上級生の部屋を訪ねて意見を仰いだよ。ほとんどの人は難色を示したが、応援してくれたのが仏谷さんだった」

「え、仏谷さんですか？」

「当時の四年生だったからな。貴重な意見だと思って尋ねたんだ。『卒業していなくなる人の本音を是非聞きたいんです』って真剣に頼み込んだら、『俺は留年予定だ！』なんて怒鳴られちゃってさ。どう返していいものか困ったよ。あの人って体がでかいの

もあるけど、怒ったら手が出るって話も聞いていたし、かなり焦ったよ」

僕は当時の小橋さんの立場を想像して身震いがした。

「でも応援してくれた。『皆仲良しが一番だ』とか、そんな軽いノリだったよ。それで自信を付けて他の棟の同期と相談して、一年生を発起人とした棟生会議を開いたんだ。各棟の談話室で、青竜と白虎の関係ってのを掘り返して、おかしいから仲良くしましように話し合った訳だな。先輩にしてみればそれまでの生活ぶりを否定される訳だから、青竜棟は相当荒れたらしいな。院生や留年生は風習への愛着が強いから、一年生对上級生っていう多勢に無勢の状態になったそう。青竜ってのはバンカラ気質というか、昔気質が強くて折檻せつかんとかあったらしいんだ。それで会議が白熱すると、上級生がついに下級生に掴み掛つかかった」

「そ、それでどうなったんです？」

小橋さんは笑いながら答えた。

「仏谷さんに全員制圧されたらしい。院生も留年生も含めてね。先輩に手を上げたことで、影では仏谷事変ふつやじへんなんて伝説になってるんだ」

「それ初めて知りましたよ」

「そりやそうだろう。青竜棟には本人がいるんだからな。岡村辺りわかむらにこっそり聞いて

みろよ。仏谷事変のことを知っている筈だからさ」

「……岡村さんですか？」

はて、と思った。岡村なんて人が知り合いにいたのだろうか。

「おいおい白状なやつだ。お前の棟に院二いんにでいるだろう」

「あっ！ 岡さんですか！」

いつも岡さんで通してたから、すっかり忘れていた。あの人は岡村さんだった。

「まったく、酷ひどい奴だ。そうそう、白虎の方はと言えばだな、すんなり話がまとまった。白虎は良くも悪くもクールだからな。何となく嫌ってる相手を、何となく嫌わなくするという話に抗議は出なかった」

「それで、今みたいに仲良くなった訳ですか」

「まあ、実際には今年が初めてだろうな。上級生の中には頭で分かっているも上う手まく振る舞えない人も多かった。『一度嫌いになったら心変わりは難しい』——と、これは仏谷さんの受け売りだけだな」

「うーん。まさか仏谷さんが一枚噛んでいたとは。じゃあ今の寮があるのは仏谷さんのおかげですね。後は除籍でなく、無事に卒業してくれるのを祈るだけです」

「はっはっは。そうだな。あの、単位が足りないのは一年時の教科ばかりって話だ

から、多分ちやつかり卒業するだろう。俺はあの人と同じ年に卒業出来るのが嬉しいけどね」

そう言って小橋さんは照れ臭そうにビールを空にした。



## 開かずの机

朱雀棟の先輩に部屋飲みに誘われた。約束の時間までまだ時間があつたので、机の引き出しを整理することにした。

寮自治会活動のビラが毎週のように配布されるので、引き出しの中はかなり混沌としていた。こまめに捨てていくべきなのだけど、同じ寮生が一生懸命作ってくれたものだから、何となく溜め込んでしまっていた。

寮費徴収の日時のお知らせや、寮祭前夜祭の案内、新しい炊事人雇用のお知らせに、寮自治学習会の資料……。

これからも増え続けるだろうし、この機会に捨ててしまわなければ。それにしてもこの机、愛着はあるけどやっぱり不便だなあ。

整理を続けていると、奥からボロボロのビラが出てきた。

# 虚空寮寮歌

壺

新天の地に振り仰ぐ 漲る学徒集いけり  
 午と宵とに隔て無く 先哲の知に傾けん

練るは羨望 道の果て  
 喜び語らん 虚空にて

式

巡り見下ろす幸の国 流るる時悠奇堂川  
 学と遊とに精を出し 内なる海と喚起せん  
 撲つは朋友 肚の色

怒りて語らん 虚空にて

参  
世相の風に穂を揺らし 過去を映せし果ての道

知己と時宜とに恵まれて 紡ぐ万古の礎よ

啼くは雄叫び 雨の数

哀しみ語らん 虚空にて

四  
旧懐彩る四季の数 遙か貴き奇堂山

今と過去とに杯を 遺す宝の一滴

舞うは黄龍 星の群

人生語らん 虚空にて

その紙に僕は懐かしいものを覚えた。寮歌の歌詞カードだ。

ふと携帯電話を見ると、もう約束の時間になっていたので慌てて部屋を後にした。約束していた朱雀棟三〇一号室は扉が開いていた。中を覗くと誰もいなくて、僕は戸惑った。背後の三〇二号の扉が開いた。中から出て来たのは三年生の先輩だった。名前は確か永浜<sup>ながはま</sup>さん。小柄でずんぐりしているけど、大学のハンドボール部ではかなりの実力者らしい。ダメージジーンズに、同じくダメージ加工のキャップをかぶって、夜中にどこかへ出掛けるようだ。

「おや？ 君は確か青竜の一年生じゃないか。どうしたの？ 荒城<sup>あらかき</sup>さんに用事？」

「はい。ちょっと部屋飲みに誘われました」

「おやおや。厄介な人に捕まったねえ」

「いやまあ、僕もお酒は嫌いじゃないので」

その時、廊下の向こうから荒城さんがやって来た。白いよれたTEEシャツに赤いハーフパンツ。大きな体からガラガラでドスの利いた声を響かせる。

「おう小岩井。悪いな、便所に行ってた。何だ、永浜も飲むか？」

「いらないうすよ。俺はこれからお泊まりなんで」

それを聞くと荒城さんは永浜さんの尻を蹴った。いや、蹴る真似<sup>まね</sup>だ。

「何でお前みてーな肉団子に彼女が出来んだ！」

「荒城さんもリーヴ行けば何とかありますよ」

憎まれ口を叩いて永浜さんは去って行った。うーむ。うちでも太島わおしまに彼女が出来た

し、ふとつちよボウイの時代がやって来たのかも知れない。

「全く腹の立つ野郎だ」

荒城さんは四年生で、朱雀棟ではかなり存在感のある人だ。二十代前半にも関わらず見事に禿げ上がった頭はかなり貫禄かんろくがある。頼もしい感じと懐ふところの深い感じがして、どこことなく仏谷さんと似ている気がする……もちろん、こんなことを言えば仏谷さんは「ハゲと一緒にするな！」と怒るんだろうけど。

部屋に入ると中々の荒れ模様だった。机はあるけどベッドが無くて、萎しなびた敷き布団の上にクシャクシャのタオルケットが置いてある。万年床らしい。周囲には空き缶や弁当の容器が散乱していた。

「せっかくの機会だから奮発してエビスを買ってきたぜ」

「おお！ ありがとうございます」

「割り勘だな」

「……はい」

「奢おごりの風習は青竜だけだ。悪く思うな」

乾杯を交わしてしばらくは互いの趣味や勉学のことを話した。勉学と言ってもまだ共通科目中心の僕にはあまり話すこともなく、荒城さんの卒業論文の内容を聞いてばかりいた。

「学生寮がテーマなんですか？」

「面白そうだろう。文化人類学のテーマとしては十分に魅力的な題材だ。虚空寮は来年で築百年。濃縮された野郎の生活を一世紀刻んでる訳だからな。こんな興味深い材料は無い。それに知り合いを当たって全国の寮からアンケートも実施中だ。もつとも、今も自治が機能している寮は数える程しかないが」

「へえ。卒論って何でもありませんね」

「ああそうだ。ゼミの分野がカバー出来る範囲なら自分が好きなもんを研究して良い。志があればこんな面白い勉学は無い。だから三年時のゼミ決めは慎重にな。中には卒論を楽に終わらせるためにゼミを選ぶ奴もいるが、卒論は学生生活の締めなんだから、マジに考えるべきだ」

僕は唸った。一体何を研究しようか。数学が苦手で何となく文系推薦入学した僕にとって、これは中々の難問だ。まだ先の話だと思っただけでも二年間なんてあつと言う

間だろうし。

「僕も何か勉強したいこと見付けないとやばいですね」

「その内見付かるだろうよ。ここに住んでいればな。遊び人も多いが、自信を持って勉強してる奴もたくさんいるから」

荒城さんと同じタイミングでビールに口を付けた。一瞬沈黙が出来る。ふと、先程部屋であつた出来事が思い出された。

「さっき部屋で、何となく机の中を整理してたんですけどね」

「机？　こんな中途半端な時期に大掃除か？」

「大掃除って程でもないんですけどね。机の右側って引き出しスペースになってますよね。でも僕のは鍵が壊れてるらしくて、一番下のでかい収納スペースが使えないんです。それで小さい方の引き出しに寮のパンフレットやビラが溜たまっちゃって、整理してたんです」

「鍵が壊れてるとはついてないな。どこかにまともな机が余っていないのか？　同室は誰だ。言えば取り替えてくれるだろう」

「いえ、交換しようという話は出たんですけど、その頃には愛着が湧いちゃって、別に良いって僕の方で断ったんです——それでまあ、溜たまったビラを整理してたんです

けど、ビラの中から寮歌の歌詞カードが出てきて。凄く懐かしかったんです」

「懐かしいって、まだ一年も経ってないじゃないか」

荒城さんは可笑しそうに言った。

「そうなんですけどね。今から思うとあの時の、寮に入った当時の感覚ってもう完全に、自分とは別人のような感じがするんです。新しい場所で新しい人達に囲まれて、皆で酒飲んで酔い潰れたと思ったたら六時に叩き起こされて、寮食堂に集まって——」

「寮歌指導か。あれはしんどいよなあ」

「まじでビビりましたよ。昨日まで笑顔だった先輩がポコポコの金属バット持って歩いてる中で歌を歌うなんて……自分の人生にあんなシーンが訪れるなんて思いませんでしたよ。寮見学の時は、そんな時代錯誤なバンカラな感じは無かったですし」

「そりゃあそうだろうなあ。あれは上級生にとっても地獄だからな。歓迎飲みして二日酔いで怖い顔しなきゃならんものだから」

「じゃあやらないで下さいよ」

「そうもいかん。あれがあるのと無いのとじゃあ、気の引き締め方が違う。虚空寮生としての団結力が違う」

真顔で言い放つ荒城さんに僕は苦笑したけど、実際そうだろうと思う。高校を卒業

してもう自我が形成された人間が一つとところに集まるんだ。「ルールを守れ」と言い付けるだけでは、こういった場所は成り立たないだろう。ああいう姿勢を見せることが必要なんだと思う。たとえば形だけでも、その形を作れるという事実を見せ付けられると、僕達一年生は完全に呑まれる。

「しかし、寮歌か。しょっちゅう歌ってるイメージがあるから上級生はあまり懐かしいという気分にはならないかも知れんな。そうそう、あの地獄の寮歌指導員のメインは三年生なんだよな。俺も去年やったぜ」

「それ、はまり役ですね。目茶苦茶怖めちゃくちやそうです」

「実際評判良かったからな。後輩からも先輩からも」

荒城さんは得意気だった。

「指導員も大変なんだぜ？ 三月、お前らが入って来る前に、先輩方に指導員としての指導をつけてもらわなきゃならんのだから」

「指導のための指導ですか？ それも大変そうですね」

「俺の時は、お前の棟の仏谷さんにみっちり鍛えられた。声の出し方や立ち居振る舞い、一年生に恐怖心を植え付ける方法をみっちりとな」

それはまた、あの人らしいというか何というか……。

荒城さんは二本目のビールを僕に渡して、自分も二本目のプルタブを開けた。僕はまだ飲み途中だったけど、荒城さんはもう一本目を飲み終えたらしい。禿げ上がった頭が真っ赤だ。もちろん、頭とひとつづきになった顔も真っ赤だ。意外とお酒には弱いのかも知れない。

荒城さんは機嫌良さそうに、寮歌について語り始めた。

ふと、僕は自室の机を思い起こした。今日僕が机を整理しなかったら、荒城さんは寮歌の話をするには無かっただろう。突き詰めると、机の鍵が壊れていたからこそ、それを交換しなかったからこそ、荒城さんは寮歌の話をしようとしている。

つくづく、僕は奇妙な場所に住んでいると思う。



イベントの締めとして度々歌われる寮歌だが、知られざるエピソードがいくつある。指導員になると決起飲みで色々聞かされるんだが、指導員にならないと知らずに卒業する、そういう類のものだ。

まず寮歌にはタイトルが無い。歌詞カードにも「虚空寮寮歌」としか書いていない

だろう。通称が寮歌で、それがすべて。タイトルを付けないことを、寮歌を作った先輩が決めたんだそうだ。だから何だと言われると困るが、まあタイトルが無いというのも味があるだろう。

それから作曲者、作詞者の名が刻まれていない。もちろんかつての虚空寮生が作ったものだが、彼らは名を残そうとしなかった。長い歴史の中でメロデイが変わったり歌詞が変わったりすることを望んでいたということだ。

実際に変更が加えられてきた。委員会室で五十年位遡って資料を漁ると、新入生に配った歌詞カードが出てくるんだが、その歌詞を今のものとを比べると、言葉の端々はじばじが微妙に違うんだ。まあ大意は同じだが、歴史的仮名遣いでも言うか、あまりにも馴染みのない言い回しは何かの折りに改変が行われているようだ。伝統を重んじれば歌詞を変えるなんて言語道断だろうが、こういうところが虚空寮の破天荒なところだと俺は思うね。歌詞を変えた年には、先輩方も覚え直しているということだ。うっかり前の歌詞で歌って一年生の前で恥をかくこともあったのかも知れない。そう考える  
と――。



ふいに頭が割れるように痛み、立ち上がった。パイプ椅子が音を立てて倒れた。固い音が響き渡る。

「何だ、急に……」

悲鳴のような痛みが引いていくと、嘘うそのように意識がはっきりしてくる。傷だらけの長テールの上には空き缶と、飲みかけのウイスキーのグラスがある。

先程までの酔いがどこかへ消え去ってしまったかのように、頭が冴える。神経が過敏になっているのだろうか、周囲がやたらと気になり見渡した。しかし当然ながら、誰もいない。ひび割れた天井、タイルの剥がれた床、傾いた黒板……そうか。

扉の向こうの渡り廊下の闇に、またも視線を感じる。強い視線だ。今度こそ見付かったようだ。

「——すみません。怪しい者ではありません」

十二分に怪しいのだが、言わないよりはマシだろう。続けて虚空寮のOBだと名乗り、懐中電灯を灯し廊下へ向けた。渡り廊下が照らされ、黄竜棟への曲がり角まで露あつわ

になった。

誰もいなかった。私は溜め息をついた。また、気のせいだろうか。

床へ視線を落とす。倒れた拍子に畳まれてしまったパイプ椅子を見つめた。そうして、これまでに小岩井の意識を通じて見聞きした奇譚を、思い返した。

意識ははっきりしているというのに、夢の中の出来事のようにすべてがぼんやりと消えようとしている。その不思議な話の一端が、ジグソーパズルのピースの、さらにその欠片のように飛び散っている。

その小さな記憶の粒の中で、小岩井は確かに、同室の名を乃田と呼んだ……私の名だ。

「私は、奇譚蒐集など、実行していないのかも知れない」

信じ難いが、しかし消し去り難い確かな感覚がある。

瞼まぶたが熱い。立ち竦んだまま俯き、瞼を揉んだ。一つの事実が生まれようとしている。

私は小岩井が聞いた奇譚のいくつかを知っていた。それは確かに、私も小岩井と同様の奇譚蒐集をした可能性を示唆しているが、それは不自然だ。どうして今までこんな根本的な問題に気付かなかったのだろうか。

親交の浅い他棟の住人と気安く酒を酌み交わすなど、私に、そんな社交性があるとは思えない。

談話室を出て左を向く。懐中電灯を消しても良い程に、廊下を挟み並ぶ居室からは月明かりが漏れている。振り返るとやはり、向こう側の廊下にも月明かりが並んでいる。すべての居室の扉が開けられているのだろう。これまで気にしなかったが、何とも奇妙なことだ。最後の虚空寮生はここを去る時、示し合わせて扉を開けておいたのだろうか。あるいはその後訪れたOB達の手によって——いや、きっと防犯か何かの理由で作業員か大学の職員によって開けられたのだろう。

私は首を振って二〇三号室へ向かった。大学四年時の、卒寮時の私の部屋だ。

廊下をスリッパの擦れる音が響く。長い廊下の反響で、後方から誰かに尾けられているような錯覚に陥る。左右の部屋を逐一覗きながら歩いた。途中、懐中電灯を持つ腕に蜘蛛の巣の感触を覚え、舌打ちをした。

奥から二番目の部屋、二〇三号室を覗いた。他の部屋と同様、ブラインドカーテンは完全に上がっていた。部屋の中はやはり十分明るく、私は懐中電灯を消した。

二人部屋の配置だった。両側に傷んだマットだけのベッドがあり、その奥に事務机がある。洗濯ロープは張られていない。床のカーペットは取り除かれて、廊下と同じ

白いフローリングが晒されている。

記憶が揺り起こされていく。私は大学四年時、一年生の同室を迎えた。通常一年生の同室は二年生が迎える。しかし私は、ある理由から同室を迎えることにしたのだ。

年度末、部屋移動の慌ただしい最中、物置部屋から机とベッドを引っ張り出し二人部屋をこしらえたのを懐かしく思い出す。

扉から見て左側が私の居場所だ。私はスリッパのまま部屋へ進んだ。埃が積もっているだろうが、構わず事務椅子に座った。机の上を払った。掌に引っ掛かるようなざらつきが纏わり付く。

しかし何より、席から眺める景色に私は打ちのめされた。同室の席へ体を向け、背もたれをギシリと鳴らすと、壁の上部に備え付けてある本棚の下に頭が収まる。溜め息が出た。

向こうの本棚を見つめる。無論何も無い。視線を下ろしていく。私は喉を鳴らし、立ち上がった。

そうだ。同室の机——小岩井の机だ。

間違いない。やはり小岩井は、私の同室だった。そして私は、小岩井からいくつかの奇譚を話し聞かせてもらっていたのだ。奇譚収集などしていない。ただ、小岩井か

らの又聞き。ただそれだけだったのだ。

堪らず、ちりちりとした笑い声が漏れた。何と情けない話だろう。後輩に聞かせてもらった話を、自分で聞き歩いたものと勘違いするとは。

私は小岩井の机の天板に手を触れた。どの居室でも使われている事務机。天板の左側には浅い引き出しがあり自分の脚が入る。右側がメインの収納スペースとなる。上中下段の三つの引き出し。下段の引き出しだけが大きく、クリアファイル等を縦に格納出来る。上段の引き出しの取っ手の横には鍵穴がある。ここに鍵を掛ければ、右側の三つの引き出しにロックが掛かる。

私は引き出しの、一番下の取っ手を見つめた。耳鳴りが強くなっていく。

——『鍵が壊れてるらしくて、一番下のでかい収納スペースが使えないんです』  
そうだったな。小岩井。この引き出しは、この引き出しの中には——。

耳鳴りが消え、視界が真っ白になった。



夏休みには同室の先輩としばらく顔を合わせなくなる。すると久しぶりに再会した

時の第一声はどうしたものかと、僕は戌亥達と盛り上がったことがある。散々候補が上がったけど、結局「お久し振りです」で良いんじゃないか、という結論に至った。夏休みも終わりに近付き、寮がいつもの騒々しさを取り戻した頃、ようやく乃田さんも帰寮した。いつも通りの地味なシャツにジーンズ。おシャレの欠片もない人だ。……ま、僕もだけど。

僕は用意しておいた言葉で迎えた。

「お久し振りでです。乃田さん」

「おう小岩井。一人部屋生活は満喫出来たか？」

乃田さんは心なしか太った気がする。休日なんかはずっとインスタント麺で不健康に痩せていた人だから、きつと実家で良いものを食べて暮らしていたのだろう。

それでも顎の細い輪郭に一重<sup>まぶた</sup>瞼は、相変わらず愛嬌が無い。ただでさえきつい目つきに真つ黒な前髪がかかって暑苦しい。まあ、あの肌の白さでは坊主頭なんかは百パーセント似合わないだろうけど。

「談話室の前にお土産置いてあるから、無くなる前に取れよ」

「じゃ、早速取ってきます」

直接渡してくれたら良いのに、と内心思いながらスリッパを鳴らして談話室へ向か

った。東京の上品そうなチョコレート菓子だった。人数にギリギリ足りない位の数だ。もう半分程しか残っていない。

こういう時のお土産は棟生全員に行き渡る量のお菓子を買ってくるものだけど……気の利かないところが乃田さんらしい。

「何とか間に合いましたよ。ありがたく頂きます」

「おう」

二〇三号室に戻ると、乃田さんはバッグからノートパソコンを取り出していた、ものの五分で見慣れた風景になった。

そういえば乃田さんの実家は青森だった筈<sup>はず</sup>だけど、何でまた東京土産なんだろう。まあ良いか。リングよりチョコの方が好きだし。

お土産のことには触れないように、夏期休暇の話をだらだらと楽しんだ。乃田さんはいつも通り自堕落な生活を送っていたようだ。体重ばかり増やしたと自嘲気味に笑った。正直笑いにくい。

まあ僕の方もどこかに旅へ出る訳でもなく、自慢出来るような時間の過ごし方はしなかったと思う。

夕闇からペットを借りたという話題に、乃田さんは思いの外食いついた。

「本当かよ。そんな店寮に来たことないのに」

「夏休み限定なんじゃないですかね。無料サービスの時と返却の時の二回しか夕闇トラックは見ませんでしたし」

「うーん、一年の時の夏休みは寮に残ったんだが、そんな面白い話は無かったがな。真っ黒なトラックなんて目立つだろうに、街中でも見たことは無いな」

乃田さんのテンションは基本的に低い。だけど変わった話には意外と食いつく。だからキャロラインなんていう戌亥のセンスのないネーミングにも食いつく筈だ。僕は楽しみにしてキャロラインの名を明かしたのだけど、そのネーミングには何の反応も示さなかった。案外乃田さんもセンスがないのだろう。

キャロが玄武棟で飼われることになったというのを聞いて、乃田さんは「後で見に行くかな」と呟つぶやいたけど、多分行かないだろう。この人は基本的にコミュニケーションが下手で、引きこもりだ。他の棟にほいほい顔を出せる性格ではない。

そういえば今日は珍しく、乃田さんは会話を続けようとしている感じだ。久し振りに会って二、三言でやりとりが終わるのも気まずいのだろう。居心地は悪いけど、嫌な気持ちはない。

ふと、乃田さんは僕の机に視線を落とした。

「しかしその机、不便だろう。やっぱり物置部屋の奴と取り替えるか？　せつかく時間もあるし」

「いえ、流石にもう慣れましたし、特に入れたい物も無いですから」

僕の机の右側の引き出し。上段と中段は普通に使えるけど、下段の大きいサイズがなぜか開かない。上段の取っ手の横には鍵穴があるけど、何度鍵を回しても、下段の机だけ反応が無いのだ。入寮当初は困惑したけど、正直今は愛着が湧いてしまっている。

「なあ、その机の話、聞きたかったりするか？」

「机の話……って言うത്？」

「まあ、小岩井が好きそうな話だよ」

乃田さんは笑みを浮かべた。僕は戸惑った。この引き出しはてっきり故障か何かで開かないのだと思っていたけど、曰く付きだとは聞いていなかった。

だけど入寮初日、僕が下段の引き出しだけ開かないことを話した時、乃田さんが「ああ、この机だったのか」と呟いたのを思い出した。きつと、ある机の引き出しが開かない、というエピソードが存在していたということだろう。

これは丁度良い暇潰しになりそうだ。

僕が頷くと、乃田さんは顎を搔いて座り直した。椅子が軋んだ。開け放った窓の外では、セミの声がさざ波のように響いている――。



俺らが使つてる机つて大学からの支給品なんだよな。それこそ、ずっと昔から寮で使われ続けているんだ。その部屋の住人が卒業したら、次の住人がその机を使うことになる。

――それが大昔から繰り返されて、今俺達が使ふことになつてる訳だ。もつとも、机が同じ部屋で使われ続けるとは限らない。

新入生を迎える時には部屋替えがあるからな。一人部屋を作るために机を減らすこともある。

俺の場合は逆に、それまで一人部屋だったのを二人部屋にするため、机を追加した。小岩井のその机は二二三号に置いてあった奴だ。二二三といえばトイレ挟んで向こう側の角部屋で、いわゆる物置部屋だな。

クーラーボックスやら釣り道具やらスキー板やら、過去の遺産が眠つてる部屋だが、

余った机も四つ程入れてある。知つての通り、かなり混沌とした整理状態だ。

三月半ばのことだ。お前を迎え入れるために部屋を作ろうと思つてな、同期に手伝ってもらつてニ二三から机を出した。もちろん一番手前に置いてあるやつだ。奥のやつを取り出そうと思つたら大仕事だからな。

……まあ、その手間を惜しんだ結果が今という訳だ。お前には不便な思いをさせているが、まさか開かずの机だとは思つてなかつたからな。お前に言われて初めて知つたんだ。悪く思うなよ。

で、その開かずの机に、実は面白い話があるんだ。

あれは俺が一年の頃の夏期休暇の時だ。青森まで何時間もかけて移動するのも面倒だったし、ゴールデンウィークに一度実家に帰っていたというのもあって、俺は寮に残ることにした。お盆をすつ飛ばすのもどうかと思うが、まあ当時はとにかく寮に残つたんだ。

休暇の最初の方は寮生も多かったが、八月末にはもう仏谷さん位しか残っていないかった。その仏谷さんが俺の部屋にひよっこり顔を出してな、飲みに行くぞと誘つて来たんだ。あの人は基本にお金が無いから滅多めったに店では飲まないんだが、ついて行つて理由が分かった。その店にな、OBが一人待ち構えていたんだ。緊張したよ。ただ

でさえ人見知りなんだ。正まことに前門の虎、後門の狼ってやつだな。仏谷さんとOBに挟まれて地獄だったんだが、この時出会ったOBが、小岩井の机と深い関わりのある人だったんだ。

そのOBは上うえ町まちさんといって、卒業後は東京のSE会社で働いている人だった。システムエンジニアってのはプログラミングの知識ももちろんあるが、顧客と接して、顧客の望むシステムの設計書なんかを仕上げたりする、まあ相談屋みたいな側面も持っている職種だ。

だからだろうな。上町さんは表情豊かで話し上手だった。清潔感のある髪は三十代の働き盛りの雰囲気によく合っていた。仕事のついでだったのかは知らないが、ワイシャツ姿だった。高級そうな銀色の腕時計もしていたな。

俺は内心沈んだ。ああいう性格だったら毎日がそれはもう楽しいんだろうな。明るい奴を見る度に、俺はよく沈むことがあるんだが……まあそれはさておいて、その時上町さんはこう切り出した。

「今も青竜棟にあるのかな、開かずの机は」

「開かずの机ですか？」

俺は不思議に思って聞き返したが、仏谷さんが「まだあります」と答えた。俺がそ

の机の存在を知らないということ、上町さんはやにやしなから語り聞かせてくれたよ。上町さん自身が、開かずの机を開けようと試みた時のことをな。



僕は思わず身を乗り出した。

「これ、開けようとしたんですか？」

「中身、気になるだろ？ 見えないものは見たくなるもんだ。それにその机、やけに重いからな」

秘密を知っていることを得意がるような顔で、乃田さんは笑った。きっと話に聞く上町さんも同じような顔をしたのだろう。

乃田さんは自分の机の、真ん中の引き出しを開けて見せた。箱がスライドして半分程引き出される。中には講義で使うらしいレジュメ類がクリアファイルに入っているのが見えた。乃田さんはそのままスライドを続け、引き出しを取り去った。

外れた引き出しの先には細かいレール部分が続いていて、滑車が付いている。ほうほう、そんな風になっていたのか。

「実はこうして真ん中の引き出しを取り出すと、一番下の引き出しを覗く<sup>のぞ</sup>ことが出来る」

言われて乃田さんの机を覗き込むと、なるほど確かに下の引き出しが丸見えで、フイル類の背が並んでいるのが見えた。

これは良いことを聞いた。実はずっと気になっていたのだ。早速取り外してみよう。レジュメが数枚入った中央の引き出しを完全に引くと、引っ掛かりを感じた。ガタガタと縦に揺らすと簡単に外れた。その下の引き出しの中身は――。

「あれ？」

「そうなんだ。なぜかその机だけ、真っ黒い天板らしいものが張ってある。叩いてみる」

言われるままに黒い板を叩いてみた。金属製で、薄い訳ではなさそうだ。たわみも生じないその黒い板は、下の引き出しを密封するように張り付いている。まさにブラックボックスだ。

……ムカつく。

「ムカつくだろう？」

「え？ まあ、はい」

乃田さんは自分の中央の引き出しを元に戻しながら言った。

「上町さんも腹を立てたらしい。それで、どうにかバラそうとした」

「バラす？」

「解体だな。机の右側の引き出しスペース、両サイドを囲っている金属板は机本体とネジで止まっているんだ。囲いから引き出せないんだったら、囲いを取り払っちゃえば良い——やってみるか？　ちょうどその、取り外した真ん中の引き出しに頭を突っ込めばネジが見える筈だ」

どこから取り出したのか、乃田さんはプラスドライバーを持っていた。僕は受け取った。

「得意なんですよ。こういうの」

「そうか。俺は苦手だな」

言いながら、乃田さんはノートパソコンに向かった。後は勝手にどうぞということだろう。僕は一番上の引き出しも外し、覗き込んでネジの位置を確認した。なるほど、机の右端、天板と床とを垂直につなぐ板……これを緩めることは簡単に出来そうだ。

ネジはかなり奥まった位置にある。

「ちょっと足向けますけど、失礼しますね」

僕は半身に寝転んで左肘を床に立て、視線をブラックボックスの高さに置いて、右腕を奥に伸ばした。厳しい。ギリギリ届くか届かないかだ。九月の後半ではまだ部屋は蒸し暑く、すっかり汗ばんでしまった。

ガタガタと音を立てながらぐりぐりと右腕を伸ばし、頭を引き出しのあったスペースへ入れ込んで、左耳をブラックボックスに張り付けた。その時だ。

僕は動きを止めた。ぞくりとして、体中の汗が冷えていく。ある音が、ブラックボックスの中から聞こえる。ぴたりと付けた僕の耳から、その音が板一枚を隔てて聞こえてくる。

僕の呼吸と一緒にあって、吸って、吐いて、吸って、吐いて……ああ、息の音が聞こえる。人が息をしている！

頭を引き出そうとして、天板に打ち付けた。うずくまりながら引き出しから離れた。

「大丈夫かよ」

乃田さんがすぐ近くにしゃがみ込み、僕の顔を覗き込んだ。その顔はどこか楽しげだった。

「何か聞こえたとか？」

息が聞こえた。人の息遣いが聞こえた。

僕が信じられない気持ちでそう言うのと、乃田さんは「まじかよ」と立ち上がった。そして自分の席に戻る。

「上町さんも同じことを言っていたんだ。真夜中に作業しようとして、呼吸音に気付いたんだと。中に人が入ってるって大騒ぎしたらしい。でも誰も信じてくれなかったそうだ。他の奴が耳を近付けても、何の物音もしない。上町さんは事務員さんにこのことを訴えようとしたらしいが、周囲の皆に引き止められた。そりやそうだ。その引き出しはどう見積もっても人が入れる体積じゃない。音が聞こえるのは上町さんだけだ。もしそんなことを喚こうもんなら、精神病院いきだよ」

「でも、本当に聞こえるんです……」

「ところが俺には聞こえない。お前が留守の時に確かめてみたことがあるんだ。俺には何の物音も聞こえない」

「じゃあ、乃田さんが開けてみて下さいよ」

「それは無理だ。気分が乗らない」

「どうしてですか!」

自分でも驚く程、大きな声が出た。

しばしの沈黙の後、乃田さんは「すまなかった」と言った。

「上町さんの時も同じだったらしい。上町さん以外の人には聞こえない呼吸音。それならと上町さんは他の人に解体を頼み込む。ところが誰もがその頼みを断る。開けるのは嫌だ。中を暴いてはいけない気がする……そんな訳で、この机を物置部屋に封印したんだと」

「封印？」

「物置部屋の奥の奥にな。ところが、この机は物置部屋の一番手前に来ていた。不思議なもんだ。いつの時期か知らないが——そうだな、大掃除でもしたのかも知れない。一端机を外に出して、室内を掃除して、戻した。その時に一番手前に来てしまったのかも知れない……」

僕は乃田さんの話を聞きながら、どうした訳か、苛立ちが収まっていた。それなら仕方無いという、自分でも妙な気持ちに支配されていた。

乃田さんはもう一度「すまなかつた」と言い立ち上がった。

「物置部屋の他の机と、取り替えよう」

質問ではなかったから、僕は従った。



——埋め尽くされていた真っ白な光が、やがて揺らぎ、視界が取り戻される。よろめき、私は踏み止まる。

息を整えた。月明かりに浮かぶ、殺風景な二〇三号室の輪郭を捉える。

全身を冷たい汗が這っている。首を振り、笑いが込み上げてくる。あの時の恐れおののいた小岩井の顔、あれは笑えた。あの顔が見たくて、私はずっと黙っていた上町さんの話を悪戯心いたずらに乗せて伝えたのだ。

いや、悪戯心だけでは無かった。小岩井が学部の飲み会などで明け方まで戻らない日、私は幾度か開かずの引き出しへ耳を持っていったことがある。何度やっても、人の息など聞こえなかった。上町さんの話は冗談だったのだと思った。しかし諦め切れなかった。だから小岩井に話した。期待を込めて、小岩井なら聞こえるのではないかと——結局、期待は悔しさに変わった。

他の者には誰一人聞こえない息を上町さんは聞いた。私に聞こえない息遣いを小岩井は聞いた。

皆、ずるいぞ。どうして私だけ、こんなに詰まらない思いを……。

確かについ今し方、私は小岩井の意識を通じて、身の毛もよだつような息遣いを聞くことが出来たが、しかし、あれは私が聞いた訳ではない。小岩井が聞いた音を、小岩井を通じて感じたに過ぎない。言わば又聞きである。

ああ、そうだ。又聞きなのだ。

私は小岩井の怪談話が好きだった。小岩井が、誰かから聞いた話を私に聞かせてくれる。それが楽しかった。

格好悪いな。そうして楽しんでおきながら心の隅では、何も起こらない自分自身が嫌で堪らなかった。惨めだった。私には何も無い。何も起こせない。何も変えられない。誰も変えられない。

ふと、小岩井との会話が蘇る。

『何か、僕がしてるのを怪談集めって呼ばれるのがちょっと嫌なんですよ』

『だって怪談集めだろう？』

『いや、僕実は怖いのが苦手なんです。だから別に怪談じゃなくても良いんですけど……』

『……どうにかして不思議な話ってニュアンスを出したいです』

『なら、奇譚ってのはどうだ？』

『奇譚ですか、格好良いですねそれ』

『奇譚集め、いや、奇譚蒐集つてのが良いかもな。ほら、画面見ろ。蒐集つて漢字はこれを使う。ホラー作家なんか、この字が好きらしくてよく使うんだ』

——私の下らぬ提案を、小岩井は採用した。腹の内ではどう思つたらう。あいつは本当に乗り気だつたのだろうか。溜め息たいきを付き、机へ視線をやつた。

月明かりを受けて、天板が白く浮かび上がっている。私はしゃがみこみ、下の引き出しへと、手をゆつくりと伸ばした。やがて人差し指と中指の先に、金属の冷気がぬるりと伝わつた。唾を飲み込み、指を取つ手に掛ける。

開くだろうか……きつと開くだろう。開かずの机は物置部屋か、あるいはもう処分されてしまったか、いずれ私の手の届かないところにあるのだろうか。

私はゆつくりと、瞬きをした。夏虫の鳴く声を聴いた。気流の音を感じた。心臓の音を数えた。そして五月蠅うさい程に響き続ける息遣いは、やはり私自身のものだ。

私は指を離し立ち上がり、談話室へ戻つた。倒れたままのパイプ椅子を立て直し、座つた。

全身の汗が冷たい。ボウルの中の氷はもうすっかり溶けてしまった。無意味なアイスピックで、水を混ぜた。

グラスにウイスキーを注ぎ、一口飲んだ。

夏の虫は相変わらず鳴き続けている。その声をしばらく聞いていた。

二年前に両親が死んだ。結婚はしていない。親戚とも疎遠だ。仕事はつらいばかりだ。

私には、何があるというのだろう。視界が歪み、霞んでいく。

だがしかし、私がかここまで生きてきたのには意味があったのではなかったか。

「意味があるなどと、お前のような者が、なぜ思える」

誰に問う訳でもなく、<sup>つぶや</sup>呟いた瞬間、また、私の視界は白く染まり奪われた。